
龍と書いてドラゴンと読む！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍と書いてドラゴンと読む！

【著者】

Z5235C

【作者略】

雨月

【あらすじ】

少しばかり世の中を甘く見ていた少年はうまくいかない世の中に少々の不満を持っていたが、楽しく過ごしていた。しかし、とある存在との出会いで彼の考えは徐々に変わっていく・・・かもしねれない。

第一話・鏡輔とシルバ

一、

世の中というものは意外と厳しいらしい。そんなことを知ったのは僕が高校一年生になつてからである。さて、何でそんなことを言うかと聞かれたときに答えるべき言葉は以下のようになる。

いや、正直高校に入る前には青春というか、彼女の一人ぐらいでいるものかと思っていた。

以上のことである。

いまだに、できてはいないし、今のところ女子とは話をしていない。幼馴染が女の子だつたらそりや、小さい頃から話せたのかもしれないが、残念ながら僕の幼馴染は男だつた。

ここであきらめてはいけないと僕は幼馴染に姉か妹がいないかと期待したのだが、いなかつた。今のところ僕の記憶の中で犬に襲われている女の子を助けたとか男子にからかわれている女の子を助けたとかそういうことは一度も無い。あれば、お礼であつたとしてもちよつとは『助けたのだからもしかしたら恋に発展するかも・・』という考えを僕は一時の淡い期待をもつことができたかもしれない。

そんなこんなで気がつけば僕は高校一年生になつていた。今のところ、携帯の電話帳に性別女は母さんしかいない。ああ、僕に妹でもいたらなあ・・・いや、それでは変態だな。

どこかに女の子が転がつてないかな？

こんな考えをもちながら隣を歩いてくれる女の子もおらずに寂しく一人で帰路についていると誰もいない公園の前に差し掛かった。この公園はよく夜中にバイクをぶんぶんとばすお兄さんが使用している公園だ。たまに、エロ本なんかを見ているようで忘れたのか捨てるに捨てられないのか公園のトイレなんかに置いていつたりする。

「・・・・・今日はあるかも・・・・・」

そんな淡い期待とともに僕は男子トイレにまつじぐり・・・・・な何・・・・男子が男子トイレに行くことは別に間違っちゃいない。正しい行為なのだ。

「！」

鏡がおいてある近くに何か四角いものが入っているビニール袋を見つけた。どうやら、今日は当たりの日のようだ。今日はついていり・・・・・と、集中していたのが間違いだつたのか知らないが突然、肩をたたかれた。

「・・・・・」

もしかして、所持者が取りにやつてきたのか・・・・・と心の隅で考えながら僕は咳払いをして鏡を見て・・・・・絶句してしまった。

あんぎゃー

そこには、鱗が見事に輝いている蛇のようなトカゲのようないや、一般的には龍というのだろう・・・・・存在が僕の肩に前足を置いていたのであつた。

「・・・・・」

未知との遭遇に驚く僕に対し、相手はいたつて礼儀正しかつた。まず、僕の視線が自分に向けられたのを知ると、僕に向かつて頭を下げたのであつた。そして、前足で胸の部分をさすつているようだ。このジェスチャーから示されるのは・・・・

「・・・・・おなか減つてるの・・・・?」

頷く龍に僕は感心しながらかばんを探る。いやはや、女の子にはもてないが・・・・そういうえば小さい頃から犬とか猫とかからは人気があつたな、僕そういえば小学校の間はずつと生物係だつたな・・別にうれしくは無いのだが・・・・・とりあえず、何か取り出そうとして食べ物が入っていないことに気がつく。

「・・・・・ごめん、何も持つてないんだ」

そういうと明らかに落胆した様子の白銀の龍はため息をついた。
とても、いたたまれなくなつた僕はあわててどうやら言葉を理解できる龍に話しかける。田を呑わせるのは怖かつたので背中の神々しい蒼色の毛に視線は送つてゐる。

「ちょっと待つて！そこにスーパーがあるから・・・そりだなあ、龍つて何を食べるのか知らないけど・・・何か買つてくるからね」
僕は迷うことなくスーパーに向かつたのだった。

男子トイレの前までやつてきて、僕は再び考え直した。

「いや、そもそもなんで僕が見ず知らずで怪しい化け物の餌を買に行かなきやいけないんだ？」

そこまで考えて天秤に工口本と袋に入つてあるプリンをかけてみる。結果、工口本のほうが重かった。

「・・・まあ、プリンに比べたら高いんだろうけど・・・おなかいっぱいになつたらいいなくなるよなあ？そうしたら、安全に拾つて帰れるかな？」

さつさと終わらせて帰ろうと思ひ、僕はトイレの中にはつて行儀よく待つていた龍にプリンを見せた。

龍はプリンを見たこと無いのか首をかしげたので（当然か）僕が三つ買つてきたうちの一つを自分の口の中に入れて食べて大丈夫だということを見せると納得したのか口を開けてきた。つまり、僕に食べさせることである。なんと、ふてぶてしい龍なのだろうかと思つたが、前足はよくよくみれば怪我をしているようだった。体もとじろじろ鱗が剥がれていて段々衰弱しているのか辛そうにも見える。

「・・・気に入るかどうか知らないけどどうぞ、召し上がれ。」

まるでワニに餌を上げているような気分になつたのだがその場合は鶏などだうと思つて考え直す。

あつという間にプリンを食べ終えて今度は僕の制服を呑める。
「残念ながら、今ので全部だよ。」

てつきり「ご飯の催促かと思つたのだがどうやら違つたようだ。首をぶんぶん振つて再び僕の制服を咥えて引っ張り始める。

「外？外に何かあるのか？」

外に出てみると特に何も無い。龍と一緒にいるところを誰かに見られたらどうしよう？ペットですといつてつづじるのだろうか？そこはかとなく不安な僕をよそに、龍は木の枝を口に咥えて地面に何かを書き始める。しかしあ、器用な龍だ。

「・・・家・・・か？」

まるで絵本に出てきそうな家（煙突に窓が一つ・・・）を書いて僕に見せる。そして、次に鶴が恩返しをしている場面（機織り機を鶴が使用しているところ）をうまく書いて僕に見せる。この龍が言いたいことは・・・

「・・・恩返しがしたいから家に連れてつてほしいうて？」

頷く龍に僕は困った顔をするしかなかつた。いや、女子より先に龍を家に入れるのはどうかと思うし・・・

「・・・まあ、今日は母さんと父さんが帰つてくるのが遅いから別にかまわないけど・・・龍の恩がえしねえ・・・期待していいのかな？」

じーっと龍のほうを見ているのだが龍は頷くこともなく僕の行動を待つていた。どうやら、だめだといつてもついてくるに違いないだろう。

「ひつちだよ。ついてきて」

まあ、H口本は後で取ればいいし折角龍が恩返しをしてくれるというのだ。ここは素直につれて帰つても大丈夫だろう。そう思い、僕は家に龍をほかの人にはれないようにつれて帰つたのであつた。

「ただいま。」

誰もいない家に一応、帰つたことを報告する。まあ、幽霊か誰かがいたら返事ぐらいは僕に聞こえないがしてくれるだろう。

僕は自分の部屋に白銀の龍を連れて行き、緑茶を出してみる。

「・・・粗茶ですけど・・・」

ペコリとお辞儀をしてそのまま口をつけて器用に飲む。心温まる
瞬間だなと思っていると龍はお茶を飲み終えたのだろうか？僕のベ
ッドに上ると上から布団をかぶつて動かなくなつた。どうやら眠
くなつたらしいと思って湯飲みをおぼんに入れて下に降りようとす
ると・・・

「待つて！」

唐突に声が聞こえてきた・・・布団の中から・・・

「・・・なんだ、しゃべれるんなら初めからしゃべつてくれよ・・・

「

そういうて僕は布団をはらいとしたのだが・・・いつの間にか人
一人ぐらいしか入つていないほどにしほんだ布団は全く動かなかつ
た。

「い、今、裸だから・・・恥ずかしいです！」

「・・・裸も何も・・・僕は龍の裸なんかに興味ないよ」
龍の過激な写真集とか作つたら意外と売れるかもしね。CG
なしで作れるぞ、きっと。

「そうじゃなくて・・・私、今・・人の姿をしてるの！」

「・・・・ああ、そなんだ。だつたら引き止めなければよかつ
たのに・・・」

そういうて再びおぼんを片手に僕は立ち去らうとした。相手は龍
だ・・・平静を保て、我が心よ・・・」ううときは冷静さを失つ
てはいけない。たとえ、龍に人権がなからうと、そういうこと（脳
内にはモザイクがかかつてます）はやつたらダメだ！

「ま、待つて！」

「また？これ以上はさすがに理性を保てないよ。用事は手短にして
ほしいんだけど・・・」

「わかつてます！ちょっと目をつぶつてください！-ゼ、絶対に目を
あけないで！」

言われたとおりに目を閉じると先ほどの龍はベッドから出てきた

らしい・・・

「！」

目を開けそうになつて鶴の恩返しを思い出す。そう、ここで目を開ければあのおじいさんと同じになつてしまつて恩が逃げてしまつ・・・必死になつて目をつぶる僕の頬を白銀の龍の手がつかむ。龍自身が言つたとおりにその手はすでに人間のそれと大差は無かつた。僕の知つてゐる手の中で一番のすべすべ感だ。

すりすりすりすり・・・

「あの、手をすりすりするのはやめてもらえませんか？」

「あ、ごめん」

手を放して僕は冷静であるうと試みる。

「痛いかもしないけど・・・我慢してください。」

そういうと龍は右手を僕の頬から放して・・・

「あいたっ！」

首筋に何かが当たつて熱くなる。触つてみると何か液体のようなものが手に付着・・・簡単な考えだが、どうやらこの液体は僕の血のようだ。

「・・・契約完了・・・どうぞ、目を開けてください。」

目を開けるとそこには銀色の髪の毛を腰まで伸ばし、途中を蒼色のリボンでまとめている少女が僕の高校の女子生徒が着ている制服を着ていた。ぱっちりとした目がかわいいものだな。

「・・・あの、本当にさつきの龍？」

「ええ、そうです。鶴だって人になれるんですから存在自体が神々しい龍が人になれるのは当然のことです。」

胸をそらしてそう告げるのは結構なのだが、とりあえず・・・

「何のために？別に龍の姿でもよかつたんじゃないの？」

「いえ、やはり人間相手には人間の姿をして接しなさいとお父様とお母様が言つていましたので・・・さて、恩返しを始めますね。本

当はすでに恩返しを始めているんですけど……

「あ、やつぱり恩返ししてくれるんだ?」

「当然ですよ。約束は守ります。」

しかし、こつこつに彼女が何かをしてこるよりは見えたかった。

「……あの、何をするの?」

「ここに住みます。いわば、座敷わらしだと思つてください。」

「座敷わらし……?」

「ええ、こりだけでステータスの足しになると思いますが。」

いや、どちらかといつといろいと問題が生じると思いますが?

「……あの、つまりこの家に住むと?」

「ちょっと違いますね。私が住むべきといひはあなたです。名前を教えください。」

「……僕? 僕の名前は……白河 鏡輔^{しらがわ きょうしうけ}……だけ?」

「なるほど……あ、ちなみに私の名前は“シルバ”です。これがらよろしくお願いします。」

「あ、うん……」

何がおかしいと思ひながらも僕は流されるまま未知との遭遇を

してしまつたのであつた。

「一人で寝るには少々、狭いですねこのベッド……」

「一人で寝る?」

「ええ、ほかに布団も見当たりませんし、この部屋は失礼ですが少々散らかっていると思います。これから掃除をしますから鏡輔さんは掃除機を持ってきてくれませんか?」

「あ、うん。」

僕は掃除機を取りに行き、戻つてきみると部屋はある程度すでに片付いていた。

「やつとこんなもんですか

「へえ、早いね?」

「得意ですからね、掃除……特に鱗の輝きを常に完璧に保つための掃除とかをやっていましたから

「

そうなんだといいながら僕は掃除機を龍の少女に渡して自分はベッドの上からその様子を眺めていたのであった。

しかし、僕とシルバは出会ったのであった。だが、これがまだまだ序の口だということを後に僕は知ることになる。

第一話・鏡輔とシルバ（後書き）

知っている方は知っていると思いますが、この小説は作者が以前に書いた小説の世界につながっていたりもします。荒唐無稽かもしれないですけど、これからこの小説が終わるまで、ともに歩んでいたらしいなあと思っています。

第一話・鏡輔とダーク（前書き）

第一話です。いえ、特に何もありませんが・・・

第一話・鏡輔とダーク

二、

「え、彼女はこのクラスにいる白河の従妹だ。今日からこのクラスの一員になるからみんな、仲良くなるように」

クラスの男子や女子の両方から歓声が上がる。

まあ、当然といえば当然かもしれないな。

僕の家に住むといった・・・シルバは何故か学校に転入していたのであった。

僕はそれを朝知っていたので問題は無いのだが・・・シルバが言うにはこれで僕の運が上がったらしい。朝から犬にまとわりつかれたりほかの犬が骨を持つてきたり、猫が僕の目の前で鰯節（塊）をおいていつたりと・・・それは確かに運があがったのかもしないのだがそれはどうかと思う。僕としてはもうちょっと違う運がほしかった。

「・・・白河君、あの人本当にあなたの従妹？髪の毛の色が違うみたいだけど・・・？」

このクラス一の無口の女子生徒が僕に話しかけてきた。これはこれで運がいいのだろうが・・・いや、運がいいのだろうか？早速シルバと僕の関係が怪しまれてるぞ？

「ええと・・・彼女、養子なんだって・・・その、小学校の頃にあつたぐらいでよくわからないんだ。ほら、よく知らない親戚だつているだろう？彼女がそうなんだ」

前々から考えていた言葉（当然、これは予期していたことだ。）をすらすらと出して彼女の抱いた疑問を消す。

「・・・養子？それなら龍なのも納得できるか・・・だが、どうやら先を越されてしまったようね。・・・ああ、いや、なんでもない独り言」

俺の視線に気がついたのかそういう彼女だったのだが、弁解する

ようにならうとして彼女はシルバのほうを再び見てゐる。興味があるようである。

「……ええと、白河 シルバです。漢字で書くと白羽と書くそ
うなので……これから、よろしくお願ひしますね。」

「彼女……シルバが言つには自分は運の塊（運固！？）だといつ
ていた。彼女が僕と契約をしたということで僕に住んでいるらしい。

「それじゃ、彼女はええと……鏡輔の席……」

「ほら、やっぱり運がいい！これはクラスの女子と話すきっかけに
なるかもしねん！」

「……の隣に座つてゐる黒山の隣に座つてくれ。この前退学した奴
の席だからもしかしたら机の中に何かが入つてゐるかもしねないが
気にしないで結構だ。」

「いや、気にしてほうがいいでしょうつて！」

「はい！わかりました！」

「いやいや、あんたもそのくらい気にしinよー」

隣を歩いていつたシルバと目をあわすことも無く、僕はこちらを
見てゐる黒山さんと話してゐた。これはこれで運がいいかもしね
い。

「……ねえ、そういうばほかの男子はよく女子と話してゐるの
に白河君は何で話してないの？」

「……氣恥ずかしいって奴かな？」

「……そうなのか……」

「でも、黒山さんも男子と話してないような……」

「彼女の場合は女子とも話をしないなかつたような……」

「……とりあえず、隣にやつてきたあなたの従妹と親睦でも深め
てみるか。」

どこか変わつた口調の彼女はシルバの方に話しかけていた。

「……シルバさん、黒山 ダークといいます。」

「黒山さんってそ、そんな名前だつたの！？自己紹介のときははもつ
と別の名前を言つてゐたような……」

「・・・・・見たところ、白銀の龍と思いますがどうでしょうか？」
「え、ええ・・・驚きました・・・ほかにも私の仲間がいるなんて・・・」

「残念ながら、私はあなたを敵だと思つています。」
爆弾発言・・・というより、二人ともすでに授業が始まつてている
といふことに気がついていないのだろうか？周りから見たら非常識
なことしか言つてないぞ？

「敵つて・・・何故？」

「残念ながら、あなたが宿主としている彼・・・つまり、白河 鏡
輔君は私が先に眼をつけていた人間です。」

そ、それは驚いた・・・

「しかし・・・それなら先に契約をすればいいんじゃないんですか
？」

「・・・・・いえ、それはできませんでした。それに、今日はじめて
話しましたし・・・」

それは事実だ。この根暗な女の子と話したことにはこれまで一度も
無い。

「・・・・・何故、できなかつたんですか？」

「・・・・・恥ずかしかつたからです」

そうですか・・・そんなに恥ずかしかつたんですかって・・・も
う付き合つてられん。

彼女たちはその後も僕にはよくわからないことを話しあつており、
そろそろ授業を聞かなくてはと思った僕はまじめに先生の授業を受けたのであつた。

「やばい！ もれる！」

あわてて男子トイレの個室に入つて用を足す。家でやつてくれれば
よかつたな。そろそろ出ようとして扉に手をかけると外から・・・
コンコン・・・

ノックをする音が聞こえてきたのであつた。当然、僕はすでに出

ることにしていたので

「えっと、今出ます。待つててください・・・・・

扉を開けるとそこにはダークと名乗った女の子がたつていた。こ

こは・・・男子トイレのはずだ。

「・・・黒山さん・?」

「・・・・・」

黙つたまま、僕を個室の中に押し戻して自分も入つてくる。何気
に僕が通つている高校はトイレにお金をかけているらしく、『くつ
ろげる空間を提供する!』といつコンセプトのもとに個室は広い。

「・・・ど、どうしたの? ああ、女子のトイレ入れなかつたの?」

「・・・違つ・・・」

そのまま水洗トイレ（先ほどきちんと蓋をしていた。）に座らせて
彼女は僕の開いた股に体を割り込ませるようにして僕の目を見て
くる。

「・・・・・私が思つてゐるような人物なれば、耐えられる・・・は
ず。だから、ごめん」

「え・・・」

そういつて彼女は爪で僕の首元を引っ搔いた。

「いたつ!」

「目、つぶつて・・・」

逆らえないと云うか、なんというか・・・そのまま皿を閉じた
僕の首に誰かの脣が当たる。

「・・・・・」

「・・・・・終了したから皿を開けていいぞ。」

そんなぶつつきらぼうな言葉に従い、僕は皿を開けた。そこには顔
を真つ赤に染めた黒山さんの顔があつた。手は僕の胸に添えられて
おり、動けないよつな状態・・・

「・・・・・やつぱり、私の思つたとおりだな。先に詫びておこいつ・・・
・これはちょっと危ないことだったのだ

「はあ、わからんいんだけど?」

「・・・まあ、いい・・・とつあえずこれで彼女と私は五分だ」

「？」

「さ、教室に戻るぞ。」

そういうって僕たちは普通にトイレから出てきたのだが残念なことにそこには女子生徒がいて僕たちを見て友達とひそひそ話をし始めたのであった。うう、なんだか不幸だ。

昼休み、シルバの周りには人だかりができるので、僕は遠巻きに見ているぐらいしかできなかつた。今、近くにいるのは黒山さんだけである。

「・・・・人気だな、やはりそういう雰囲気ががあるのでう」

「・・・・なぜか、黒山さんのしゃべり口調が男みたいになつているけど？」

「・・・・まず、話しかけるのなら同姓だと思えばいいのでは？と私なりに思つたからだ。それで、ある程度仲良くなつたらそこから私は女口調に戻ろうと思つ。」

「・・・・そうなんだ」

「そうだ・・・といつて、これから一緒に屋上で弁当を食べないか？」

そういうえば昼飯を食べていない。僕と黒山さんは弁当を所持して屋上に向かつたのであつた。

屋上は人気スポットの一つ・・・ではなく、そういうえば本当は立ち入り禁止区域の一つである。ほかにも立ち入り禁止区域はいろいろとあり、この高校には地下がある。普段は生徒だけでは立ち入つてはいけないところで・・・・

「・・・では、ここでたべるとしよう。」

「そうだね。」

おつと、いけないいけない・・・・せつかく女の子と食事できるんだ。これはこれで楽しんでおかいと・・・・

「・・・・やはり、白い飯にはこのふりかけだな」

自作なのか知らないのだが、彼女はなにやらポケットから取り出してご飯の上に乗つける。僕はそれをまじまじと眺めていてなんなのだろうかと思った。

「……それ、何？」

「……まあ、宿主である鏡輔には教えないわけにはいかないな。これは、イモリの黒焼きの粉末だ」

「……そ、そ、うなんだ。黒山さんは……」

「鏡輔、私のことはダークと呼んでかまわない。いや、むしろそう呼んでほしいな」

「わ、わかったよ」

なんだか話をばぐらかされたような感じがするし、実のところ彼女は僕をからかっているのかもしねない。

「……ダークは本当に龍なの？」

「……シルバの姿を見たのに龍の存在を信じないのか？」

「そりや、シルバの姿は見たけど……」

「……私の龍の姿は見たことが無い……そういうたいんだな？」

なんだか攻めるような口調なのだが、彼女は立ち上がった。気がつけば、彼女の弁当はにんじんをのこしてすべてなくなっていた。どうやらにんじんが嫌いのようだ。

「……目を、つぶついてくれ」

彼女はそういう、僕はそれに従う。

「まさか、こんなところでするとはな……」

何かし始めたようで……僕の頭に何かがかかった。

「？」

そんな僕の肩に手がおかれる。どうやら、もういいらしい……

それより、僕の頭にかかっているほのかに温かいこれは？

「うわっ！ ブラジャー！？」

い、意外と大きい！ ……じゃなくて、僕の目の前には漆黒の龍がきちんといたのであった。その鋭い目つきは神々しくも恐ろしいものだった。人間の力が及ばない……そんなものをその目の奥に

持つているようだつた。

あたりには下着やら制服が適当に落ちている。

「・・・ごめん、信じるよ」

わかれればいいといったようにため息をついたのであつた。僕は目を再び閉じる。途中、いまだに頭の上に乗つかつていたブラジャーが取られて残念だ・・・と、僕は何を思つてゐるんだ！

「・・・もういいぞ」

許可をもらい、僕は目を開けた。そこにはちよつと顔を赤くしているダークがいたのだが、僕は話しかけることができなかつた。

「・・・何も、感想は無いんだな？」

何も言わぬ僕に彼女は顔を赤くしたままそつ尋ねてくる。

「あゝその、鱗がきれいだつたよ」

「そ、そうか・・・そういうわれるとうれしいものだな」

あまりよく見ていなかつたのだがとりあえず褒めたほうがいいのだろうと思つて僕はそんなことを言つたのだがどうやらあたりだつたようだ。

「・・・シルバは自分のことを運の塊（運固！？）だといつていてけど・・・やつぱりダークもそうなの？」

「私か？ そだなあ、どちらかと云ふと私は“ - ”のほうに力を与えてゐるからな。私と契約してしまつた人物は運がなくなるな

「そ、そんな！」

僕はあわててダークに詰め寄るが彼女は冷静そのものだつた。慌てるな。既にシルバさんと契約をしているのだろう？ 彼女が“ + ”で私が同等の力を持つ“ - ”だ。

つまり、結果はゼロ・・・ということだらうか？

「それに、行き過ぎた運は逆に不運だ。鏡輔も何か迷惑・・・といふより、変なことが無かつたか？ 元から人間にもてるならばべたべた誰かがよつてきたり・・・」

「犬と猫！？ あのことか！」

「彼女とずっと契約していく女にもて始めれば見知らぬ女が嫉妬す

るぞ。そして、鏡輔は包丁で刺されて終わりだな。どうだ？運がもたらすものに不運だつてあるんだ」

犬が骨をずっと持つてきて、猫がそれに対抗・・・嫉妬した犬は僕の元にがぶり？どうやら最悪の事態は僕の運が元に戻つたことでおさまつたらしい。

「・・・私が鏡輔とこれまで契約しなかつたのも同じ理由だ。私と契約したものは“-”の影響を強く受けてしまうからな。」

「なるほど・・・」

その後、僕たち二人は昼休みが終わるまで青空の下、屋上で他愛のない話をしてすごしたのであつた。しかし、話を聞けば彼女たちの体調で力は変わるらしいので気をつけよう。

第一話・鏡輔とダーク（後書き）

どうだったでしょうか?」意見、ご要望、文句・・・・隨時募集中です。（できれば最後は勘弁してください。）面白かったのならばよかったですし、面白くなかったのならば、努力したいと思います。これからもがんばりますんで、よろしくお願ひします。

第三話・鏡輔とカオス（前書き）

さて、第三話です・・・いや、今回はきちんと考えましたー・第三の龍巣場です！

第二話・鏡輔と力オス

三、

学校帰り、別にシルバと帰る必要は無かつたのだが僕はシルバの隣を歩いていた。

「・・・鏡輔さんは浮氣者ですね」

「浮氣つて・・・」

「普通、人間は運や力を求めるもので私たちのような存在とよく契約をしていました。だから、神様は怒つて人間の体が一体までしか契約できないように体を弱くしたのです。ですが、世の中にはいろいろと例外があつて鏡輔さんもその一つみたいですね。」

「例外?」

「ええ、誰も“-”の力を求めたりしませんからね。ですが、鏡輔さんは“-”の力を求めた・・・せっかく、私が運を強くしてあげたのに・・・」

でも、運は強くなると不運を呼ぶつてダークが言つていたよと言おうとしてシルバはむつとしたような表情になる。

「・・・ちえ、先に私が契約したのに・・・鏡輔さんは強運をどぶに捨てましたね。まったく、馬鹿なことをしたものです。」

「そんなに怒らなくとも・・・」

「不愉快ですから、私は先に帰ります!」

そういうて僕は置いていかれたのであつた。

「ねえねえ、母ちゃん・・・あの女人、何である男の人を置き去りにしたの?」

「あれはね、修羅場だったのよ。きっと、あの男の子がほかの女子に手を出したに違いないわ」

「そなんだあ」

「時雨君はそんなことしちゃだめよ?」

「うん!そんナハ方美人な人間にはならないよ!」

「」にいてもどうやら見世物になってしまつようで僕は歩き始めた。

「はあ、やれやれ・・・」

「一人で道を歩いていると・・・・・

「・・・・・？」

視界の端に見慣れない何かが映る。それは電柱だったのだが・・・・・にやら電柱のしたあたりがぐにゃりと曲がっている。

「？」

近づいてその電柱の捻じ曲がった部分に触れてみた。しかし、何かに触れたような感じは無く、僕の手はそのまま電柱の中に吸い込まれていった。

「！？」

慌てて取り出そうとしてもとることができない。もがけばもがくほど僕の腕・・・は電柱の中に引きずり込まれていくようだった。なんだか、とても情けないような感じだが、当人の僕は非常に怖い思いをしている。

「う、うわあ・・・・・

「ほら、時雨君・・・見なさい、今度は電柱にちよつかいを出してるわ。」

「あ、本当だ！」

そんなことを言つていないので助けてほしい・・・急激に体を引っ張られるのを感じながら僕はそんなことを思つていていたのであつた。無論、体は完璧に引き込まれてそこには白と黒が混ざったような世界が広がっている。

大地は白く、空は真つ黒

「」は？

一步踏み出すると、世界は反転・・・大地は黒く、空は白く染まる。

「・・・・？」

歩くたびに反転するので気分が悪くなつてきた。僕はその場に腰を下ろすとどうしたものかと考える。こいつ不思議な世界にこそ、シルバとダークが助けに来てくれるのではないのだろうか？

そんなことを考えていると人影を見つけた。その人は黒と白の服・・・メイド服を着てこちらに歩いて来ている。田の前までやつてみると彼女は僕をまじまじと眺めている。

「・・・龍持ち？まさか・・普通はこれないはずなのに・・・でも、仕方ないか・・」

そういうて僕に頭を下げる。

「・・・突然の召喚、すみません。私はこの“混沌”の世界を治めている龍です。名前はそのまま“カオス”で構いません。この世界から出たいのですがお力を貸していただけないでしょうか？」

慄懾な態度である謎のメイドさんに僕はつい、うなずいてしまつた。彼女はうれしそうな顔をする。

「・・・失敗したときはともにこの世界に飲まれてしまいますが・・失礼します。」

お決まりとなつたのか、僕は田をつぶつた。しかし、予期していた痛みは訪れず・・・やわらかい何かが僕の首に当たつただけだつた。

そんな僕の耳に驚いたような声が響き渡る。

「・・・こんな、そんな・・・初めて契約が成立するなんて・・・どうやら田を開けてもよさそうだったので田を開けると田の前のメイドさんは首をかしげて来るのがやうだった。

「・・・どういう意味ですか？」

「・・・この世界から何度も脱出を図りましたが、私には無理なことでした。以前、この世界に来たとある・・・たぶん、あなたと同じ歳ですね・・・男の子は普通に帰つていつたのですが、私を連れ出すことはできないうつでした。でも、彼が言つてはきつと訪れるといつてましたからね」

そういうと彼女の足元が崩れ始める。

「・・・大丈夫です、あなたがもといた場所・・・に行くだけです
から」「から」

瞬き一回の間に世界は崩れ、気がつけば電柱の前に立っていた。

「ほら、つきました」

先ほどの出来事が嘘ではないことを証明するかのようにならひには
非日常的な存在のメイドさんが立っています。

「ええと、力オスさんでしたっけ？」

「そうです。何か？」

「何故、メイド服を？」

「・・・そのときやつてきた男の子からこれをもらつたんです。きつ
と似合ひだらうといわれましたからね。」

ええまあ、確かに似合いますつて・・・いや、そういうことが問
題じやねえや。

「とりあえず、僕の家に来てくれませんか？龍のことぜんぜん理解
できてませんからあなたのお仲間に聞きたいと思います」

「そうですか？それならお供したいと思います。あの世界から出し
てくれたお礼として、一生恩くさせてもらいます」

その言葉に嘘は無いのだらう・・・田の置くには真剣そのものを
しめす輝きがあった。ああ、これは願つても無いいいことなのに・・
・なぜだらう？普通に考えたら意外とやばいことなんじやないのだ
らうか？

「さ、そんな難しい顔をしないでください。」

「・・・・とりあえず、聞きますけど・・・力オスさんつて・・・

「力オスで結構ですよ、『主人様』

「・・・いやあ、照れるなあ・・・つてそうじやなくて！力オスはや
つぱり“+”とか“-”とか契約者に何か力を与えるの？」

「ええ、それはもう・・・」

頷くところを見るとそつなのだらうが・・・その顔は優れない。
ま、まさか・・・ダークと同じような感じなのか？つまり、僕の運
は“-”側といふことなのだらうか？

「そこまで話を知っているのならば別にかまいませんね。残念ながら私がご主人様に与える力はわからないのです。」

「・・・わからない？」

「ええ、 “ + ” だつたり “ - ” だつたり・・・また、別のものだつたりします。知っているのは風だけさあ・・・つて感じですね。この世界や龍の世界に私の存在はイレギュラーなんです」

なるほど、この人の存在自体がまさしく混沌なのか・・・しかし、なんだか封印されていたようなボスキャラ的存在の彼女を普通に引つ張り出してきてよかつたのだろうか？

そこは一物の不安を抱きながら僕は歩き出した。カオスは僕の後ろを追いかけてくる。

家についても母さんたちが帰つてくるには少々早すぎたようで鍵は開いていたが一階には誰もいなかつた。だが、きちんと靴が一人分置かれているということは最低、二人の人間が二階にいることなのだろう。

「一人はシルバ・・・もう一人は・・・

「・・・やつぱり、ダークだつたか」

「おじやましてるぞ、鏡輔・・・」

ダークはカオスのほうを見て驚いたような顔をする。

「きょ、鏡輔さん・・・その人は？」

当然のようにメイドを従えて帰つてた同居人を驚いた表情で見てくる。

「メイドですよ、龍のお二人さん？」

にこりと微笑むカオスにいまだに驚いているシルバとダークだつたのだが、僕の襟をつかんでゆさゆさとし始める。

「どういうことなんですか！また、龍をつれてくるし！話もきちんとしたりでしょ！メイド？メイドがそんなにいいんですか！」

「むう、メイド属性なんかがいいのか・・・意外と鏡輔はマニアックなんだな。学校じゃ、静かなのに・・・意外とあれだな・・・私

もめがねをつけてみるか？」

「ほらほら、ご主人様が苦しんでますから・・・シルバさん、放してあげたらどうですか？」

カオスにそういわれて僕が既に真っ白になつてゐることに気がつく。

「あ・・・」

「・・・」

手を離し、僕はそのまま地球の引力に引かれ

「・・・地球の引力に惹かれる奴が悪いのさ・・・ぐふう！」

意識がなくなつてしまつたのであつた。

田を覚ませばそこにはシルバの顔が・・・

「おはよづござります、『ご主人様』

「・・・おはよづ、カオス」

まさしく、頭の中は混沌が支配している。そして、気がつけば今度はメイド服ではなく巫女服に変わつたりしてゐる。あ、巫女服もかわいいなあ・・・じゃなくて・・・

「・・・あの、その服は・・・？」

「これですか？可愛かつたので以前私に会いに来てくれていた女性にもらったものです。本当に可愛いですよね、これ？ほかにもいろいろともつてますよ？」

ええ、それはぜひとも今度着て僕に見せてください・・・はつ！

殺氣！？

「・・・起きたんですね？」

「あ、シルバ・・・」

そこには昔の不良の座り方をまねして改造制服とリーゼントのかつらをかぶつたシルバとダークがいた。なぜか、ダークのほうは伊達めがねをかけている。

「・・・私たちも・・・コスプレをしてみました」

「・・・おどりや、なめどんのかコラ！？」

「この人たち・・・コスプレしてるの?丑つきが悪いの素だらうか?」

「・・・リーゼント、よく似合つてるね」

「・・・おどりやこりやー見せもんちゃうぞー・ゴラア!」

そういうて僕の胸倉をつかんでくるシルバ。迫真の演技ではなく、どうやらなりきっているようでとてもすさまじいメンチを僕にきつてきている。おいおい、絡まないでくれよ。

「・・・ダーク、とめてあげて・・・」

「・・・わかった。まあまあ、シルバさん、鏡輔が困りますから。」

「・・・ちえ、のつてたのに・・・」

乗らないでほしい・・・悪乗りする性格なのか?ああ、以前にあつた白銀の美しい龍は何処へ?あの礼儀正しくも可愛い女の子は?「・・・ご主人様・・・」

「力オス、ちょっと待つて・・・まず、“『ご主人様”はやめて名前で呼んで」

「そうですよ、このパチモンメイドが・・・」

「そうですか、それなら鏡輔君!」

きよ、鏡輔君・・・その微笑み具合がなんとも・・・それになんだか、心に響くええ響きや・・・ああ、もつと言つてほしい!「・・・鏡輔さん、鼻の下が伸びてますよ。みつともない・・・」

「・・・かまわないよ・・・ああ、僕は今とても幸せだ・・・」

「く・・・」

「鏡輔君はこの人たちと暮らしているんですか?」

そういうつて一人のほうを見ている力オス。それに対してもうしたものだらうかと思いながら答えた。

「いや、暮らしているつて言うのかな?ダークのほうは別に家があるし・・・」

「それは大丈夫だ。ここにほれ・・・」

そういうてかばんを指差すダーク。

「・・・このように荷物を持ってきて引っ越してきたからな」

「そ、うなんだあ・・・じゃなくて！」

「それなら、私が住んでもかまいませんよね、鏡輔君、これからは一緒にですよ」

うれしそうにそういうカオスを無下に扱うこともできず、僕はただ、黙っていた。

さてさて、これから僕がするべきことは一つ・・・」の二人がこの家に住むようにと両親に頼み込むしかない・・母さんは了解すると思うが・・・父さんは・・・どうだろ?・

第四話・対決！クリムゾン・デビル！（前書き）

8月20日　いや、今日も自分の的には猛暑でした。猛暑だけにもう
しうがないつてところですね・・・失礼しました！

第四話・対決！クリムゾン・デビル！

四、

母さんが帰つてくるまで僕はおとなしく一階にいて部屋に座つていた。他の三人は二階で“龍同士の話し合い”をしているらしい。この話は人間が聞いてはいけないものらしく……聞いてしまつた人間は頭の中をちくわみたいにしないといけなくなつてしまつうだ。どうかんがえても怪しいことこの上ないのだがどうせ、ぐだらない話だらう。

「ただいま。鏡輔、輝さんの姉さんと妹さんがきたからお茶を準備してくれない？」

そういうて僕の母さんが一人の女性を連れて僕のいる部屋に上がつてくる。まさか、母さん以外もいるなんて……」の状況ではちよつと無理だな。あきらめよう。

「……こんにちは、鏡輔君？」

「いやあ、大きくなつたもんだね
いや、以前にあつたことある人たちなのだが……」の人たち、ふけないなあ？おつと、こんなことをしている場合ではない。母さんに頼まれたことがあつたのだ。

「……あの、碧さんに加奈さん……緑茶とコーラーのどちらがいいですか？」

「あたしは何でもいいよ
「私も……どちらでもいいです。輝君はいつの帰つてくるんですか？」

白衣に緑色の髪の毛の碧さんとツインテールで金髪の加奈さん……
・一人とも戸籍上では僕のおばなのだがどう見ても若い。
「……輝さんは今日早いそうです……ところで、鏡輔……

お友達でも来てるの？お客様が来ているのならきちんと相手をしていないといけないわ」

やうにっこる葵母さんはHプロンをつけてこる。いや、母さんもどうせらうの一人の相手をするきがとうらうないよつなのだが?

「・・・・・ひ、うん・・・・」

「あ、こひまにいかひら・・・・お茶を出してくれればお友達と遊んできてかまわないからね」

僕はそういうくる母さんに頷いてあつさうと一階に戻つてしまつたのだった。どうにも、葵母さんは苦手なのだが・・・

一階の扉を開けるとなぜか、そこには父さんがいた。

「・・・お、鏡輔か?」

「と、父さん!?」

「まつたぐ、お前は両親のことを信じられないのか・・・・とこうより、お前はお前で大変なんだろうな・・・これも運命だと思つてあきらめひ。」

「う、運命!?」

なにやら事情を知つてそな輝父さんに話を聞こつとすると父さんは立ち上がつた。他の二人は一二二二しながら僕を見ている。

「じや、がんばれ・・・と、そつだー!ばあちやんがお前を呼んでたぞ!」

「ばあちやん・・・」

僕のばあちやんは恐ろしこ。近くに家を構えており・・・そこは日本庭園が見れるところなのだが・・・鬼婆だ!こんなことを言えば明日べらこに僕の体はぶつぎりにされておなべこひまつてこるだろうな。

「な、なんて?」

「・・・ふ、それは自分で言つて聞いてくるんだな。いやあ、俺もよく俺の母さんから無茶を言われたものだよ。看板をとつて来いとかさ・・・・」

看板を取つてくるつて・・・どこの看板なんだろうか?そこのところが気になるが・・・聞かないほうがいいのかもしれないなあ。

出て行つた父さんの代わりに僕は父さんが座つていた場所に座る。「いいお父さんですね？あっさりと私たちがここに住むことを許可してくれましたよ？」

「うーん、確かに・・・なんだか、裏がありそうな気がしてきたよ」

「・・・本当に変わつた父親だ。なんだか、普通の人間じゃない気がしたぞ？まったく隙が無いつて言つか・・・」

「まあ、輝君はそうでしょうねえ。やっぱり成長はしますけど中身は変わつてないようです」

「！？カオスは輝父さんのこと知つているの？」

「さあ、それはどうでしようか？それより、鏡輔君はあなたのおばあさまからお呼びがかかつてるんじゃないんですか？」

「そういえば・・・ごめん、ちょっと待つて！すぐそこなんだ！」

僕は三人に言つて待つてもらつことにした。途中、談笑が聞こえてくる前を通る。

「しかし、本当に鏡輔君は輝君にそつくりですね」

「どうかなあ、俺が思つて俺のじいちゃんに似てゐるよくな・・・」

「まあ、いいじゃない。元気な証拠だと思つわ」

「そうですよ、輝さんのおじいちゃんはとても元気な人です」

そんな声が聞こえてきたのであつた。

「ああちゃんの家の前に立つと必ず、足が震えてまつすぐ立つことができない。これは幼少の頃から」ここで僕が育つたからだろう・・・詳しく述べながら毎日が修行だつた。何でも、その昔はぶいぶい言わせていたらしくああちゃんは僕に格闘技を教えたいといつたらしく、僕の両親はあつさりとそれを承諾・・・理由は『強くなつてほしいから』だつたそうだ。

「・・・ああちゃん？鏡輔だけど・・・」

震える足を叱咤して、僕は手に汗握るRPGのラスボスへと赴く勇者の心境だつた。

「・・・鏡輔か・・・」

扉を開けて中に入ると広い庭に腕を組んで立っている一人の老婆がいた。いや、老婆といえないほど若いのだが・・・老婆は老婆だ。戸籍上僕のおばあさんであるのではあなのだ。

「・・・毎日、あちらに住んでいても修行はしていたんだろうね？」「と、当然であります！」

敬礼する手にも汗が・・・ばあちゃんの元を離れても毎日毎日、町の不良などを使って練習してきた。顔がばれるとやばいのでみんなのネットやパンストをかぶつて戦つたこともある。

「・・・じゃ、今日で最後の締めだ・・・」いつもを倒してみな

そついて池のほうを指差す・・・別に何もいなかつた。

「・・・河童でもでてきて相撲でもするんですか？」

「・・・まあ、見てろ」

指を鳴らすと・・・地響きがしてくる。そして、僕の目の前にありえないものが出てきた。

「・・・・お化けザリガニ！？」

そう、そこには人間の一倍はあるうかという化け物ザリガニが池から出てきているところだつたのだ。

「・・・・あの、そんな化け物・・・どうしたんですか？」

「これか？これは葵が碧のもつっていた薬品を借りて加奈と一緒に作り出したザリガニだ。名前は“クリムゾン・デビル”だ。

た、確かに見上げるようなこの大きさで意外と怖い顔つきのザリガニは悪魔だ。それに、液体の効果なのか知らないが・・・甲羅は色むらがあつて一部分は異常に紅い。その部分を見れば返り血を浴びてるんじゃないかなと思つ。

があああああああ・・・

ザ、ザリガニが、吼えた！？生まれて初めて吼えるザリガニを見つけたよ・・・こいつは煮干やかえるじゃつれない代物だ・・・

とこうより、こんなのと戦つて勝てるわけが無い！

「ば、ばあちゃん！僕がこいつに勝てるはずが無いよ！」

「そうか？輝は似たような奴を過去に倒したぞ・・・葵が倒したそれを食べてたなあ。」

うちの家族は化け物家族～しかし僕だけ真人間～ こんな化け物倒せませえん

ザリガニがその大きなはさみを僕に向かって振り落とす。あまりの速さに僕は何もできないで・・・基本であるずつと皿を開けていることしかできなかつた。体はまったく動かない・・・未知なる遭遇、こいつを学会に発表したかつた・・・死を覚悟した僕の目の前に銀色の髪の毛が視界いっぱいに広がる。「きよ、鏡輔さん・・・大丈夫ですか？」

「シルバ！」

そこには両腕で化け物ザリガニのはさみを防いでいるシルバの姿があつた。気がつけば僕はしりもちをついている。

「・・・これ、なんですか！」

「ザリガニ・・・」

「見ればわかりますけど・・・ザリガニはもつひとつ小ささいと思います！」

「僕もそう思つよー！」

「とりあえず・・・」

そういうでザリガニのはさみを押し戻したシルバは僕をつかんで距離をとる。

「・・・倒します！」

「うん、そうしよう！じゃ、僕はこれで・・・」

逃げようとする僕の首筋をシルバがつかむ。

「あなたのお父さんから聞きましたよーなよつとしている割には喧嘩強いそうじやないですか？」

「正直言つけど、そりや、他人に比べたら強いと思つよ？だけど、

あの化け物は洒落にならない！」

言い争っている僕らに迫る“クリムゾン・ナイト”。足がしゃかしゃか動いていて気持ち悪い。

「・・・くそおー！」うなつたら玉砕だあ！！

僕は無策に突っ込むことにした。とりあえず、目に付いた奴の触覚を引きちぎる・・・と、相手は怒り狂つたのか知らないが再び僕にはさみを振り落としてくる。

「させません！」

シルバがそれを防ぎ・・・僕は相手の目にこぶしを叩きつける。シルバが抑えているはさみの間接部分に向かってけりを入れると・・・あっさりと腕が取れてしまつた。もう片方のはさみの間接にもけりを入れて切断・・・相手は動かなくなつた。

「・・・・終わつたようだね。思つたより遅かつたじゃないか」

ザリガニは池のほうに逃げていき、姿を消す。今後一度と、あの池には近づくまい。近づけば今度はまた違つものが出てくるに違ないだろうからだ。

「・・・・シルバ、助かつたよ。」

「・・・・契約上、仕方ないですからね。それに、あなたを助ければまた、私の力も強くなりますから・・・」

「・・・ふうん、また変なのを連れ込んできたんだねえ。まつたく輝といい鏡輔といい・・・節操の無いというかなんというか・・・よし！」

ばあちゃんは一人で何やらかつぶやいていると急に声を出した。

「・・・この付近には不思議なほど道場があるのは知つていいだろう？」

それは知つていてる・・・よく、ばあちゃんのところに挨拶に来ていたりするからなあ。そのおかげで知り合いが増えたぐらいだ・・・まあ、男の知り合いは別に必要ないんだけどね。

「・・・知つてるよ？それがどうかしたの？」

「・・・お前、道場破りしてきて看板もつてこい」

「な、なんだつてえ！？」

「何人連れて行つてもかまわないよ。ま、輝の息子だ……他にも変なのがいるんだろ?」

なにやら核心をついてくるばあちゃんに言い返せないと僕たちに背中を見せる……と、そこへシルバが踊りかかった。

「シルバ!」

「……さすがに変なのは聞きづてなりません!」

彼女が怒るのは勝手なのだが……ばあちゃんに手だけは出しうまくいきません。

「……いけない……ばあちゃんは強い……」
僕が断言したとおり、シルバの右手をなんと、後ろから押さえ込んでいる。

「はっ!」

「まあ、やつぱり青一才だね」

シルバが気がついたときにはばあちゃんはシルバの背後を取つている。いつの間に……とつていたのだろ? 小さい頃から思つてはいけない……ばあちゃんは人間ではないのでは?

「……そ、そんな……」

「……鏡輔、この娘はちょっとだけ鍛えておいてやるよ。ま、いつてきな」

「そ、そんなあ……助けて! 鏡輔さん!」

「いまさら可愛い声出したってだめだよ」

そういうてずりずりとつれていくシルバに十字を切つて僕は「さすが、僕の運を高めてくれるシルバだ。僕の身代わりになつてくれた」と思つてばあちゃんの家を後にしたのであつた。

「……あ、鏡輔か……今、シルバさんの悲鳴が聞こえなかつたか?」

「……まあ、シルバにはかわいそまだけど自業自得だよ。とりあえず、ばあちゃんからちょっと頼まれごとがあつてさ……」
ダークも龍なら強いだろ? ……名前がかっこいいから強いに違いない。

「……ほお、おつかいか?」

「うみと違うと毬のナビ……つこちあたへれないかな? エリハ

も、僕だけじゃ不安で・・・」

「了解した。それならば早めに終わらせたほうがいいだろうな。」

「うん、ありがとう。」

僕はダークを連れて悲鳴が聞こえてくるばあちゃん宅から離れたのであった。無論、近くにいては自分たちも被害をこうむるからである。

まあ、そんな感じで僕の生活は崩れ始めていたのかもしれない。よくよく、思えばあんな馬鹿でかいザリガニが存在するのだ・・・他にもこうと迷つべきだった。

第四話・対決！クリムゾン・デビル！（後書き）

さてさて、今回の話では知っている人は知っている・・・知らない人は知らない人物たちが出てきました。そんで、ザリガニ・・・これも知っている人は知っているんじゃないかと思います。まあ、彼女たちは龍ですが今回出てきた人たちの足元にも及びません。さて、次回はダークと鏡輔の道場破りと鏡輔の親友を出していきたいと思います。そういえば、主人公の親友つてどこかおかしい連中がおおいですね？

第五話・あいつの道場と鶏の化け物と・・・（前書き）

小説を読むときは部屋を明るくして期待を胸に・・・呼んでください。

第五話・あいつの道場と鶏の化け物と・・・

五、

何故、僕がばあちゃんに頼まれ」とをされたのかダークに詳しく話し、ふむとうなずきながら聞いていたダークは驚いていたのだがとりあえず承諾してくれたので心強かつた。

風吹く街路地・・・僕とダークは適当に看板のかかっている道場らしきものの中に入る。

「・・・『萌え萌えH道場』か・・・鏡輔、お前の趣味が大体わかつて気がしたぞ。やはり、マニアックだな」

「気のせいだよ・・・さ、行こう・・・

手をとつて僕は道場を開ける。すんなりと扉は開いた。

「たのもう!」

きつと、お約束の言葉に違いない。これは言つておるべきなのだろつと思つて僕は恥ずかしながらも声を張る。

「・・・お、ようやく門下生ができるのかつて・・・鏡輔かよ・・・

「

「弘樹!?

僕の親友吉崎 弘樹。僕にいろいろと教えてくれてきた幼馴染（

年齢一つ上）である。

「・・・お、ついに彼女ができるのか?だが、この道場は彼女もちの奴を入れるほど甘くないんだ。悪いが、帰つてくれ。めがねの彼女は高ポイント・・・鏡輔、お前でなかつたら今頃、縄でつるしていたぜ?」

かつこいに、もてない。」、「一番でへまをする。そんな僕の幼馴染は彼女ができたりできなかつたり・・・とても不安定な人物でもある。

「鏡輔、覚えているだろうな?第一に!-ギャルゲーでCG集めをするな!好みの彼女を狙い撃ち!一人攻略したらそのゲームは一度と

するな！その思い出は自分の胸にそつと・・・しまっておけ！」

肌にひりひりと震える」の恐怖感……」れど、弘樹である。あ

「エッヂ」ではなく

「エイチ」だろ？。

「……鏡輔、この人は……ものすごい信念を持っているんだな。私だったらもつたいたいから全員攻略するぞ？CG集めるならもちろん、先にBADENDのCGを集めるな……それは何故かつて？そりや、後から幸せになつたほうがいいんじやないか？」

「ね」

の歴史を振り返る。ダーグ。

「もちろんだ！私はまず真っ先にメガネの子を攻
故か・・・メガネの凄さを知つてゐるからだ！」

おいおい、BAD ENDを初めは狙うといっていいなかつたのだろうか？僕の知つている一人が僕の知らない何かを話しているよう多少しばかり気味が悪い。ちなみに、僕もそういうゲームをしてみたのだが八方美人な選択ばかりしていたので泥沼化・・・なんだか、訣然としないまま一番高感度高かつた人とノーマルENDで終わってしまった。その後、僕はそのゲームを弘樹に返した。なんとなく、悔しかつたのだがやめておいた。

「・・・ほほう、なかなかやるな・・・」

何がなかなかやるのか、僕には理解できないし理解もしたくはない。 そうだなあ、そろそろ僕は看板だけもらつて帰るとするかな？ 二人が気がつかないうちにそつと持つて帰れば問題ないのだろうが・・・・・ピンクで書かれているこの看板を持つて帰るのは正直、どうかと思うな・・・やつぱ、何か布でもかけて持つて帰るかな？

かと思ひながら、何か布でもかけて持つて帰るかな？

「……だが、俺も負けてはいない！ 一人の意中を決めればただ、

まっしぐらなのだ！間違つて意中の彼女に冷たい言葉をかけて失敗しても俺は・・・俺はリセットしない！」

「・・・やるな・・・だが、私だってそうだ。間違つて他の娘と結ばれた場合は一度と！そのゲームが起動することはないだろう！私なら新しくそのゲームを買つてくる！そして、その娘専用のソフトにしてやる！」

馬鹿らしくなつてきた・・・まあ、話がわかる連中ならそうなのだろうが・・・そろそろ、夕飯ができている頃合なのではないだろ？

「・・・・・・・・・やるな・・・・・」

「さりに！私は一度電源を入れればどんなゲームでもぶつ続けてやり通す！攻略記事？それは他人のレールなのだ！私は私の道を貫き通す！彼女は一人だけ・・・たしかに、記事は参考になるがそれはまだ考えが甘い！出直して来い！」

「ぐくそお！覚えてやがれ！」

そういうつて道場を出て行つたこの道場の所持者でありながら僕の幼馴染に僕たちは・・・勝つたのだろうが・・・なんだかとても・・・馬鹿らしい気分である。

「・・・すつきりした・・・だが、あんな猛者を見たのは初めてだ

「うん、僕も君みたいな人を見たのは初めてだよ」

「さあ、言われたとおり看板をもつて帰ろうではないか？」

「・・・・・そうだね、そうしようか・・・・・」

馬鹿らしくも思いながら看板をはずす。そして、その看板をダーグが握つたのであつた。

「・・・ふ、いい勝負だつたぞヒラキ！」

かつこよく決めているつもりかもしれないのだが残念ながら彼は弘樹である。

「きっと、ヒラキはもつと凄い“漢”に成長して帰つてくるだろう

「そつかな？途中でくじけるかもよ？」

「・・・そのときは鏡輔を一人前に育ててやる。私のコレクショ

ンを今度見せるから安心しろ」

意外な一面を見てしまった気がして僕の心の中でダークの像が崩れていいくような気がしてならない。

「・・・さて、これから帰るのだらうへ、続ければ明日でかまわないだろ？」「うう？」

「うん、そうだね、今日は帰ることにしようか？明日だつて学校があるし・・・」

「そうだな、私はお風呂に入りたい」

汗だくだくのダークのそこだけ見ればかっこいいのだが・・・先ほどの論争を知っている僕にはあまりいい印象ではなかつた。

看板をばあちゃんの家に置いてきて（縛られていたシルバを救出できた。）・・・僕とダークとシルバ（記憶が混乱しているようだ。）は無事帰宅・・・待つていたカオスとともに意外と大きい風呂場に龍三匹は直行したのだった。実は、僕も直行しようとしたのだが母さんにつかまれてしまった。

「・・・鏡輔には話があるわ」

「・・・そうだよね、さすがにこれはやばいよね・・・」

猫のよつにつかまれてしまい、向かった先は畳しか敷かれていない部屋である。その部屋は何かあつたときの家族会議の場で使用される。しかし、僕に関係することは大抵、怒られることがほとんどなので僕には恐怖の部屋である。

「・・・・とりあえず、義母さんに事情は聞いてあの子達のお世話をしたいんだけど・・・鏡輔、悪いけど私と輝さんは旅に出るわ」「旅？」

「ええ、そうよ・・・ちょっと、お母さんが若い頃に羽田をはずしそぎてね・・・巨大なザリガニを育て上げてしまったのー！」「

薬漬けで作り上げたのは知っているのだが・・・どうやうそれとは違うようだ。

「・・・討伐していくわ！」「

「は？」

「討伐よ！そのためには碧さんと加奈ちゃんには来てもらつたの！あの一人、ああ見ても強いのよ！私だって腕が鳴るわ！」

よくよくみれば母さんの口からまだれが出てているのはばあちゃんがいついたとおり倒したザリガニの味を想像しているからだろうか？そんなに、ザリガニでおいしいのだろうか？

「・・・後のことば一人息子の鏡輔に任せたわ！義母さんも来てくれるから安心してね？」

「・・・う、うん」

非常に不安だ。逆にいなほうが安心できるかもしれないなあ。まあ、そんなことを言つたら命がいくつあっても足りないような気がしている。

「・・・襲っちゃダメよ？」

「誰を？」

「あの三人」

「・・・しないしない」

「そう、それならいいわ」

そういつて母さんは釣竿をもつて出て行つた。徒步で出かけていつたので別に外国なんかに行くみたいではないようだ。徒步じや何年かかるかわからぬし・・・。

「いつてらつしゃーい・・・」

徒步で移動することにそこはかとなく不安を覚えた僕は両親を見送つた後、風呂からあがつてきた三人と夕食をとることにした。

「・・・なるほど、だからあつさりと承諾してくださつたんですね。それなら、鏡輔さんのご両親が帰つてくるまで家事を分担しましょう！」

「まあ、そういうことかな？」

「・・・私は一人暮らしだから料理ぐらいはできるが。料理は任せとおけ」

「それなら頼むよ、ダーク」

「じゃ、私は部屋のお掃除をがんばりますね」

「うん、力オスに掃除はお願ひするよ」

「じゃ、私は洗濯物を担当します」

「がんばって、シルバ・・・じゃ、僕は何をしようかな?」

さて、僕だけ何もしないというのはどうだろ? さすがに、お客様であるほかの三人だけに任せることにはいかないだろ。

「あ~ そうだなあ、僕は・・・」

考えていると急に庭先から何か音がしてきた。

「ちょっと、行つてくるね」

庭先に行くと馬鹿でかいザリガニと鶏が合体したような化け物がいた。とさかの部分に人が乗っている・・・ ビックや、ばあちゃんのようだ。

「こいつを倒してみる、鏡輔! 手段は問わんぞ!」

「・・・僕の係りは誰かと協力してあれを倒すことにしたいと思つ

「名案ですね・・・」

「・・・ そうだな、がんばれ」

「がんばってくださいね?」

「・・・力オス、手伝つて」

僕はそういうて一番近くにいた力オスの手を引っ張る。
「積極的な鏡輔君もいいですね」

「冗談言つてる場合じゃないつて! ほら、行くよ!」

力オスとともに謎の生物に立ち向かう僕・・・十七歳と力オス・
・ 年齢不詳。

「・・・ ばあちゃん、これもザリガニの派生?」

「そうじゃ、名前は“クリムゾン・デビル・セカンド”ということにしてくれ。」

ばあちゃんはしゅばっと飛び降りて去つて行つた・・・ そして、この家はほとんど庭がないから・・・ 馬鹿でかい何かであるこの物体が動けないでいるようだ。

「・・・ 力オス、そろそろおなか減つてきたからこの化け物をさつ

さと倒そうよ？」

「そうですね、任せてください……」

カオスがそういうつて相手に向かっていく……と、彼女の姿がぶれてなにやら白黒のカオスが二体、三体……と増えていく。

「……お風呂はいつたからあまり汗かきたくないんですけどね……でもこれで、終わりですよ」

合計五体ほどのカオスが“クリムゾン・デビル・セカンド”に襲い掛かっていく……と、白黒のカオスたちは相手に引っ付いたままだつた。

「カオス、分身らしき人たちが動いてないけど？」

「……着火！」

いつの間にか手にしていたなぞのスイッチを親指で“ポチッ”と押したのであつた……その結果、白黒のカオスたちは次々に爆発していったのであつた……見ているこつちはその光景に目を開いてしまう……いや、正直いつてこれはとても危ない技なのではないだろうか？

相手の肉片が転がつてあり、これは……ちょっと掃除が大変そうだしすばやく片付けないと近隣の住宅トラブルに発展しそうである。モザイクがかかっている……

「……どうです？ 目標は倒せましたよ」

「……そうだね、さすがに今のはやりすぎだと思つたけど僕の出る幕もなかつたよ」

「掃除、よろしくお願ひしますね、カオスさん」

「……じゃ、私も先に室内に戻つてからな、鏡輔」

「うん、掃除がんばつてねカオス」

そういうつて僕はシルバ、ダークを見習つて後片付けもせずに家に入ろうとしてカオスにつかまる。

「どこに行くんですか？」

「そりや、お部屋に……」

「ダメですよ。鏡輔君にも片付けは手伝つてもらいます。私の担当

は室内ですから屋外ではありません

「そ、そなんあ・・・・で、でも・・・

「でもモヂムもありません!ほり、はやく終わらせましょ!」

筈どちりどり、「ゴム手袋を装備して僕ら一人は無駄に散らばったザリガニと鶏の破片を片付け始めたのであつた。やれやれ、困つたものだな・・・・

「・・・カオス、この鶏の部分だけ食べれないかな?」

「どうでしようか・・・・ためしにあの一人に食べさせてみましょう?」

「いや、さすがにそれはばれると思つよ・・・やっぱ、やめとこうか?」

次の日の朝、ダークが約束どおり料理の担当をしてくれていた。死なばもろとも・・・さすがに一人だけに食べさせるのは引けたので・・・僕以外（僕の分もあるのだが、口に含んだだけ）の胃袋が頑丈そうな三人に上げた結果、彼女たちは学校を休んだ。

第五話・あいつの道場と鶏の化け物と・・・（後書き）

さて、約束していたとおりに鏡輔の友達を登場させました。せっかく登場してくれた彼ですが、今後の登場は未定です。次回はおなかを下した三人の出番は少ないです。最後に・・・この小説を見て腹痛をおこしてしまった人はなにか一言お願いします。（将来的にはこの小説を読んだ人たちすべてを腹痛にしたいと思っています。）

第六話・恋文？ 幽霊？ 謎の少女？（前編）

六、

出会つて間もないのに、あの三人がいないと心さびしいと思つのは、僕の勝手だ。だが、世の中にはそういうことが必然と起きるようになつてゐるのだろう。今日は彼女たちは腹痛で休み・・・まあ、僕もそのお仲間になることができたのだが・・・あんな苦しそうな顔をみると自分が卑怯であつたのを誰が責めようか？まあ、家に帰つたらあの三人に（実力で）攻められそうだ・・・

放課後、シルバたちが学校を休んでしまつてゐるので僕は一人で帰るために下足箱に向かつていた。教室を出るのが遅かつたためか、先ほど女子生徒が一人ばかり脇を走つていつたきりで誰とも会つていない。

「・・・はあ、一人はやっぱり寂しいもんだな」

自分の下足箱を確認して扉を開けると・・・一つの封筒が落ちてきた。

「？」

捨い上げてみると、

「田中 弘樹君へ（はあと）」という文字が田に付いた。どうやら、弘樹宛のラブレターのようだ。

「・・・僕は自分の下足箱に入つていた「ミミ」を「ミミ」箱に持つていつただけだ・・・別に、悔しくなんてない！悔しくなんてないからな！」

捨てようとしたらその封筒に重なつてゐたのか知らないが、もう一つ封筒を発見した。

「ちくしょー！僕をそこまで悲しませたいのかよー。ビリせ僕にラブレターが来たことなんて一度もないさ！」

どこのどこのつだらうかと名前を見てみると、そこには

「白河 鏡輔さんへ」と書かれていた。これは……これは……

「僕宛だ！ 僕宛だ！ でも……」これはもしかしたら誰かのいたずらかもしねないな。この封筒のとおりに進んだら意外と不良に出てくるかもしれないし……

あけるべきかどうか考えるべきなのだろうが、僕は……別に不良なんてどうでもよかつたのであることにした。

「……午後七時この学校の屋上に必ず一人できてください。待つてます……こいつは来たぜ！」

僕はそのまま、足取り軽く……弘樹の下駄箱に彼宛の手紙を突っ込んで屋上へ颯爽と駆けていったのであった。ふ、小さな幸せのおすそわけさ。やっぱり、他人のラブレターを捨てたりしたらダメだよね。それは、彼女ができない奴の鬱憤晴らしさ……

屋上、夜空に輝く星たちを眺めていると背後で音がした。高鳴る僕の心と汗の吹き出でくる手……振る向く僕の視線……そして、目の前に木刀を持っている少女……？

「……来てくれたんですね、先輩」

「……君がラブレターをくれたの？」

「ラブレター？ それは……何かの間違いでは……？」

「そういわれ、僕は再び手紙のほうを読んでみる。

「……果し合いをしたいので午後七時この学校の屋上に必ず一人で来てください。待つてます……」

どうやら、前の部分を読むのを忘れていたようだ。なんて、間抜けな勘違いだらうか……よし、今から弘樹のぶんのラブレターを破つてこよう！ これが一番の鬱憤晴らしになることに違いない。くく……あんな野郎に彼女はもつたいたい！

「……どこに行くんですか、先輩？」

「何つて……鬱憤晴らし？ 残念ながら僕は女の子と拳について語り合いたいんじゃなくて愛を語り合いたいんだ。だから、他の暇そ

うな改造制服や奇抜な髪型をしているお兄さん方と遊んでほしいね。
じゃ、ばいばい

そういうって彼女の隣を横切ろうとすると彼女の木刀が僕の首を狙つてくる。

「・・・な、なんてことするんだ！」

僕はぎりぎりでその攻撃をよけ、バックステップ。彼女も同じようく僕から距離をとつていてるのだが、僕を逃がさないようにするためか・・・屋上の扉に立つていた。

「・・・先輩、逃げるなんて普通はしませんよ。それに、私はあなたを・・・」

彼女は少しだけ背を低くして腰の部分に刀を当て、扉を閉じて右手を高らかに掲げる・・・何かのおまじないであろうか？

「・・・『奥義 霧漬し』・・・」

「・・・！？」

辺りに霧が立ち込めていき・・・そのまま僕の視界は霧でいつぱいとなつた。そこまで離れないはずの彼女の姿も見えなくなる。でもまあ、名前がそのままの奥義でひねりがないもんだな・・・といつたらきつと怒るに違いない。

「・・・先輩、これで逃げることができなくなりましたね・・・
まじめにやつてほしいのです」

四方八方から相手である謎の少女の声が聞こえてくる。どれも耳に残るようでとても気持ち悪いもので「冗談だと思ったのだが・・・何かに見られている視線もまちがいなく感じるので相手は本気だということだ。

「・・・だが、甘い！そんなことで僕の鬱憤晴らしを邪魔できると思つなよ・・・」

僕は屋上の端が見えてくるまで駆け出した。田の前に彼女がいることを祈りながら・・・そして、屋上の端まで来るとそこに結ばれていた緊急用のロープを掴んで一気にしたに降りる・・・が、途中でロープがすぱりと切れていた。

「つまつー。」

屋上から彼女の言葉が聞こえてくる。

「・・・途中から今、切りました。これ以上逃げようとするのならばいから切らせてもらいますよ？」

僕は隣の窓の鍵が開いていることを確かめ、あわてて誰もいない教室に逃げ込む。

「冗談じゃなー。」んなとこひでやられてたまるかああー。」

「く・・・まだ逃げますか！」

そのまま教室を脱出し、かばんを屋上に忘れたことを後悔しながらも田指すは下足箱・・ではなく・・・ととりあえず隠れることがで起きる場所だ。ここにいってはいざれ居場所がばれてしまう。

廊下を全速力で駆け巡りながら隠れる場所をリストアップ。この付近にはあまり隠れる場所がないが・・・

「・・・・・ここは男子トイレに隠れたほうがいいか?いや、男子トイレではばれるだらうな・・・ならば、女子トイレだ!」

そのままトイレへと向かい、普段入つたら間違いなく生徒指導室とこう牢獄に連れて行かれる禁断の場所へと僕は入つたのであった。「一、二、三・・・よし、ここは一番奥で三番田のトイレをチョイスだ」

そして、いわくがありそうな個室へと入つた。別に何かいると聞いたことがないし、確認したこともないトイレへとはいつてとりあえず誰かやってこないだらうかと耳をそばだてる・・・

コツ・・・コツ・・・

どうやら、追跡者がやつてきたようだが・・・あの凄腕の女の子が音をたてるだらうか?少しばかり疑問に思つた僕だったが、こちらは音を立てないように細心の注意を払つて再び耳をそばだてる。

コツ・コツ・コツ・・・

女子トイレに間違えることなくやつてきたらしく相手はすこしづばかり歩調を速めたようだ。

ここで飛び出したら間違いなく切り捨てられるに違いない・・・だ

が、相手はそのまま僕のいるトイレを通過してこき・・・僕から見て右のまつ・・・四番田のトイレの扉を開けたようだ・・・四番目？確かに、三番田のトイレに入る前にこのトイレは二個までしかなかつたような気がするんだけど・・・ま、まさか・・・

「・・・・・」

「・・・・・」

恨めしそうな声が僕の耳にこだまする。どうやら、あの子ではない『何か』が僕を探しに来たようだ・・・しかも、四番田から探している・・・出るなら今のうち・・・だけど、廊下である女の子に出てくわしたら切り捨てられるかも・・・

コツ・コツ・コツ・・・

いや、正直言つてこれは洒落にならん・・・この高校に何も怖い話しがないとは言い切れないし・・・いや、確かに聞いたことがある！そう、確かに名前は・・・『ないはずの南棟の一階女子トイレ四番田の幽霊』といつ少しばかり名前の長い怪談だったと思つ。

そういうえば、この高校には七つ以上の『七不思議』があるんだったかなつて・・・そこは今のところ関係ないな、うん。話の内容はどこにでもあるような話しだつたな。

『四番田のトイレは実は、幽霊がいるから姿を見せることがない。だが、この空間に元来、あつてはならないことがおきるとその幽霊がそのトイレを開放する・・・』というものだつた。意外とこの手の話を忘れやすいのは僕がそういうのが苦手だからだろうか？まあ、それはいいとして『元来あつてはならないこと』とは・・・つまり、『女子トイレに男子が入る』ことだつたのではないだろ？

コツ・・・

僕の入つてているトイレの前で何かが止まる・・・これは正直言つて見ることもできないので・・・僕は天を仰ぎ・・・喜んだ。なぜなら、隣のトイレに移動できるスペースがどうやらこのトイレにはあるみたいだからだ。そう、そこから先ほどまで幽霊がいたトイレに向かえばもしかしたら助かるんじゃないかと思つたからである。

僕は迷わず実行した。両手を急いで壁に引っ掛け普段は存在しないトイレに侵入！！

「・・・あれ？」

「うまくトイレに降り立つことができたと思ったらそこは校庭であった。女子トイレではないし、夜空には月が僕を照らしている。

「・・・どうやら、うまく脱出できたようだ・・・」

命があることに感謝しないと・・・と思いながら僕は上履きのまま家をを目指してランニングを始めたのであった。

次の日、シルバ、ダークと一緒に学校に登校していたのであった。
「・・・私たちが休んでいる間にそんなことがあつたんですね」
「・・・まあ、それも私たちにあんな化け物の肉を食べさせた鏡輔が悪いんだろうがな」

「確かに、罰が当たつていっても過言じゃないような・・・あれは本当に、こわかつた。夢にも出てきたからね・・・」

そんな話をしながら僕たちは学校の門をくぐつていったのだが・・・

「・・・でも、それが実は鏡輔さんの見ていた幻覚だった・・・といふことだつたらどうするんですか？」

「・・・え、僕の言つたことが信じられないの？確かに体験しなかつたらシルバは・・・」

「いえ、そういうことを言つたんじゃないんですよ・・・ええとですね・・・」

頭の中で言葉をまとめようとしているかのよつて見える仕草をとつてシルバは口を開いた。

「・・・鏡輔さんが霧を相手にかけられた・・・といつてましたね？」

「うん」

「そのときに相手が何かしらの術を使つたとしたらどうでしょうか？」

？」

それならば、僕は無駄に怖い思いをしたということになる。

「……嘘……でも、僕が走ったのを証明する上履きという証拠だつてあるし、それはどうかな……」

「……いえ、幻覚といつても鏡輔さんを徹底的に怖がらせて何かしらしようとしたのでしょうか……ですが、鏡輔さんは相手が思いもしない行動をとつた結果……助かつたということですよ」

とりあえずあいての術を破つたということなのだろう……しかし・・・なんだか納得いかないな……

そう思つていたのがばれたのか知らないが、ダークは僕を見て安心させるようにこういったのであつた。

「……まあ、鏡輔ならひつかりそうだらうけどなあ……とりあえず、鏡輔が無事にその幻覚から抜け出してきたんだろ? それなら今のことろは大丈夫なんじやないか?」

気休めかもしれないが今はそれで十分だらう……これ以上、少しばかりはやい怪談を体験したくはない。

「……もしかして、その木刀持つた少女のほうがお化けだつたりして……」

「え……」

「どんな服着てました?」

「……そういえば、依然この高校で着ていた制服だつたよつな……」

「そのときに剣道部に所属していた女の子の幽霊に違ひありませんよー!」

嬉々として持論を展開しているシルバ、だつたのだが、僕のほうはそうとは思えなかつた。

「……シルバさん、それはどうかと私は思いますよ……」

「どうやらダークもその考えに待つたをかけたいようだ。これが、常識人の考え方なのではないだろ? うか?」

「……きっと、居合い部の部長の幽霊に決まつてます……」

どうやら、僕だけが常識人のようなだ……まず、居合い部なんて

聞いたことがないぞ。

「え、きっと剣道部ですよ。」

「いえ、居合い部に違いありません。」

どこを根拠にそう話しているのか知らないが……僕はそれ以上くだらない話しをしている一人に付き合つてゐるほど暇ではなかつた。

放課後、今日もわけあつて一人で下足箱にやつてきた。自分の下足箱を開けるとそこには……封筒が再びおいてあつた。

「・・・まさかね・・・」

心の中で祈りながらも封筒を開けると……『屋上で待つてます。ちなみに、私はゆうれいではありません』とだけ書かれていたのであつた。

幽靈ならば怖くない僕は……昨日のお返しをしたいがために今日も一人で屋上へと向かつていつたのであつた。正直、あんな少女に馬鹿にされたという心が少しだけ、あつた。

第六話・恋文？ 幽靈？ 謎の少女？（前編）（後書き）

第六話・・・となりました。この話ではお化けっぽいものが登場していましたが・・・その部分を書いていると背筋に何か冷たいものがはしつたような気がしました。まあ、気のせいであると信じましょう。一ひとつと話は変わりますが・・・この作品が面白いのでもうちよつと続けてほしいと思っている方はぜひ、評価してください。読んでくれる方がいるならば続けていきたいのですが・・・それ次第です。もし、終わっちゃった場合は『人類の・・・』を連載したいと思っています。では、こんなわがままな作者ですが今後とも、よろしくお願ひします。

第七話・恋文？幽靈？謎の少女？（後編）

七、

屋上にて、僕は校庭を去つていく生徒たちを見ていた。そろそろ、夕日が僕の目に映らなくなつてしまつ。これから後の戦いのために僕は気合を入れるため、口を開き・・・

「・・・かかつてこいやあ！」

と心中で叫んだのであつた。別に、意味はない。相手もいないのにこんなことをいつていたら少しばかり頭がおかしいと思われたつてしまふがないかもしないのだが・・・まあ、いいだろう。だつて、声に出して叫んだわけじゃないんだもん！

夜空は黒でなく、僕の頭上に広がつてゐる。暗闇を彩るためか、空にはきらきら光るお星様が・・・いや、そんなロマンチック？名前を言つてゐる場合ではないな。

「・・・先輩、今日もきちんと来てくれましたか・・・」

振り替えればそこには木刀と竹刀を腰に差してゐる少女が昨日と同じように立つてゐた。その目は真剣そのもの・・・まあ、そういう僕も今日は真剣にやりたいと思つ。

「・・・最初に教えてくれないかな？僕を何でここに呼んだのかを・・・」

そう尋ねる僕に、月明かりに照らされた少女は薄く笑つたのであつた。

「・・・簡単なことですよ。私は強い人と戦いたいだけなんです・・・

「それだけ？」

「ええ、それだけです。私のモットーはどのような卑怯な手を使つても獲物は倒せればそれだけでいい・・・武士道というものには反するかもしだせんが、残念ながら私は武士ではありません・・・

「大体、このようなことをする気にはなりませんでしたが、私は……」

「そういうて彼女は静かに木刀を引き抜いた。

「……あなたの実力を知りたいんですよ。三匹の龍を従えているところを見ると相当の腕を持っているに違いないと私は睨んでいるということです……」

木刀の切つ先がまっすぐと僕の喉を狙つていて。あんなものを当てられたら一撃での世に逝つてしまつに違いない。真剣に戦うと誓つたのだが……ここは逃げの一手で、がんばりたいと思います。

「……霧月 霧仔……またの名をミスト……参ります!」

彼女の周りに霧が発生し、僕へと向かつてくる……それに対し、僕は……

「……まず、霧が人間の体から発生すること自体、おかしいな……」

冷静に判断し……目前に迫る霧仔の攻撃をあわてて避けた。手にする獲物は木刀で、素手の僕よりはるかにリーチが長い。さらに、辺りは昨日ほどではないが霧がたちこめている。相手との距離をとりすぎると姿を確認すること自体が不可能となつてしまつ。

「……うん、どうしたもんだろ……」

「考える時間なんて与えませんよ!勝負は迷つたら負け……」

屋上にある転落防止用の柵を駆け上がり、相手は僕の頭上からスカートを惜しげもなく翻して……木刀を突き刺すように……落ちてきた。

「……くそつたれえ!」

それに対してもう一つだけ……真剣白刃取りである。いや、木刀にもこの名前を使用していいかどうか悩むのだが、そこは何となるに違いない。

「ですっ!!」

「・・・・・

僕は木刀の切つ先を受け取ることなく・・・かといって、自分の体を貫いている木刀を見るでもなく、目の前に突き刺さった木刀を眺めていた。それは、見事にコンクリートを貫通している。相手は使えなくなつてしまつた木刀に未練がないのか、あつといつ間に僕から離れる。ちらちら見えるパンツに誘惑されながらも僕は相手と再び向かい合う。

「・・・・・外してしまいましたか・・・やはり、人型では少しばかり長期戦はきついですね・・・・・いつも、避けられてしまうとは思いませんでした」

腕に自信がある人たちの戦いでは少しのミスだけで勝敗が決定してしまう。まさに、

「刹那の刻」といったものだらう。

「・・・魅せてあげましょ、私の真の実力を！」

気張る僕に対して彼女は腰に刺さっている竹刀を抜き、地面に突き刺す。さて、どんなマジックだらうか・・・・・突き刺さったそこから、あたりを白く染めている霧とは比べ物にならないほどの濃密の霧がすべてを多い尽くす・・・・・

「・・・・・

別に何かをするでもなく、僕は呆けたように相手を見ていた。

「ああああああああ！」

何者かの心の叫び？が僕の鼓膜を響かせる。

そして、ある程度霧が晴れたところで相手がいるところを見ると・・・そこには大きな龍が僕を見下ろしていたのであった。目は紅く、白くぼやけている鱗・・・・そして、白い毛・・・・その目は獲物を捕らえる獣のようであった・・・いや、正直言つて勝てる気がしません。今すぐここで白旗あげて屋上から逃げ出したいと思つてます。

「…………かといって、逃げさせてくれないんだろうなあ…………」

畜生！爬虫類っぽい奴に負けてたまるかあ！」

僕は鋭く相手を見据えると…………そのまま突撃していくので

あつた。

朝日が目にしめる…………気がつけば、朝になつてゐる…………

「…………すー…………すー…………」

隣にはぼろぼろの学生服を着てているミストが静かな寝息をたてながら寝ていた。

あの後、僕も我を失い…………大暴れ…………ではなく、僕は正氣を保つて戦つていた。

攻撃をするのは容易なことではなく…………避けてばっかりだつたのだが…………なんとか、あの面に一発…………（転がつていたコンクリの塊や突き刺さつている木刀を引き抜いて投げたりした。）以上拳を叩き込んでやつた。わはは、正直言つてこのまま保健室に行きたいや…………そして、そのまま寝たいや…………

「しかしまあ、四匹目の中龍が姿を現すなんてねえ…………想像もできなかつたよ」

誰に言うでもなく、僕は一人でつぶやいていた。目の前には竹刀が突き刺さつてゐる。

「…………そういうえば、今日は休みだつたな。それなら、このまま帰つても罰は当たらないだらうし…………」

そこまで独り言を続けていると…………

「ん…………」

隣の少女が目を覚ましたようだつた。

「…………」

「…………やあ、おはよー」

顔を近づけてにこりと笑うと、僕の顔に張り手が…………飛んできた。

「・・・・・」

「・・・・・先輩!寝ている私の寝顔を見た挙句に欲情して襲い掛かりましたね!」

「誤解です・・・僕は健全です・・・」

あまりよくないほうに吹っ飛びそうな意識をなんとかつなぎとめながら僕は彼女に誤解であることを告げる。

「・・・違うんだ・・・」

「本当ですか?」

「うん、本当・・・」

彼女の大きな瞳が僕の目を見据え、その目に僕の顔が映っている。
「・・・どうやら本当のようですね。信じてあげますよ
はいはい、その目が僕をまったく信じていないとこのことを僕は信じてあげましょう。さて、いつまでもこんなところにいることはできないなあ・・・

「ミスト、もう用事は済んだだろ?」

「・・・え・・・」

「僕と真剣勝負したかったんだろ?」

「あ、ああ・・・そうです。どうやら私は負けてしまったようですね

悲しそうにそういうているのだが、実際のところ何度も死ぬかもしれないところは思つたのだ。実力は五分・・・つまり、今回は運が勝負を分けたに違いない。

「まあ、また何か鬱憤を晴らしたくなつたら僕を呼んだら?君のような女の子に手合いを頼まれたらうれしいからさ・・・

「先輩・・・先輩つてその・・・」

少しばかり恥ずかしそうにもじもじしながらじつちを見てくる。
その行動に僕は何かを期待している・・・のだが、どうなのだろうか?

ひとしきり彼女がくねくねしたところ、よつやく決心したのかどうか知らないが、僕の目をひたと見据えてきた。

「・・・い、痛いのが好きな変態さんですか?」

「違うわあ!俺の趣味はお前さんのようなペタん娘さんじゃないわい!不愉快じゃ!わしゃ、帰る!」

僕はそういうて・・・再び、屋上から脱出用に使用されているロープを掴んで・・・

「うわあああ・・・」

情けない声を響かせることとなつたのであつた。自分の言動に反省する自分であつた。

週の初め、月曜日・・・充分に休養できたと考へることにしよう。・・・とりあえず、学校というものは私事をはさんではいけないのでないかと僕は思つ。だから、今日だつてまじめにやつてきた。心中は雨ザーザーだけどね。

「・・・はあ、朝つぱらから大変だなあ」

「鏡輔さん、疲れているようですが・・・あの女の子・・・また出ましたか?」

「そりだぞ、鏡輔・・・私たちにそこのところを教えてくれても罰は当たらないだろ?」

「あ、そりだなあ、あれから会つてないけど?」

僕は彼女たちに再びあつたことを伝えていない。彼女は確かに龍だつたのだが、僕とは・・・契約をしていない。だから、彼女たちに教えるつもりもないし・・・また、厄介ごとに巻き込まれてしまつたら大変だ。それに、そのときに他の三人に迷惑をかけたらいけないからなあ。

「・・・そりだなあ、力オスつてさあ・・・他の世界にいたのに・・・なんでこの世界に詳しかつたんだろ?」

「それはまあ、彼女がやつてきてすぐに私たち一人が教えたりしましたからね。鏡輔さんが寝ているときにも私たち一人で教えてあげたんです」

そういうて自慢そりだと言つてゐるシルバと少しばかり暗い雰囲気

のダーク。どうやら心配事があるようだ。

「・・・きっと、また鏡輔はトラブルに巻き込まれるんだろうな。私はがんばってそれを回避しようとはしたんだが・・・すまん、鏡輔・・・」

「・・・・・はあ、何かまた・・・気をつけておかないといけないのかな?」

そんなことを考えて今日も僕らは学校の始まりである・・校門をくぐる。既に桜の季節は終わり、新緑の萌える季節である。そろそろテスト勉強を始めないと赤店を取つてしま可能性大・・・だらうなあ。」「

朝から暗澹たる気持ちの僕とは裏腹に元気そうな?一人を横目で追いながら下足箱を開ける。

ぱさり・・・

床に何かが落ちたのに気がつき、僕はそれを拾い上げた。

「・・・・・はあ、またか・・・・・」

まさか、朝から来るとは思わなかつた。しかも、相手は・・・やつぱりミストだ。彼女の日本語名?である霧仔で呼んだほうが多いのか知らないが・・・とりあえず彼女からの手紙はろくなことがないに決まつてゐるし・・・

「・・・時間帯指定・・・今すぐ!?」

手紙内容は『この手紙を見てすぐに屋上に来てください』というものだつた。つまり、彼女はまだ僕に用事があるようで・・・・・シルバ、ダーク・・・悪いけど僕はトイレにいってくるよ「トイレ?」「トイレ?」「・・・大か?」「・・・中・・かな?」

不思議そうな顔をする一人を置き去りに・・・・・颯爽と、僕は屋上へと向かつたのであつた。もちろん、彼女に何か鬱憤がたまつた

ら呼んでいいといったのは確かだがこんなにすぐに呼び出されるとはまったく思っていなかった。

「屋上、朝からいる奴はひとりもない。

「あ・・・・・あ・・・・早すぎたのか?」

「・・・遅すぎです、先輩」

背後から姿を現したミストに驚きながらも・・・僕は息を整えてひそかに体を動かせるように準備運動を始める。

「・・・今日はなんのようかな?」

「・・・・そんなに構えなくてもいいですよ。別に・・・今日は決闘を挑みに来たんじゃありません・・・安心してください」

そう言われて・・・僕は安心して深呼吸したのだが・・・それが甘かったのかもしれない。

首に何かの感触・・・驚いて目を開くとそこには顔を真っ赤にしたミストの顔があった。そして、僕の目の前からまるでライオンにあったかのようなシマウマのようになってしまった。

一人、屋上で立ち廻くしていた僕はそろそろ授業が始まる時間帯だといつこにあわてて気がつき、教室へと向かったのであった。だが、これは始まりでしかなかった。

第七話・恋文？ 幽靈？ 謎の少女？（後編）（後書き）

とつとつ、四回田の龍の登場・・・となっていました。正直なところ三回で押し通すというだつたんですね。え～急遽思い立つた企画？ですが、ここでは評価していくださつた方に対してもお礼の言葉を述べてもらいたいと思します・・・いいのかな？えつと、不便だとがやめてほしいとか思つた人はいつでも書いてください。すぐにやめます。『第一回田・評価してくれたタンポポさんく』とこう題名でいきた」と思ひます。恥ずかしながら持てる言葉をもつてしても「ありがとつ」わこます！これからもよろしくお願ひします！」としか言いようがありません（今後、誰かが評価してくれたらなんていおうかな？）。とりあえず、他の読者の方々もこれかうよろしくお願ひします！僕はこのまま続投することにします！

第八話・変なことに巻き込まれる鏡輔

八、

放課後、僕は一人で教室に残っていた。別に何かあるでもないし・
・・・ただ、なんとなく暇だつたからだ。まあ、暇なら勉強でもし
ていろという話だが・・・他の人たちはどこかに行つてしまつたの
だろうか?僕が視線を動かす先に誰かがいるということもない。

「・・・そろそろ、帰ろうかな?」

「おいおい、一人でそんな風に教室でつぶやいていると危ない人だ

と思われるぞ、鏡輔」

声のしたほう・・・掃除用具のほうを見ると、掃除用具が開いて
中から父さんが現れた。

「・・・父さん・・・」

「よ、久しぶりだな。ちょっと、時間ができてお前の様子を見てこ
ようと思つてきただけだ。悪いが、この状況を詳しく話せるほど俺
は暇じゃないんだ」

父さんは近くの机に座る。そういうえば、父さんはこの学校の保健
室の主でもあつた気がする・・・しかし、それが掃除箱からの登
場という意味不明なことに繋がるだろうか?

「父さん、保健室に行かなくていいの?」

「・・・ああ、そうだつたな・・・だが、代わりがいるし、俺が今首
を突つ込んでいることは校長からの要請でもあるからなあ。そこの
ところは校長が何とかするだろう

そういうて父さんは僕の顔をまじまじと眺めて眉をしかめる。

「・・・俺としては正直言つてお前に危ないような真似させたくない
かったんだけどなあ・・・これも、関わつたらずつと続いていくん
だろうなあ・・・まあ、いいや。鏡輔、家に帰つたら俺の部屋の机
にあるノートを見てろ。それで大体のことがわかるんじやないかと
思う。あれは俺なりの研究結果という奴だ」

そういうて父さんは手を振りながら掃除用具入れに帰つていつた。このいふところが本当に僕の父親なのか信じられない。父さんが消えて、今までそのことを言わずに黙つていた僕はその不思議な掃除用具を開けてみたのだが・・普通の掃除用具は普通のままだつた。

「・・・まあ、しょうがないかな？」

一人で掃除用具の前に立つていてシルバがやつてきた。

「・・・鏡輔さん、なにしているんですか？」

「え・・・ああ、これね・・・これは・・・まあ、用具入れの片づけだよ」

「へえ、がんばりますねえ・・・そろそろ帰りません?」

これ以上変なこと（もしかしたら黒板がいきなり開閉して母さんが現れるかもしれない）が起きないようつに僕はシルバと共に鞄を取つて教室を後にしたのであつた。

「鏡輔・・・あら、どうやら出遅れちゃつたみたいね」

と、母さんが誰かの机から出てきたといつ話は後で聞いた話だ。

ダークは既に帰つてゐるようで・・・僕はシルバと一緒に帰つていた。

「・・・へえ、そうなんですか！」

「・・・うん、しようがないけど・・・そうなんだ・・・」

普通の話をしながら僕達はそのまま家に帰りつく。いいにおいがしてゐるところを見るとダークが料理をしていくようだつた。

「・・・ふむ、今日はなかなかいいースープができそうだぞ。鏡輔、お前は早く手を洗つて來い。カオスさんは既に準備完了だ」

「早くしてくださいね。あんまり遅いと鏡輔君を食べますよ」

「・・・・わかつた、手早く済ませてくるよ」

「・・・それも大事だが、きちんと洗つてこいよ?腹痛はもうかんべんしてくれ」

微妙にこの前のこと引きずつてゐるのか知らないがそんなこと

をいいながらダークは僕に告げたのであつた。

「シルバ、僕は先に荷物を置いてくるから鞄貸しておいてくるか

ら」

「そうですか？すみません

渡された鞄が異様に重いことを気にしながら僕はそのまま一階の部屋へと上がつていった。

「ふう、ここにおけばいいよなあ・・・でも、さすがに三人でこの部屋一つって言うのは・・・やっぱり狭いかな？」

いつの間にか僕の部屋は僕を含めて四人の共同部屋となつてしまつていて。それぞれの趣味のものが気がつけばあふれている。シルバは花、ダークはマニアックなもの、カオスは伝統工芸品を集めまくつている。ここにはあの本を置けないし・・・かといって誰かと相部屋のままもいろいろとやばい。

「・・・こにはやっぱり男の僕がどいたほうがいいかな？」

これが一番の得策だろうと思つて僕は立ち上がりてその話をするために下に降りたのであつた。

「・・・」

食後、テレビを見ながらゆつたりしていた三人に僕は部屋のことを提案することにした。

「・・・急遽、会議を開きたいと思います・・・」

「会議・・・ですか？」

「ふむ、議題は何だ？」

「面白そうですねえ」

三者三様の賛成意見に僕は咳払いをひとつ・・・

「・・・部屋が狭くなつてきたから僕は隣の部屋に移動します」

そういうとうつむと唸る三人。

「・・・隣は誰の部屋でしたつけ？」

「確か、空室だつたな」

「でも、今までいいんじゃないですか？」

「「うんうん」」

うなずく一人と僕が移動することに反対しているような感じを見せるカオス。

「狭いのなら部屋を掃除すればいいんですよ。皆さんは変なものを集めすぎだと私は思いますけど？」

「む、それは聞き捨てなりません。・・・悪いですけど、花よりもともかと・・・」

あればどうかと思うけどなあと思いつながら僕は黙っていた。

「・・・私の漆塗りは捨てませんよ。あと、こけしも捨てません」そんなことを言つて、彼女たちに僕は一つの提案を思いついて早速提案してみた。

「・・・あのさあ、あの部屋は勉強と寝室にして・・・当然、僕は別の部屋で寝るけど・・そつちの空室のほうにみんなの大切にしているものを置いたらどうかな？」

結果として、その案は賛成され、僕は自分の分の荷物を置いて今度は父さんが言つていたことを思い出した。

部屋に入り、机の上に置かれていた一冊のノートを手にする。

「・・・『ザリガニの育て方』・・・いや、これじゃないな、こつちだな」

僕の手には古ぼけた一冊のノートが収まっていた。題名は『龍について』と書かれている。この本がふざけた内容でなければ、父さんは龍の存在を知つているということである。

「・・・・俺なりに手に入れた情報や爺さんから聞いた話（一部、嘘だと思われる。）をまとめると、この世界に存在している龍はおののの力の象徴だという結果にたどり着く。龍から人へと姿を変えるのはそちらのほうが力の配給率が高くなるらしく、龍の状態から人型へとなつたときに余つた分は見えない力として蓄積される。つまり、巨大な龍が子供へと姿を変えればその分、見えない力は強大となるのである・・・・」

そのノートにはそんな感じに書かれていたのだった……。
「……あとは、爺さんに聞けばわかるだろ？……じこさんには会いに行くには……」

爺さん？ああ、父さんにとつてのお爺さんがいまだに生きていたなんてぜんぜん知らなかつたな……意外と、長寿かもしぬれない。
「……天国あたりにいけば会えることができるだろ？」

前言撤回、父さんの爺ちゃんは既に天に召されているじゃないか！そもそも、このノートが実際に本当のかどうか確かめることも無理だと思うしなあ……ノートのほうには

「龍である者もその事実を詳しく知らないうらしく、目が覚めればこの世界にいることが多いということだった。龍が現れる前兆として、たとえば、雷が落ちたところにたまたま龍が現れたという話を聞いたり、雨が降った後に現れた……というものもある」らしいので、捜しにいっても無駄なかもしぬないなあ。まあ、この程度のことをいまさら僕が調べようなんて無理なことかもしぬないし、ここは一つあきらめたほうがいいのかもしぬない……僕はそんなことを思つて父さんのノートを静かに閉じたのであつた。

その夜、僕は他の部屋で寝ることにしたのであつた。無論、彼女でもなんでもない少女（一応、人間じゃないが……）の隣に枕を転がすことなどできず……他の部屋で寝ることになつた。ふ、へたれな僕を笑うがいいさ……

何をどう思つたのか……僕は一階の廊下へとやつってきた。このあたりは風がよく通るので快い眠りが僕を誘つてくれるに違ひない。
「……おやすみ……」

誰に言つてもなく、僕は一人で夢見心地にはいったのだが……。

「ゴトリ……」

とこう音が一階から聞こえてきた……と思うと、急になんだか怖

くなってきた。高校生にもなつてお化けが怖いというものもどうしたものかと思うだろうが・・・お化けにはパンチが当たらないだろう・・・倒せない相手に恐怖を覚えるのは当然のことだ。（例：殴った相手が

「もつとーもつと殴つてくれえ！」と言つ・・・これは怖い！）

「・・・ぐくり・・・」

生睡を飲み込み、僕は廊下を静かに移動する。近くにあつた部屋に転がるようにはいつて、耳を澄ますと・・・なぞの人物？は僕が先ほどいた廊下辺りで動きを止めたようだ。どうにも、僕の体温を感じ取つているらしい・・・うわ、こいつは人間じゃない気がするぞ！

ゴトリ・・・

再び動き出した謎の生命体は間違いなく、こいつはひさしつてきた。

僕はそろそろ心の準備をして相手を迎える準備をする。

ゴトリ・・・ゴトリ・・・

しかし、予想に反して相手は締め切つていた扉の目の前を歩いていつた。

「ふう・・・・・

がしつ！

油断しきつていた僕の足を誰かが掴む・・・

「ひいっ！！」

間抜けな声が自分の声から出たことに気がつくこともなく、僕はその場に倒れた。僕の足を掴んだ奴のせいで、仰向けに倒れる。僕は腰が抜けてしまつたことを確認して機を失つてしまつたので

あつた。

次の日、僕は田を覚ました。

「・・・・ぐう～・・・」

「・・・・・」

目の前にはシルバの顔があつた。僕に抱きつくような感じで眠っている。近くには何故か、壺に入っているカオスの姿もあつた。その隣にはダークが布団を纏つて寝ている。

「・・・なんだってんだ?」

「・・・・うあ・・・・」

どうやら、抱きしめているシルバ田を覚ましたようで・・・僕はあわてて離れようとしたのだが離れられなかつた。

「・・・鏡輔さんですか・・・おはようございます」

「あ・・・う、うん・・・これは違うんだ!」

「?」

そういうてよひやく僕は離れることができたのだった。その光景をみてシルバは眠たそうに田をこすると・・・体を動かしていた。
「・・・ああ、すみません。私たちはどうにも、契約した後は鏡輔さんが近くにいないとどうにも・・・不安になつてしまふんです。せつかく寝ていた鏡輔さんには悪いですが・・・一緒に寝させたもらつたんです」

つまり、昨日のあれば考へてみれば不自然なことではなかつたのか?

「・・・・ねえ、シルバ・・・・」

「何ですか?別に鏡輔さんには何もしてませんよ。彼女ができたら、そりやまあ・・・一緒に寝ることは控えますがね・・・ええ、彼女ができるまでは一緒に枕を並べる所存です」

寝起きが弱いのかどうかしらないが、意味不明なことを口走つているシルバにたずねることにした。

「・・・三人で一緒に来たの?」

「ええ、確かに三人で来ましたけど・・壺に入つて寝ていたカオスさんは寝ぼけていたのか知りませんが・・・そのままの状態（壺入り）で階段を器用に下りていましたよ・・・ダークさんは闇にまぎれてしましましたけどね・・・私も眠かったので鏡輔さんの気配をたどつて床にはいつくばつてきましたけど・・・」

どうやら、足首を掴んだのはシルバだったようだ。

「・・・でも、鏡輔さんを見つけたときは既に、仰向けて寝ているようでした。だから、失礼ながら」一緒にさせてもらつただけです」「・・・」

もしかしたら、昨日のあれは別のものかもしれない・・・

第八話・変なことに巻き込まれる鏡輔（後書き）

さてさて、今回から鏡輔は厄介なことに巻き込まれていくと共に・・・シルバたちとの間を気にし始めます。コメティイ要素が少なすぎると思っている方、これからは自分なりに気合を入れていきますんで、応援よろしくお願いします。

第九話・学ランと水着の関係

九、

僕は今、とある道場の前に立っている。

「・・・『臓脂得琉道場』か・・・この町には意味不明な道場が沢山あるなあ・・・」

帰宅途中、運悪くばあちゃんにあつてしまつた僕は

「新しい看板がまた、見たくなつた。鏡輔、とつておいで」といわれたからやつてきたのだが・・・ばあちゃんの突発的看板欲求病にははたはた、困つたものだな・・・

「・・・失礼しまーす！」

道場の扉を開けるとそこには一人の外国人が立つていた。

「ワット？」

「あ～すみません・・・」

しまつた、ここは英語で話したほうがいいのかと悩んだといふ・・・

「オット、コイツハイキノイイモンカセイガコロガリコンデキタコ！」

完璧に間違えているのを感じながら僕は謎の外国人に話しかけた。
「ええつと・・・門下生じゃなくて・・・道場破りですけど？」

「ドージョーヤ、ブリーフ！？」

変なところでいちいち言葉を切らないでほしい。読み取ることちもそれなりに大変なのだ。

「ソイツハデングジャアナボーアイダ！イキテハカエサンゾウウサン！」
某アニメの下ネタ（最近見てないな）を実際にやろうとしているのを見て取つて僕はそれをとめる羽目になつた。
「・・・イイデショウ！ワタシノカンバンホシイノナラ・・・シヨウブデエス！」

「はあ、わかりました・・・」

謎の外国人は指をぱちりと鳴らすと・・・なんと一道場が軋みをあげながら先ほどまで畳敷きだったところから25メートルのブルが姿を現す。深さは約1・8メートルってところだらう。

「・・・では、あなたにはこれに乗つてもらいます!」

「うわ、普通に日本語しゃべれるならしゃべつてくださいよ・・・」
出してきたのは謎のたらいだつた。金色をしていて、よくコントで使われたりしているあれだ・・・それが、この道場と何か関係しているのだろうか?

「・・・・これに乗るつて?」

「もちろん、私とこのたらいに乗つて・・・勝負するに決まってマース!勿論、その場合はこの漢の服・・・“学ラン”を着用することを義務付けます!」

「はあ、そりなんですか?」

どのようにして使用するのだろうか?この大きなたらいならたしかに、僕が乗つても大丈夫だらうが・・・ああ、このたらいに座つて手で水を搔いて前に進めばいいのだろうか?

早速やろうとする僕に謎の外国人はそれをとめた。

「ノー!それでは勝負になりませんし、“漢”ではありますん!」

「・・・それなら、どうするんですか?」

「・・・こうするのでえす!カモーン!マイフレンズ!」

口笛を鳴らすと・・・天井から一人の男が降ってきた。

「・・・・・」

「・・・ボオーイ!見てなさあい!こうするのでえす!」

静かな水面におそるおそるたらいを浮かべ、彼はその上に立つて腕を組んだ。たらいが揺れるたびにこけそうになるところが面白い。

「・・・それで?」

「次に・・・マイフレンズたちに・・・押してもらつのでえす!」

指を鳴らすとその二人は本当に押し始めた・・・普通だつたらたらいに乗つている外国人はバランスを保てずそのまま失墜・・・そ

して、彼はプールでおぼれるはずだと思つていたのだが……

「な、何だつて！」

あいつはまったく「転げ落ちる」となく、うまくバランスを保つて二十五メートルを泳ぎきった。

「……ふふ、君にできるかな？」

「……いや、普通に考えてそれは無理なんじゃないんですか？ そんなことできる人がいるとは思えませんし……ほら、今僕には押してくれるマイフレンズ……がいませんし」

「いや、先輩のまいふれんず……ならここにいますよ」

どこから現れたのか……隣にミストが立っていた。

「……ミスト……」

「先輩、私に任せてくれださい」

どこで準備をしてきたのだろうか……彼女は胸元に『みすと』と書かれているスクール水着を着用していた。

「……でも、もう一人いるんじゃないかな？」

「いえ、私一人でかまいませんよ……いざ、尋常に勝負です！」

「いいでしょ！ この私にかかるべきなさい……」

こうして、僕とミストVS謎の外国人とそのマイフレンズの不毛な争いが始まったのであった。

「それでは……位置について……よーい……」

どこから現れたのか知らないが、一人のおじいさんが協議用の鉄砲を天に向ける。

「どーん……といつたら進むのじやよ？」

とんでもねえ、爺さんだ。いきなりフェイントをかけてきたのが……僕の乗っているたらいを掴んでいるミストは精神集中しているのかそのフェイントには引っかからなかつた。

「ぐ、フェイントにひつからないとはやりますね」

自分たちが仕掛けたのだろうが、自分たちでその罠に引っかかっていては意味がないだろう……彼らは僕らより先に進んでいた。

「・・・外国人チームフライング一つ田・」

そう告げる爺さん。

「それでは・・・気を取り直してヨーディン・」

こうして、僕たちの勝負は始まった・・・

「ははは！私たちに勝てるものはひとりもいません！」

輝くたらいに腕を組み、両の足をしつかりとつけて外国人は叫ぶ。したの二人がいつの間にか黒子の格好をしていることに驚いたのが・・・よく、あんなものをつけて泳げるな・・・

「・・・ぶぐぶく・・・」

そして、肝心の僕のほうなのが・・・

「ミスト！しつかりしてくれ！」

「せ、先輩・・・実は私、かなづちなんです・・・」

そういうて必死に僕の乗っているたらいを掴んでいる。

「・・・・・」

この子、本当に大丈夫なんだろうか・・・そう思いながら敵である相手のほうを見やると・・・彼らがゴールするにはもう時間がないう�だつた。

「・・・ミスト、悪いけど・・・耳を貸してくれないかな？」

「え・・何をするんですか？」

「いいから・・・」

「ははは！やつぱり我らの勝利のようすでーす！彼らは既にご臨終DEATH！」

そういうて外国人チームは残り五メートルを後ろを振り返り・・・

「いまだにスタート地点なんて想像もできませーん！なんで田をつぶつているのかもわからませんねえ」

少しだけとまつた。これが、彼らの敗北要因だった。

「ちょっと、待つてあげましょ。私は心のひろーい人間ですから

ね

あわてぬウサギは勝負に負ける・・・彼らの隣を何かが通過した。

「は?」

僕は向こう岸に着いた衝撃でそのまま前のめりに突っ込んだ。そして、顔をいやというほどぶつける。

「あいたた・・・鼻血が出てる・・・」

血がぼたぼたと流れ落ちているのを確認しながら・・・僕はかんづちであるミストを助けに行つた。

「一、来ないでください!」

「ああ、そういうえば水着を脱いだんだっけ?」

それから数分後、なんとかたらいにつかまっているミストを引っ張りあげて僕はため息をついた。

「・・・ミスト、今回は助かったよ」

「今回は?」

「まあ、君に助けられたのはこれで初めてだからね・・・」

今度は外国人さんに近づく。黒子さんたちが悲しみに打ちひしがれている外国人さんを慰めることなく、ただ近くに立つている。

「・・・今日は完敗ティー・・・京都のワインで乾杯ティーです!」

どこかのねじが外れたのかわからないが、彼はおかしくなつていた。

「あの・・・僕の勝ちでいいですよね?」

「え、ああ・・・好きなようにしてくださいーー!私は実家に帰らせてもらいまース!」

そういうつて彼と黒子さんたちは姿を消した・・・去り際に

「私は忍者になりマース!」といつていたのがなんとなく、印象に残つた。

「・・・ミスト、帰ろつか?」

「はい、そうですね・・・」

「でも、そのスクール水着で帰るの?」

「・・・・・先輩、その学ランを貸してください。それを羽織つて帰りますから・・・・・」

学ランを渡して、僕とミストは道場を出た。学ランを羽織つたミストだが・・・・・なんだか、白い足が見えたりして逆になんだか・・・・よかつた。

「はつ！いかんいかん・・・・」

「先輩、早く帰りましょう?」

カンバンを背負つているミストの後を追いながら僕はそんなことを考えたのだった。

「へえ、ここが先輩のおばあさんの家ですか?立派な庭園もあるんですね・・・・・あのような池を我が家につけたいものです」

目の前の光景に彼女は驚いて・・・・・庭の近くにある池に近寄ろうとしたので僕はそれを止めた。その池がどれほど危険なのか僕は知っていたからだ。その池が危険だということを知つていれば誰も近づくことはあるまい・・・・

「・・・・あの、先輩・・・なんで止めるんですか?」

「ミスト、信じてくれなくともかまわない・・・・僕はあの池に近づいて君がまるでめだかみたいに食べられてしまう光景が見たくないんだ・・・・あの後、僕は夢の中で赤くてすばやく行動していたあいつに追いかけられているんだ!」

「・・・・・赤い 星ですか?」

「違う!」

不思議そうな顔をするミストを引きずつて僕はばあちゃんの家に入つたのであった。

「おや、今日も可愛い女の子を連れてきたねえ?」

「・・・・先輩、この人おばあさんにみえませんよ!」

そうだろう、彼女は会つたびに微妙に変わっていく。聞いた話で

は僕の父さんよりちょっとだけ歳がうえだそうで・・・父さんはこの人の養子だそうだ。

「・・・そりあえず・・・私はこれで帰ります。失礼しました」

「まあ、確かにこの組み合わせはなかなか・・・ではなく！」

「違います！僕が望んでこんな姿にしたわけでは・・・」

「え？でもその学ランは鏡輔から渡されたものなんだろ？？」

「え、そ、そうですけど・・・」

「それなら、似たようなもの・・・いや、そのまんまじやないのかい？」

「そういわれたら確かにそうかもしない・・・」

「どうして彼女は僕の背中を通る途中・・・」

「また、何か困ったことがあつたら呼んでください。その・・・」

「ういう格好をしてほしいとのことでもかまいませんから・・・」

「壮大な誤解を残して去つていったのであった。」

その後、僕は家に帰つて三人の質問攻めにあつた。理由は「あまりに家に帰つてくるのが遅い」というものだつたのだが

「彼の父ちゃんの家にいた」と、つい一言で静かになつた。

第九話・学ランと水着の関係（後書き）

久しぶりの更新となりましたが・・・どうだったでしょうか？面白かつたらこれ幸い・・・です。さて、これから予定を報告していきたいと思っています。ちらほらと出てきているミストに・・・応、一番最初に登場したシルバの関係を次に書きたいと思ってます。

第十話・鏡輔死す！犯人はシルバ！？（前書き）

え～記念すべき？第十回目です。何か企画しようかと思いましたが。
・・今回はやめておきたいと思います。この区切りのいいところで、
感想をくれるとうれしいなあ・・・と思います。

第十話・鏡輔死す！犯人はシルバ！？

十、

僕の目の前には喧嘩を始めるミストとシルバの姿があつた。

「……たとえ、義妹といえど容赦しませんよ！」

「……望むところです・・ここで血霧に変えてあげますよー。」

ははらしている僕の左右では右にダーク。左にカオス・・・両手に花のこの状況だが、あの二人が喧嘩しているその姿のことで非常に心にショックを受けていた。

「……一人とも、闘志の風でパンツが見えてるよ・・・ぶーつ！」

「カオス！大変だ！鏡輔が鼻血を出して倒れたぞ！」

「そ、そんなときはレバーです！レバーを放り込んで輸血を・・・どうしてこうなつたのだろうか・・・それは、学校の昼休みから始まつた。」

その日、僕は弁当を忘れてきた。

「・・・あ、弁当忘れてきちゃつた」

その咳きに対してもシルバ、ダーク、カオスは三者三様の答えを用意してくれた。

「・・・まあ、自業自得ですね？校庭の草でも食べたりどうですか？あれはいけますよ？昔、よく食べてましたから・・・」

「ふむ、それは困ったことになつたな。私は昼は抜かしているから必要ないんだが・・・鏡輔はそつはいくまい？購買で何か買つたらどうだ？」

「鏡輔君、それなら私のお弁当を分けてあげましょつか？ほら、今日は珍しくお弁当が黒くならなくてすんだんですけど？」

「いや・・・やつぱり購買で何かを買つてくるよ」

僕はそういうて教室を出て・・・・・

「あ、先輩！」

「ミスト? どうかしたの?」

田の前には可愛い下級生であるミストがかわいらしげお弁当を持つて立っていた。

「・・・・ええとですね・・先輩の嘆くさまがなんだか想像できたので・・・今日の朝、先輩の分のお弁当を作ってきたんです」それって、既に予知能力じゃないのかな? 龍つてそんなこともできるのか・・・と思うこともなく、僕はミストの手からありがたくその弁当箱をもらつたのだった。

「ありがとう、ミスト」

「いえ、当然のことをしたまでですよ」

そこへ・・・

「あ、鏡輔さん実は、私鏡輔さんの弁・・・ミスト! ?」

後ろから現れたシルバがミストの姿を見て固まる。

「・・・・先輩、それでは失礼させてもらいます」

ミストはそういうて俺に後ろを見せて歩き始めた。残された僕は教室へ入つた。

「・・・シルバどうしたの・・・って胸倉掴まないで!」

いきなり彼女は僕の胸倉を掴んでそのまま天井に着きそつなまでにあげる。

「・・・鏡輔さん・・・まさか、ミストまで・・・」

「ぐ、ぐるじ! ?」

「質問に答えてください・・あの小娘に踊らされていんじやないんですか?」

「ぐはつ・・・」

「・・・そつやつて、逃げても何も変わりませんよ・・・」

そのままだんだんと・・・そつ、だんだんといつかの父さんが言つていた・・・いや、ノートに書かれていたおじいさんにあつた気がした。

「よお、お前が輝の子供か？」

「ええと、あなたは？」

「わしか？わしはお前のひいじいあひやんじゅ。エーリー、アロハ似合ひじゅ？」

「えーっと、確かに・・・」

「つむ、輝と違つてよい田をしておる・・わしはなあ、最近天国を完全制覇してしまつて暇だつたんじゅが・・・地獄の完全制覇を田指しているんじゅ」

「完全制覇つて・・・何のですか？」

「む、それはなあ・・・天使つ娘と悪魔つ娘のスリーサイズを完全網羅・・・わしの手にかかるば時間の問題じゅ・・・」

「へえ、すごいですね？普通はそんなことを考えませんよ」

「そ、うじゅるつねうじゅるつ・・・といひで、おぬしはなんでこなん

なとこにこいるんじゅ？」

「あ、どうやら・・・やられちゃつたみたいで・・・」

「なるほど、おぬしには龍の血がまだ覚醒していないようじゅのう・・あやつは既に龍の力を覚醒した状態で生まれたからのう・・・わしに任せてみろ！はあああ

「す、すこ・・・力がみなぎつてこく・・・」

目が覚めると、そこには少しばかり汚れた白い天井が広がつていた。

「・・・お、気がついたか？」

隣にはダークが座つて僕を見下ろしていた。

「大丈夫だったか？シルバさんが手を離すと同時に、意識を失つたんだぞ？」

「あ、なるほど・・・」

先ほどのおじさんとの表情を思い出しながら・・・僕は立ち上がり

がつた。

「ん？ もう体のほうは大丈夫なのか？」

「まあ、大丈夫だけど……しかしあ、他の二人はどうしたの？」

「……実はな、お前が気を失つてすぐに……教室の天井からシルバさんの妹さんが飛び降りてきたんだ。そして、木刀を引き抜いて彼女は『先輩に手を出す者ならば、たとえ、姉さんだとしても許しません！』と……その結果、シルバさんと妹さんは屋上で果し合いを行つてている……カオスさんはその付き添いに行つてしまつた」

この状況、さすがにどうかと思うぞ……シルバ、君は僕より果し合いのほうが大事なんだね……とぼやいている場合ではない！

ここは急いで屋上に向かわなくては……

「ダーク！ 僕たちも屋上に行こう！」

「ああ、わかった」

屋上ではにらみ合いがずっと行われていた。

「……姉さん、先ほどあなたは私の契約者を一度殺害してしまいました……無念を晴らすため、私はあなたを倒します」

「……それがどうしたというのですか！ 大体、私の契約者です！ 私の力があれば組成だつてできます！」

やつてきた僕の目の前で、そんなやり取りが続いていたのであつた……

簡単に説明すると、こんな感じになつていて。

「……さて、覚悟……」

「望むところです！」

ミストはその手に木刀を掲げ、シルバのほうは指を鳴らす……そこには大きな槍が握られていた。槍といつても、どうやら先のほうが練習用のなぎなたのような感じになつていた。

「……面白そうな展開になつてきましたねえ……」

「……そうですね。ところで、カオスさん……止めるといつて

ませんでしたか？」

「いえ、私は止めるなんて一言も言いませんでした」

「・・・ですか・・・・・」

「らみ合いが続いたのだが・・・・・お互に同じタイミングで動き始める。

「・・・でええい！！」

「・・・はああ！！」

木刀と槍が交差し、鈍い音を立てる。

「・・・まあ、あれくらなら大丈夫だよね？」

僕は不安を覚え、隣に座っている（カオスも座つてお茶を飲んでいる）ダークに尋ねた。

「・・・いや、あの木刀は姿こそ木刀だけど触れるだけで切れるんじゃないかな？きっと、ただものじゃない・・・それに、シルバさんが持っているものも似たようなもの・・・つまり、両方真剣よりも危ないものって考えたほうがいいかもな」

「そんな殺生な・・・」

「私とて、そう思つているから・・・」うして、隙を伺つているのだ

そういうおせんべいを食べている彼女はどうかと思ひづや・・・僕も何か止めるように努力したいので彼女たちの隙を伺う。

それから、一時間後・・・・

「・・・あの二人、タフなんだね？」

「・・・そうだな、正直三十分ほどで両方とも力を使い果たすと思つたんだが・・・・見通しが甘かつたか？」

「それも違うかもしれない・・・なぜなら・・・」

「はあ・・・はあ・・・・」

「ぜえ・・・・ぜえ・・・・・」

お互に間合いを取つて再びにらみ合つてゐる。

「・・・よし、鏡輔行くぞ！」

「わかつた！逝くぞにならなければいいけどね！」

「私はシルバさんをとめるから妹さんをお前はとめろ！」

「僕ら一人は走り出して彼女たちが再び間合いを縮める前に近づいたのだった。

「でええええい！！」

ダークの雄たけびが聞こえ、シルバの持つていた槍を蹴り飛ばす。蹴られた槍はそのまま飛んでいき・・・・・校庭のほうから爆発音が聞こえてきた気がするのだが、気のせいだろう・・・・今はこっちに集中していないと僕のほうが危険だ。

「はあああ！」

僕はミストの木刀を素手で掴んだ。無論、危険な刃の部分ではなく、ミストが持つている部分だが・・・・・

「せ、先輩！？」

前面からは危なかつたので後ろから抱きつくよう柄を僕の手中に収める。ついでに、抱きついているといつていいので・・・・なんだか、得した気分だ。

「ミスト、ストップ！」

「・・・・・先輩、一度あの人殺されたんですよ！」

「わかつてる・・・・・だけどさ、何も君たちが争わなくていいじゃないか？ほら、僕はこのとおりぴんぴんしているからさ？」

「・・・・・わかりました・・・・・先輩がそこまでいうのなら・・・・

そういうてようやく刀から手を離してくれたのだった。まあ、これで平和に終わりそうだったのだが・・・・・

「・・・・鏡輔さん、いつまで抱きついているんですか？」

「え・・・・できればもうちょっと・・・・・冗談、冗談」

ダークに取り押さえられているが、彼女は何をするかわからない。

「・・・・まあ、今回は先輩が無事でよかつたから私は身を引きますが・・・・姉さん、今後、先輩に何かするようであれば私はあなたを倒します」

夕陽に向かつて歩いて歩いているミストが姉であるシルバにそう答えた。

「ふん、自分だつて初めは鏡輔さんを襲つたそうじやないですか？あの時、鏡輔さんがくたばつていたらどうするんですか？」

「……私は姉さんと違つてそのようなことは絶対にしませんよ。命の恩人に普通は恩返しをするようですが……今日の姉さんの行動はどうかと思います。先輩、それではこれからも気をつけて生活してください。あと、やばいと思つたら大きな声で叫んで逃げるといいですよ。不審者は大体これで逃げますからね……特に、暗い夜道などは絶対に一人で帰らないように……他のダークさんや力オスさんがないときにはどのようなどきでも、私が先輩の隣にいますから……」

「ふん！ミストに助けられなくても私がいますから結構です！」

そういうてシルバはミストがいるほうとはぜんぜん違うほうを見たのだが……僕としては途中は省略でいいとおもうけどなあ……絶対、途中からは男の僕が関係なさそうな話だつたけど？

去り行くミストは途中でじちらを振り返つた。

「……先輩、明日もお弁当を届けに来ます」

「……え、あ、そんなんだ……ありがと」

「いえ、これも私の役目ですから……」

そういうて今度はまちがいなく、去つていつた。

その夜、シルバは機嫌が悪かつた。

「……ふんっ……」

「鏡輔、非常に居心地が悪いな？」

「……そうだね、だけど僕のせいじゃないような……」

「確かにそうですねえ、鏡輔さんは今日、くたばりましたからね」

そんな話をしながら、僕たちは夕食の時間を過ごしたのであつた。

「……しかしまあ、あのミストって子……なかなかやりますね……」

「そうなの？」

「ええ、あの身のこなしに太刀筋・・・何より、あの刀が危険物です。簡単に説明すると、普通は存在しないような代物ですよ」

「 そ う な ん だ ・ ・ ・ 」

「ええ、これは注意が必要ですね。鏡輔さんを万が一、襲うようなことがあれば対処しないといけません」

そういうて、珍しくカオスがそのぽやんとした顔をすこしだけしかめたのであった。

第十話・鏡輔死す！犯人はシルバ！？（後書き）

さてさて、メモリアルの第十話・・どうだつたでしょうか？前回、宣言したとおりにミストとシルバの関係を書けたと思つています。ミストの立場としては影からおせつかいに鏡輔を助けるような立場です。最近はシルバよりも目だつているような気がしますが・・・これはこれでしうがないですね。メインヒロインなんて決めてませんし・・・まあ、終わり方はそのときになつて決めることにしましよう！それでは、また今度・・・！（追伸　誰か、感想くれる方がいるならばぜひともお願ひします！）

第十一話・前半／ミストと朝 後半／遙かなる文化祭への道？

十一、

その夜、寝付けなかつた。いや、正確に言つならその夜は珍しいほどの熱帯夜で夏にはまだまだ遠いのにこれほど暑いとはそれほど近年の地球環境が悪くなつてきていて地球温暖化が進んでいるのか・・・これはまた、困つたことでこの問題をどうやつて解決しようかと考えていたので寝付けなかつた。ぐどいな・・・

次の日、僕は田を覚ました。隣には木刀が突き刺さつてゐる。

「・・・す・す・・・」

「・・・・・」
僕の起動スイッチが押されるまで、僕はただの抜け殻だつた。ス

イッチが入つたのは隣にミストが寝ていたから・・・

「・・・・・う・・・あがつ！！」

驚いて声を上げようとした僕だつたが、脳内の会議（本日定例会）が即座に命令を下し、僕の拳が僕の口の中に放り込まれた。ここで、声を上げてしまえば隣の部屋で寝ているだらうミストのお姉さんであるシルバが何事かと入つてくるに違ひない。彼女たちの仲の悪さはこの前の戦い以降、いまだに続いているのだ。そうしたら彼女は朝から過激だらう・・・

「・・・す・す・・・ん？ ああ、先輩・・・おはようございます」

あつという間にミストは覚醒し、その場で僕にきちんと頭を下げて挨拶してくれたのだつた。あれ？ この状況には別に不信感を抱いていないのかな・・・

「あ、おはよう・・・・・とこりで、何で僕の布団の中にいるの？」

「ああ、それは・・・・昨夜、先輩が『助けて、暑いよ・・・』と叫んでいたのであわてて助けにはいったのですが、どうやら寝言だつたようで・・・・窓を開け、換気をしたところ寝言もやんだのです。

その後、私も眠くなつたので先輩の隣で寝ていたのです。私としては朝早く起きる自信があつたので先輩の隣で寝させてもらつたのですよ」「なるほど……残念だけど僕つて用事があつていつも朝早く起きているんだ」

「そうだったのですか……これは、私の不注意でした……ところで、隣には誰が寝ているのですか？」

そう尋ねるミストに僕は正直に答えた。僕つて、嘘つけない体质なんだ。

「……ええとね、シルバとダークとカオスだけど？」

「なるほど、姉さんが寝ているんですね？少々、失礼します」

「あ、不意打ち？それはさすがに……」

「違います、そのようなことはしませんよ」

そういうて彼女は隣の部屋に入つていつた。少したつて再び戻つてきて静かに扉を閉める。

「……用事は済みましたから……それより、先輩が学校に行く前にどのようなことをやつてているんですか？まだ、かなりの時間がありますけど？」

「僕？僕はこれから走つてくるんだ。毎朝の健康つてやつかな？ちいさいころからずつとそうしてゐるからね」

「そうなのですか……私も」一緒にさせてもらつてかまいませんか？」

「うん、かまわないよ。着替えが必要だから着替えたら玄関前に行つてくれないかな？」

「そうですか、よろしくお願ひします……それでは、少々着替えますんで……」

そういうて再びシルバたちが眠つてゐる場所に消えたのであつた。「さて、僕も着替えるかな？でも、ミストはどこからこの家に入つたんだ？鍵は嚴重なはずなのに……」「

数分後、僕らは公園へとやつてきていった。

「……で、ここで走ろうかな?」

「田舎すばこ」の町を一周ですね?」

「……いや、そんなことをしていたら学校に遅れるよ……この先、ちょうど山があつてね? その頂上にちょうど雷が落ちた後のような場所があるんだ。そこまで、走つて帰つて来るんだよ、普段はね……」

「そりなんですか? それなら、そこへ向かいましょう……本氣で!」

その後、僕の体は全速力で加速するよつになつた。なんてことはない、後ろから木刀を振り回しながら追いかけてくる後輩がいたら、誰だつてそりなるぞ。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……今日、僕は限界を超えた気がするよ……」

「お~ば~ぢらいぶといつ奴ですね?」

よくわからないうことを言いながらミストは隣に座る。

「……先輩、はしつてきたといひ悪いんですけど……これから、お手合わせお願いできますか?」

「……拳と剣とではどう考えてもリーチの差とかがあつて僕が負けると思うけど?」

「やつてみないとわかりませんよ!」

そういうて無理やり僕は立たされて……ミストと戦つたのであつた。

「結果を言おう、負けた」

「やれやれ、見事木刀が脳天に直撃……痛むまもなく、ここまでき来たか……」

「「めんなさい……」

「まあ、しょうがないことじや……普通の人間じやつたらまるで木刀で叩かれたスイカのように今頃中身がざつくり（そのまんま）……モザ確定のちょっと子供には見せれない映像の出来上がりじや……まあ、安心しろ、今のお前の体は常人とのそれとは違つ。ちつとばかりたんこぶができるくらいじや……」

「そうなんだ……でも、僕死んでる……」

「そりやまあ、まだ心がついてこれんかったんじやろ？……」

「あ～そりなんだ……また、復活できますよね？」

「ああ、お前が望むならばな……言つておぐが、永遠に復活できると思うでないぞ？おぬしが人間が関係しているもの以外から命を立たれた場合にのみ、おぬしは復活できるのじや……」

「なるほど……」

目が覚めた……

「せ、先輩！」

「あ……ミスト……」

脳内にすきすきと響く痛みなどはまったくなく、感度良好……腕よし、足よし、体よし……どこにも異常は見当たらない。

「ちょっとばかり本気を出しすぎました……すみません」「うなだれる彼女の頭に手をやり、僕は僕の考えを言つ。
「……気にしないで、このくらいじや……死なないみたいだから……」

「……」

「……で、ですが……」

「あ、帰ろつ？ミストのおかげで色々とわかったこともあるし……」

「

「…………わかりました」

毎日、学生が向かうべき場所……学校。そこではさまざまなことが起こり、時に恋、時に喧嘩……さまざまなイベント?が行われる。そのきっかけとなるものに学校行事などが絡んでくる……

・

「シルバ、どうして僕らは放課後なのに学校にいるんだろうね?」

「さあ、それはわかりません。鏡輔さんがじやんけんで負けたからではないんでしょうか?」

「確かに、そうかもしない……」

僕らの高校では文化祭が何故か夏休み前にある。そうだな、簡単に言つと期末テスト後の暇な時間を先生たちが無駄にしたくはないのだろう……

「僕は文化特別委員なんかになりたくはなかったんだ」

「そうですか?別に私はかまいませんが?」

そして、こうこう行事の進行係などを決めるため、今年もその仕事を決めるためにじやんけんが繰り広げられたのだが……男子二十名以上の中では僕は負けてしまった。これも、日ごろの行いが悪かつた僕への神様がくれた嫌がらせに違いない。

今日はとりあえず教室でどこか不備がないかどうかの検査だった。名前こそ大きそうな仕事なのだが……簡単に言うなら居残り掃除だ。

「ま、久しぶりに鏡輔さんと二人ではなせることはうれしいですよ。そういうながらシルバはさつさと簞をうごかしており……僕は簞を放棄して机を沸きにどかしたりして壊れたものがないか探していました。

「…………そう?普段僕はシルバと話している気がするけど……」

「最近はミストとばかり話しているのですけどね?」

「・・・・・」

その言葉がなんだか咎めているようで・・・僕はそっぽを向いて仕事に専念する。僕、仕事中毒なんだ。

「・・・大体ですね、鏡輔さんは・・・」

シルバはこっちのみを見て自分の進行方向をまつたく見ていないようだ。そのまま、箒を動かしまくつて・・・ついでに、僕が見ていなかつたので・・・シルバは・・・

「きやつ！」

箒を振つた拍子に肘を窓ガラスにぶつけ、割つてしまつたのだった。

「・・・・シルバ、大丈夫？」

切つたのだろうか・・・彼女の肘からは血が流れている。

「ちょっと切つたぐらいですけど・・大丈夫です」

「・・・・よし、今すぐ保健室に行こう！父さんはいないけど・・・

応急処置ぐらいはできるからさ！」

僕はシルバの手をとると歩き出そうとしたのだが・・・

「へ、平氣ですっ！」

「のわああ！」

肘を思いつきりひいたシルバのおかげで・・・割れた窓ガラスに突つ込んだ。

「きやつ！」

「きょ、鏡輔さん！急いで保健室に行きましょっ！」

ミイラ取りがミイラになると・・・この状況で言つことができるのだろうか？

シルバの怪我は本当に先つちょを切つただけだった。だが、僕の傷（右腕に縦一線）は少々・・・いや、かなり深そうだった。保健室の主である保健の先生（僕の父）もいないので・・・どうしたらいいかと悩んでいるとシルバが僕の右腕を再び掴んだ。

「・・・シルバ？」

「ちょっと、動かないでくださいね？」

彼女は目をつぶると……右手の人差し指で僕の怪我している場所をすっと触っていく……

「あれ？」

気がつけば、彼女の人差し指に血はついているのだが……僕の右腕にはどこにも怪我した場所がなかつた。

「……まあ、これも鏡輔さんが元はと言えば悪いんですけどね……私がやつたことにはかわりありません。それに、この術ができたということは鏡輔さんが私を頼つていたつてことですからね……僕にはよくわからないことをいいながらシルバはちょっと頬を染めて人差し指についた血を洗い流していく。

「……ありがとう、シルバ」

「べ、別にどうつてことありませんよ。契約した人を護る……それが私のモットーですし、この術は鏡輔さんが私を信頼してくれていないとできないですからね。私が一人で怒つていたことが馬鹿らしくなつてきました」

そういうつて俺の手を掴んだ。

「さ、今日はもう帰ることにしましょう！」

「え、あ……そうだね……」

促されるままに僕は保健室を出たのだった。

『……やっぱり、鏡輔さんは優しい人なんですね……』

「……？」

「どうかしましたか？」

「シルバ、何か言つた？」

「いえ、何も言つてませんけど……？」

帰り道、暗闇となつた道路を僕たちはいまだに手を繋いだまま、歩いていた。僕としては恥ずかしかつたのだがシルバが話してくれなかつた……ということにしておこう。

「・・・・まあ、心の中では言いましたけどね」

「・・・何を?」

「教えませんよ。知りたかったら私の心を読んでください」

「そんな、無茶な・・・」

『ふふ、一生かかっても鏡輔さんは理解できませんよ』

また、僕の耳にはそんな声が聞こえてきたのだつた。

第十一話・前半／ミストと朝 後半／遙かなる文化祭への道？（後書き）

いわば、第一 chapter に突入したようなものなんですが……なかなか更新スピードを上げることができんね。新しい小説も書いてますし……さすがに、ここまで増やすとてんてこ舞いつて奴ですね。これから予定を少しだけ言つと……やはり、文化祭への道のりとそれぞの龍の心を鏡輔がきづかづに知つてしまふ……というなんとなく矛盾しているようなものです。それでは、皆さん……・これからもよろしくお願ひします！ 且ませ、二十連載！

第十一話・VS熊龍のラルド

十一、

僕の目の前には右腕が取れたクマのぬいぐるみ（以前はラルド）が横たわっている。

「・・・・メス！」

「鏡輔、何もそこまで気合を入れてしなくていいんじゃないのか？」

「・・・・霧囮氣だよ、霧囮氣！」

「まじめにやつてくれ・・・・」

ダークにたしなめられ、僕は彼女から裁縫セツトを受け取る。何故、こんなことをしているかといつと・・・・

「あのねえ、私のぬいぐるみさんが怪我しちゃったのー。」

「そなのか・・・・」

ダークと共に帰宅途中・・・・今日はシルバが風邪で休みなので彼女と一緒に文化祭の準備をしていた・・・・一人の女の子がダークと話していた。何でも、この女の子はダークの知り合いらしい。

「私たちに任せてくれ。誓おう、君のラルドは“ぐれーどあつぶ”して君の元へ帰つてくれる」

「本当？」

うれしそうに聞いてくる少女にダークはうなずいた。

「無論だ！この私にできなことは少ないぞー！」

「うん、じゃあ任せるー！」

渡されていたクマのぬいぐるみは肩が微妙に裂けていて中から白い綿が出ていた。

家に帰り、ダークは早速クマの緊急オペに取り掛かった。そのとき、僕はシルバの看病をしており、カオスは料理を作っていた。つまり、誰も彼女を見ていなかつたのだ。

事件が起こつたのはそれから数分後・・・・

「う～ん

「シルバ、君が下着姿で寝るから風邪を引くんだよ」
そんなことを話していた僕たちのところへダークが血相を変えて
やってきた。

「きょ、鏡輔！助けてくれ！」

「ど、どうしたの？」

「とりあえず来てくれ！」

そのまま引きずられていき・・・そこには無残に右腕が千切れ
ているラルドが横たわっていた。

そして、今に至る。

「・・・できないのなら、早く他の人に頼めばよかつたのに・・・」

「」の程度だったからできると思つてたのだ。別に、慢心していた
わけじゃないぞ

そうやつてぶつぶつ言いながらもダークはぬいぐるみを直してい
る僕の隣に座つている。

「・・・よし、終わり！」

右腕を完全補修して僕は立ち上がつた。

「ほら、直つたよ？」

「うむ、完璧だが・・・何かが足りない」

そうやつてなにやら唸つているのだが・・・それを放つておいて
僕は再びシルバの元へと向かつたのだった・・・それがいけなか
つたことに気がついたのはそれから十分後・・・

「シルバ、そろそろ夕飯だけど大丈夫？」

「う～ん、正直つらいですけど・・・食べておかないと治りません
よね？」

「そうだね、食べておいたほうがいいと思つよ

ガシャーン！！

「……ちょっと、行ってくるね」

僕はダークのいる部屋と向かったのだが……

「ダーク? 今度は何……ぐはっ……」

扉を開けるなり、ダークが僕にぶつかってきた……

「鏡輔か? 助かつたぞ……」

「……ダーク、あれ……何?」

ダークを抱きしめるような感じでダークが飛んできたほうをみると……そこにいたのは茶色で背中から黒い羽根を生やした化け物の姿だった。

「……実は、あの後私の力を使ってぬいぐるみにかけていたものを強調した結果が……あれだ」

一体全体、何がかけていると思ったのだろうか?

きしゃー!

「……何を強調したの?」

「凶暴さ」

なるほど、だからあの化け物は「ちう」を「みつけている」というわけだ……

「……完成したら急に襲い掛かってきたのだ。どうにも、一人じや勝てそうにないと思つて奴の尻尾で飛ばされたところに鏡輔がやつてきたということだ」

正直、あんな化け物と遊んでいられない……それに、二人で勝てそうな気がしないんですけど……

「シルバは風邪だし……」

「カオスさんも夕食の途中だ」

「……ミストは……そうだ、買い物にいつたんだ」

だんだんとこっちにやつてくるラルド（覚醒バージョン）はかわいらしかつたあの目を恐ろしい瞳に変化させている。

「ぐ、こうなつたら……やるしかない!」

「よし、それなら・・・・・・とりあえず、広い場所に連れて行こう！」

そのまま窓から飛び降りて（僕はダークに抱えられ）追いかけてきたラルドを広い場所である公園に誘導。辺りは既に暗くなっているので人影が見えない。

「・・・吼えたらどうしようか？」

「そうだな・・・一応声帯は持っていないと思うがな・・・困ったものだ。鏡輔も何かいい知恵がないのか？お前も共犯者だろう？」

うん、これってどう考へてもダークが悪いよね？僕はどう考へても被害者だよ。

今のところは相手の力量を計つているのか知らないが、様子を見ているラルド。龍の力をもつてしてもさすがにあれはきついとダークがいつていたとおり・・・強そうだ。

「・・・・・ダーク、何か方法はないの？」

「なくはないが・・・ちょっと、隙ができるからな。その隙を突かれたら少々危険だと思うぞ。だが、それならばあのラルド君を討ち取ることは可能だろ？」「

絶対的な自信を持つてそんなことを言つてるので・・・・

「それなら、僕が囮になるよ！」

「いや、困ったことにこの技は鏡輔がいないと使えないからな・・・・今のところはにらみ合いが続くと思ってくれ。もしかしたら相手の弱点を理解することができるかもしれんからな」

そういうて相手を見据えるのだが・・・・それもどうだろうか？

素直にミストとかが応援に来るのを待つたほうがいいような・・・・

・

それから、三十分後・・・・

「・・・・動かないね？」

「そうだな、どうかしたのだろうか？」

「電池がきたのかな？」

「まさか・・・相手はぬいぐるみだぞ？ぬいぐるみに電池を入れた
りしないだろ？」「

石を投げてみると・・・

うお～！

「ほ、吼えた！」

「なぜだ？」

動くには動いたのだが・・・・・状況は悪化！目の前の敵をすべて

地獄に宅急便で送りますという顔をして僕らに突っ込んでくる。

「・・・まつたく、先輩たちは何をしているんですか？」

「ミスト…」

そのラルドの前に立ちはだかってミストが木刀で相手の脳天を叩く。

「・・・しめた…ミスト、そのままラルド君をおびき寄せていく
れないか？私はちょっと鏡輔とともにそいつをしとめたいからな」「
なにやらわかりませんが・・・・とりあえず、こんな化け物を相
手にするのは少々つらいということを覚えておいてくださいね」
ミストは相手の背後に回って今度は竹刀を叩きつける。

「さ、鏡輔・・・覚悟はできたか？」

「覚悟つて何の？」

「とりあえず、ラッキーだと思ってくれ！」「

「ダーク・・・んつ！な、何を！」

地面から現れた謎の影・・・それはラルド君をあつという間に飲み込んだ。

「・・・・す、すごい・・・」

「一体全体・・・これは？」

「これが？これは私と鏡輔の力だな。契約者の“ふれんどしつふ”によつて力を使えるのだ。いくら、あの化け物が強からうが……」

・「うなつたらおしまいだな」

そういうつてダークは面白くなさうに残つたラルド君の羽を見る。

「……鏡輔、ぬいぐるみどうしようか？」

「……あの子になんていおつかな……」

「よし、これからぬいぐるみの作り方を勉強して私と鏡輔でぬいぐるみをつくるぞ！」

そういうつて僕を引つ張つていぐ、ダーク。

「……ミスト、悪いけど先に帰つておいてくれないかな？あと、ちよつと今日は帰つてくるのが遅くなるつて力オスだけでいいから伝えておいて……」

「田指すは図書館だ！」

「わかりました、なにせら事情はよくわかりませんが……」

健闘を！

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「いや、何……この程度私の手にかかれば朝飯まだ」

そういうつて胸を張るのはいいのだが……その隣に立つている僕はすでにぼろきれ状態なのだ……ふふ、僕を使ってクマのぬいぐるみが作れるかもね……。あの後、本当に図書館にやってきて白いクマのぬいぐるみを作ることになつたのだが……。いかんせん、僕らは初心者で……ぬいぐるみができた頃には既に朝になつてあり、白かつたはずのクマのぬいぐるみはとこりどころ僕らの血を吸つており……なんとなく、怖いものになつていた。

「どうかね？」

「うん、とくにこの赤いのがいい！」

「そうだろう、これは私たちが夜通しで作り上げたものだからな。いわば、われわれの子供なのだ」

辺りのおばさんが僕を見てひそひそと話している。ち、違うんで

す！ダークな、なんてことを・・・

「・・・ダーク、早く帰る？？」

「ん？ そうだな・・・じゃ、ラルド君式^{式部}をよろしくな

「わかったよ！」

元気いっぱい笑っている子供に背を向けて・・・僕らは帰宅し始めたのであった。

「・・・鏡輔、ぬいぐるみの件ではかなり世話になつたな」

いきなりそんなことを言つてくるダークだが、僕は別に世話をした・・・とは思つていないので答へに困つた。

「・・・え、いや・・・別にいいよ。僕だつてラルド君なんて珍しいものを見ることができたんだし・・・」

「そうはいうが・・・また、犬死しそうになつたし・・・今だつて足元がふらふらしてるぞ？」

「・・・これはね、ちょっとばっかり文化祭のことを考えていてね・・・とりあえず、大丈夫、僕は別に怪我してもないし、健康だよ」

足を叱咤し、僕は走り出す。

「あ、待つてくれ！」

「ほら、早く帰るよ！」

僕はダークの手をとつて・・・

『全く、本当に元気ならしいんだが・・・』

「・・・」

再び、誰かの声をきいたのだった。この前と同じではなくまた、別もので・・・僕はその声を聞いてなんとなく、安らぐことができたのだった。

そして、ぬいぐるみの事件もきちんと終わりを向かえ・・・文
化祭まであと数日となつたある日・・・また、別のことだが起つた
のだった。

第十一話・～熊龍のラルド（後書き）

少々、間が空いてしまったことにお詫びを申し上げたいと思います。自分としては今のところこの物語は二十話ほどで終わる予定なのですが・・・反響があれば、続けたいと思っています。それでは、不定期の次回予告・・・次回は順番的に言ってカオス中心で行きましたいと思います。そして、今回影に呑まれてしまったラルド君はどうなってしまったのでしょうか？

十三、

昼休み、僕は図書館にいた。別に、本を読みに来たのではなく図書館の先生が言つてることをこなすためにきたのだ。ちなみに、一人では無理だったのでヘルプ人材・・・・・

「カオス、この本はもつと奥のほうにおいて欲しいだつて」「なるほど、わかりました・・・・・」

カオスをつれてきたのだ。他の一人は今頃別の場所で仕事・・・いや、お仕置きをされているだろう・・・・・大体、僕は図書委員でもなんでもないのに・・・・・図書館の先生に捕まつてしまつたのが間違ひだつた。

図書館の先生は非常に人使いが荒いということを聞いたことがあり、この前だつて不良生徒がこき使われているのを目撃した。生徒をこきつかうのは先生の特権・・・らしいので誰も文句を言つていな。それに、一週間に一度ほどは誰かが犠牲になつたりするものだ。

「まったく、あの二人は・・・・・」

「まあまあ、せつせつと終わらせて私たちもここから逃げ出しましょう」

シルバとダークは僕と一緒にいたのだが・・・・・逃げたのだ。途中、彼女たちの悲鳴が聞こえてきたのできつと先生に捕まつたのだろう・・・・・そのまま別の場所に連れて行かれて想像も絶するようなことをされているに違ひない。

「ほら、手が止まつてるぞ?」

「・・・・・はい」

僕も今となつては逃げていらない・・・・もとい、逃げることができない。先生はあれからずつとこっちを見ているし、途中歩いていたカオスを呼ぶくらいしか僕にはできなかつた。

「・・・・・その資料はこっちの棚に・・・・・それで、お前が右手に持つているものはこっちの棚だな」

先生はてきぱきと野次を飛ばし・・・・・僕たちはまるで馬車馬のようにせつせと働いていたのであつた。そろそろ、昼休みも終わりを告げそ�で・・・・・

キーンゴーンカーンゴーン！

「先生、予鈴がなつたんで帰つていいですか？次、移動教室なんで・・・・・」

「おいおい、何を言つていいんだ？」

「首根っこを掴まれてしまつた。」

「黒川先生・・・・・あの、私たちはこれで・・・・・」

同じように脇を通りうとした力オスも首根っこを掴まれる。先生はメガネの奥から不機嫌そうなまなざしをこちらに送つている。

「・・・・次は何の授業だ？僕が連絡をいれておこう

「えうつと、次はなんだつたけ？」

「確か・・・・理科でしたつけ？」

「そうか、それなら僕が今から連絡を入れておく。それじゃ、二人は先に進めておいてくれ」

そういうて僕らを放すと先生はあつさりといなくなつた。走つて去つたような雰囲気もなく、その場から消えてしまつたようだ。

「・・・・・あの先生さ・・・・・どことなくダークに似てない？」

「当然ですよ、あの人はダークさんのお父さんです」

「でも、ダークの苗字つて『黒川』だったかな？確か、『黒山』だつたと思うけど・・・・・」

「そういえば下の名前はなんだつたかな？まあ、いいか。

「へえ、じゃあ・・・・・あの人も龍なのかな？」

「どうでしょうか？」

「・・・・あと、つけてみようか？」

「どこに行つたかもわからないのにつけることなんてできるんですか？あの人・・・かなりのやり手ですよ？」

さすがに強さの格が違うのに既に力オスは気がついていたようだ。「まあ、いいんじゃないかな？とりあえず、ここを終わらせて・・・」

・

それから約一時間ほどだつてこいつの仕事が終了・・・気がつけば先生が近くの椅子に座つて読書をしていた。

「・・・・つけることもできませんでしたね？」

「そうだね、とりあえず終わつたことを報告してこようか？」

一人でそのまま黒川先生のところまでやつてきて終了したことを報告。

「ふう、まあまあだね・・・ああ、そういうえば・・・

そういうて何かを取り出した。それは、メガネだった。

「・・・メガネ？」

「ああ、君のお父さん・・・輝にこのメガネを渡しておいてくれ。これはあいつが僕に注文していたものだからね」

「わかりました・・・でも、父さん・・・いえ、保健の先生はもう帰つてきているんじゃないんですか？」

今日の朝、ようやく父さんたちは家に帰つてきたのだが・・・僕らに挨拶をしてさつさと学校に行つてしまつたのだ。

「いや、僕があいつの前に姿を現すと少々・・・いや、かなり厄介な奴がやつてくるからね。僕としては今輝の前に姿を現すのは避けたいんだ。ここだつて完全に安心つてわけじゃないからね

「？」

「ま、君たちに言つてもわからないだろうけど・・・僕の従妹がちよつとね・・・やつかいな性格なんだ。ちよつと輝のところに来ているから会いたくないんだよ」

つまり、先生は苦手な従妹さんがきてるので父さんに会いたくないのか・・・それより、父さんと黒川先生が知り合いなのを驚いて

たな・・・

「あ～そうだった。ダークとシルバさんをこの学園の地下においてきたから予備に言つてくれないかな？ほら、これが鍵だからね」

渡された鍵の札には『図書館奥』と書かれている。

「道はほら・・・」

図書館にある謎の扉を指差す。今まであそこには扉がなかつたような気がするんだが・・・・・氣のせいだらうか？

「氣をつけていつてくるんだよ？」

きつと地下だから暗いのだろうと思つたのだが・・・・・
「何で、何で・・・なんで地下に化け物がいるんだああああああああああ！」

「ああ！？」

階段を一気に駆け下りていく僕らの後ろから何かが追いかけてくる。その目は真っ赤で・・・・姿はラルド君（覚醒バージョン）にそっくり・・・・いや、これは本物だらう。影に呑まれて消えたと思つたのだが、まさか学校の地下にやつてきていたとは知らなかつた。

「どうします？」この状況？

「どうもこいつも・・・ラルド君は強いからなあ・・・・」

階段だつて終わりを迎える。いづれ、僕らはこの階段を駆け上がりたいといけないのだ。遅かれ早かれ、この化け物を退治する方法を考えないといけないのだ。

「ねえ、力オスでもあの化け物を何とかできない？」

「ううん、分身を出してもぜんぜん通用しないと思いますよ」

楽しそうにしているところをみるとぜんぜんこの状況を飲めていないことに間違いはないだろ。

「どうしても倒したいのなら倒しますけど？」

「お願い！こんな地下でまだくたばりたくないんだ！」

「それなら、聞きますけど・・・・」

後ろから叫びながら追いかけてくる元ぬいぐるみ・・・・を振り返ることなく、僕らはシルバとダークがいる最下層へと向かっている。

「死ぬならビックリがいいですか？」

「死ぬなら・・・死ぬならビックリがいい・・・もししくは・・・僕の頭の数センチ上を何か危ないものが経過・・・冷や汗が全身から吹き出てくる。」

「女の子の膝枕」

「わかりました、そうなるように努力しますよ」

「そういうて力オスは隣を走っていた僕をいきなり・・・

「お、お姫様抱っこ？」

「ええ、この状態じゃないと少々きつこですかうね」

「そういうてそのまま僕と・・・

「ん・・・」

辺りがとたんに静かになり、白と黒の何かがラルド君を強襲・・・

「動きが止まつた？」

「ええ、さすがにあれを食らつて動けるとは思えません」

何をしたのかはさっぱりと見当がつかないのだが・・・まあ、これで安心だということは理解できた。よかつた、なんだかあつさり終わつて・・・この前はミストにもがんばつてもらつたんだけどね・・・・・・。

「さ、早いところ一人を見つけましょう・・・他にもここには何かがいます」

さりりと問題発言をしておいたまま、彼女は再び走り出す。

「そ、そうだね」

それに続いて僕も地下を田指す。

「一体全体、なんでこの学校に化け物が出てくる地下を作つたんだ

「うつ?」

「いえ、もとは地下なんてないんじゃないんですか?」

「まだに走つている僕たちはそんなやり取りをしてくる。

「先ほどからずっと全速力でかけているのに疲れていない……それに、随所随所に扉はあるんですけど……私たちはその扉が自分たちがぐぐるものではないと頭の中で不思議と理解しています」この地下は初めのほうはきちんとした木製の階段で、辺りは誇り積もった場所だったのだが……今では階段は石畳に変わつており、辺りは明かりが照らされることもないのにそこには何もない空間が広がっていることだけを理解できる。カオスがいふとおり、途中に扉があるのだが……そこにいくべきではないとなんどなく、頭で理解していた。

「……終わりはきっとあるでしょう。私たちはそこにいけばいいんですよ」

「そうだね、それしかないとわかってるんだけど……」

時間の感覚がさっぱりなので腕についている時計を見るのだが、その時計はあれから一分ほどしか経つていいないことを告げている。「……ここはきっと、僕らが住んでいる場所と違うんだろうね?」「そうですね、私の時計が壊れていないと信じたいものです……ほら、すごいことになつてますよ」

カオスは自分のつけている時計を僕に見せる。それでは既に十時間以上経っているように示していた。

「……めちゃくちゃだね?」

「ええ、そのようですが……」

急に前のほうを見ると……

「……ゴールは見えてきたようです」

そこにあつたのは一つの扉だった。それは、とても重そうな扉で『お仕置きルーム なま物』と書かれていた。

「……きっと、一人は軟体生物に襲われているに違いありませんよ」

「……そつかな?あの一人が軟体生物を見てびびりそうな細い神経してないと思うけどなあ……」

「そういえばそうですね」

別に心配する」ともなく、僕らはその扉を開けて中に入つたのだった。

「・・・あ、鏡輔さん」

「鏡輔か・・・」

やはりというかなんというか・・・そこには軟体生物（見たことも無い物体）が軟体も軟体も転がつてゐる。

「・・・私たちは一人を迎えてきたんです」

「そりなんだ、そろそろ帰ろうよ？もうちよつとでたぶん学校終わつていると思うからさ？」

「そうですね、そろそろ帰りましょうか？」

「そうだな、鏡輔はここから帰るまでの道順を覚えているんだろうな？」

一人を回収し、僕らは再び階段を駆け上がつたのだった。

「あれ？ ラルド君がいなくなつてる！」

「ラルド君？ ここにいたのか・・・・」

「ラルド君つてだれですか？」

「鏡輔君、きっとラルド君は消滅したのでしよう。所詮はぬいぐるみですからね。そこまで耐久度はないはずです」

それぞれがそれぞの感想を述べ、僕らはラルド君がいたはずの場所を通り過ぎたのだった。

「やあ、お帰り。どこも怪我をしていない」ところを見ると事はうまく運んだようだね？」

「先生、生徒を行方不明にしたいんですか？」

「いや、僕は君たちが運んだ熊とは思えないぬいぐるみの始末をさせただけだよ。大体、あれを生み出した人が悪いんじゃないかな？」

こうして、文化祭の数日前にめちゃくちゃ体力を消耗するような出来事がおき、ラルド君の尻拭いは大変だった。もつとも、尻拭い

をしてくれたのはカオスなんだが・・・

第十二話・図書館と地下、そしてラルド君（後書き）

今回はカオスに主軸を置いて書いてみました。どうだつてでしょうか？さて、前回のあとがきで第二十話ほどで終わりを迎えるといつてましたと思っています。実際、それぞれのENDを書きますので・・・・・シルバ、ダーク、カオス、ミスト・・・の予定ですので、話的には第十六話で物語は終わりの予定です。さて、次回はミストを主軸とした話です。

第十四話・文化祭前日の出来事……

十四、

明日は文化祭……僕らが通っている高校でもみんながあわただしく追い込みをかけている。

あわててているのは準備が間に合っていないクラスで……ゆっくりしている僕らのクラスは既に自分たちの家にほとんどのクラスメートが帰っている。ふつ、この成果も僕らの担任が僕とシルバをこきつかつたおかげということを忘れないで欲しい。つまり、彼らが家に帰ることができたのは僕たちの時間というものを犠牲にして……

「先輩、そちらのほうをお願いします」

「……はい」

しかし、いまだに僕はおうちで帰れてない。これには事情があり・

・・僕たちの担任の先生が

「よし、みんな帰つていいぞ。だが、鏡輔は残つておくよ」「……と
いつたのがきっかけで……」

「一年の作業が終わってないらしい。ちょうどここを担当していた生徒会の人物が今日は休みで手伝つてもらいたい」と言い渡されたのだ。ちなみに、シルバは家で自己療養。この前の風邪がぶり返されたと思われる。

「あ、先輩、悪いんですけど……」

「何？」

「邪魔です」

「……」

そんな感じでここでの仕事も終え……ようやく僕は解放された。

「コリット・ブレイク！」

「……先輩、何を叫んでいるんですか？」

「コリット・ブレイク！」

「……先輩、何を叫んでいるんですか？」

屋上でそんなことを叫んでいた僕の後ろから声が聞こえてくる。

「ミスト……いきなり後ろに立たないでくれよ」

「すみません、でも、何で屋上にいるんですか？」

「それはね……というより、僕はミストの教室に配属されてたんだけど……」

「ああ、あれが先輩だつたんですか？なんだか肩身の狭い思いをしているような人だつたので別人だと思ってました」

「な、なんて失礼な後輩なのだろうか！？」

「あのねえ、僕の姿ぐらい覚えてるでしょ？」

「まあ、私も大変でしたから……それより、何で屋上にいるんですか？」

「さつきもそんな質問しなかつた？」

「先輩が答えてないからまた聞いたんですよ。きちんと答えなかつた先輩が悪いんです」

「ぐ……近頃ミストが冷たくなつたような……」

「……まあ、なんとなく疲れたからね。ほら、ここならめつたに人が来ないからね？」

「それはそうですよ……ここ、立ち入り禁止ですよ？」

「……まじ？」

「ええ、本当です。ここにやつてきた生徒は停学を言い渡されるそうです。先輩、停学決定ですね」

「だ、だが……」

「それなら、ミストだつて停学じゃないのか？」

「ええ？それは大丈夫ですよ。だつて、私はへまをしませんからね。」

「……さ、先輩、こつちに来てください」

そういうて屋上の端のほうまで移動するミスト。僕もあわてて彼女の近くに移動する。そこには以前、ここで争つたといひでもあつた。

「……さ、私を抱っこしてください」

「え、ええつと？」

「ああ、ちなみにお姫様抱っこです。早くしないと……大変なことになりますよ?」

そういうて無理やり僕に抱きつくような仕草を見せて……屋上のドアのほうから声が聞こえてきた。

「誰かいるのか?」

「わわっ!?

「ほら、早く!」

ミストに言われたとおりに僕は彼女を抱き上げた。

「……おや、霧が出てきた?」

やつてきた先生は僕の担任だった。しかも、学年主任なのだ。

「……気のせい?」

そういうて屋上の扉を閉める。ガチャリという音もしたので施錠もしてしまったのだろう。まあ、既に最終下校の時間帯を越えている。

「ど、どうしよう? ……」の前の前の騒動で脱出用のロープまでなくなつてゐるけど?」

「大丈夫ですよ。先輩がいますからね……」
不適に僕の腕の中で笑つてゐるミストに微妙に恐怖を覚えながらも僕は尋ねてみた。

「何か考えがあるの?」

「ええ、一人もいればすぐに脱出方法を思いつけますよ。まさか、鍵をかけられるとは思いませんでしたけどね」

どうやら、僕が少々ミストの能力を買いかぶつていたようだ。深く、反省!-

それから十分が経つたのだが……

「先輩、何か思いつきました?」

「いや、さっぱり。ここにあるものは……」

木刀がコンクリ作りの校舎に刺さつてゐる。竹刀がコンクリ作りの校舎に刺さつてゐる。この二つはきっと、名もない勇者に抜かれ

ることを夢見て刺さつていのんだら・・・・・

「あ～木刀と竹刀しかないようですね。あれ、結局刺さつたまんま

なんですか・・・・・

「う～ん、ロープもないからなあ・・・・・あ、そうだ！」

僕の頭の中に豆電球が・・・・

「・・・・なんですか？」

「えつとね、ミストが龍になれば最低でも一階下の窓まで届くと思
うんだ」

「だから？」

「ミスト、龍になつて…」

そういうとものす”くじやうつな顔をしたのだった。

「え～そのようなことをしたら・・・間違いなく、私は疲れてしま
いますよ。大体、私は心が熱くならないと龍になれないんです」

「なんじゃそりや・・・・・

「で・・・心が熱くなるつてどいつしたらなるの？」

「それはまあ・・・たとえるなら、戦つているときとか・・・・

不良が子猫を雨の中えさをやるとか・・・そんな感じですね」

「いや、そんな感じつて・・・いまいちわかりづらいなあ・・・・

「とりあえず、先輩と戦えば心が震えて燃え上がります。それだけ
は間違いないでしょう」

そういうつて立ち上がりつて竹刀をどこからか引っ張り出す。

「さ、先輩・・・」の竹刀を使ってください。私はあちらの竹刀を
使用しますから・・・勿論、私は先輩をボコボコにする予定ですの
で先輩も本気で来てくださいね。そうしないと心が燃え上がりませ
ん！」

そういうつて突き刺さつていた竹刀をあつさりと引き抜く・・・今

「ここに、勇者が誕生した？」

「さあ・・・いきますよ！」

「ぐ、とりあえず・・・怪我しないように努力しよう」

僕は両手で竹刀を構え・・・突っ込んできた相手の竹刀をよけず

に受け止める。

「・・・以前より腕を上げましたね？まだそこまで経っていないのに・・・」

「そ、そうかい？僕としてはいまだに変わつてないと想うけどね」竹刀をぶつけ合いながらそんな会話をする。会話の端から相手の行動を読もうとしたのだが、そんな高等なことが僕にできることはなかつた。

間合いを相手とつて再び竹刀を振り上げながら相手に突進。ミストはそれを予期していたようであつさりと面と見せかけて胴を狙つていた一撃が阻まれる。

「・・・せいつ！！」

そのまま弾き飛ばされて・・・相手は僕から間合いを取つた。辺りは既にこの前と同じように霧が立ち込めている。

「・・・これですね、この感覚・・・もう少しです！」

心が熱くなつてきたのだろう・・・普段は冷静なミストの瞳の中になにやら燃え上がる『明鏡止水』の文字が・・・

「だあああああ！！」

先ほどよりも三割ほど威力と速さが上がつてゐるミストの攻撃を完全にいなすことができていない僕は先ほどから防戦一方。恥に追いやられると間違なく落とされてしまうだろうからたまに右とか左とかに必死になつてステップを踏んでいる。

「ぐつ、がつ・・・」

右肩、左足・・・もまざまなところに竹刀が襲つてくる。

「どうしました？動きが遅くなつてきますよ！」

うれしそうにそんなことを言つてゐるミストの腹部辺りを狙つて横一線をやつてみたのだが・・・相手はひらりとそれをよけて再び僕から間合いを取る。

「もう少し・・・もう少しですよー！」

「ぐ・・・・・・」

「のままだとこちらの体力がなくなつてしまいそうなのだが・・・

・僕がやられてもいけないわけで……

「ちくしょおおおお！」

僕は叫びながらミストに突撃。先ほどミストのような太刀筋を思い浮かべながら何度も軽めのフェイントを入れながら相手の攻撃をいなすことなく、すべて受け止める。そこは根性、あと何回受け止められるかわからないのだが……ミストが龍の姿になればそこでこの模擬試合みたいなものは終了である。

「ぐつ……やりますね、先輩」

「はあ……はあ……」

「ですが、疲れてきているようです……」それで、終わりにしますよう！」

どうやら……どうやら戦っている間にミストのスイッチが入ってしまったらしい……その目は間違いなく鋭くなつており、先ほどとは比べ物にならない量の霧が噴出していく。その霧にまぎれてミストは姿を消したのだった。

『奥義 霧葬！』

四方八方から足音が聞こえてくる。さらに、勘ぐつて右に歩けばそちらから攻撃を仕掛けられてしまう……つまり、動けるような状況ではなかつた。辺りがだんだんと暗くなつていることで僕の中では警報がなり始める。

「……くそ、心眼なんてできないし……」

「そこです！！」

いきなり右斜め前から姿を現したミストの竹刀に僕の右腕が何とか反応してよける。相手の一瞬の隙をついて僕は相手の胸に一撃を食らわせたのだった。

その瞬間、辺りを包んでいた濃い霧はすべて消えうせて……地平線に沈む太陽が映つたのだった。

「……腕を上げましたね、先輩」

屋上にはミストが倒れこんでいた。

「……燃え尽きました……ガクリ」

「え、ちょっと待つてよ！何で気絶してるのー？」

きつと、本気で戦つたからだろう・・・ミストは疲れて眠つてしまっていた。これでは、本末転倒も甚だしいことだ。

「おーい、どうすりゃいいんだよおー！」

僕が叫ぶと・・・・・

「・・・心配するな、先生がきちんとここにいるだ

「げ、先生！？」

気がつけば隣には先生が感動したといいたそつに腕を組んでいた。

「うんうん、白河・・・お前は何気に熱い漢だつたんだな？」

「え、ええつと・・・・？」

「いい試合を見せてもらつた。あそこまで本気の試合を見るのは久しぶりだ・・・ほら、今日はいいものを見せてもらつた記念として屋上のことは目をつぶつてやるからな・・・早く帰るんだぞ？」

先生はそついつて去つて行つたのだった。よくよく考えてみればあそこまで叫びながらやつていたら聞こえるものなのだろう・・・・

「まあ、いいか・・・・」

僕は試合を終えて真っ白になつてしまつたミストを背負つて屋上を後にしたのだった。ミストの持つていた竹刀はいつの間にか姿を消しており、疲れていたので僕も竹刀をそのままにして帰つたのだった。

「あ、先輩・・・・無事に降りることができたんですか？」

下駄箱辺りでようやくミストは目を覚ましたのだった。僕の足腰は既に限界を超えて無駄にがんばつている。

「・・・うん・・・・先生に見つかってね・・・・

「そうですか・・・・」

なんだか元気がなくなつたミスト。たぶん、

「停学」になつてしまつたと思ったのだろう。

「あ、大丈夫。ミストのおかげで何とか停学にはならないみたいだからさ？」

「それなら、安心しました・・・」

ミストは自分から降りるようなことはせず、既に誰もいないのだが・・・この状況を他人に見られたらどうやって説明しようかと僕は思っていたのであった。

「・・・先輩、右方向に何かがありますよ！」

「え？」

暗がりのところでミストがそんなことをいったので・・・右を向いてみると・・・頬に何かが当たる感じがしたのだった。

そんなこんなで、文化祭前日は終了したのだつた。

第十四話・文化祭前日の出来事……（後書き）

久しぶりの更新ですが……どうだったでしょうか？日々進歩（一部後退）していると思っている作者、雨月です。季節的にちょっと厄介なイベントがあるので更新スピードが非常に遅いのですが、すみません。さて、この物語もいよいよ終わりを迎え始めました！文化祭の話を次回は書く予定だつたんですが……次回は文化祭のその後を先に書こうと思っています。つまり、次回で一応は物語としては終了です。第十六話で文化祭……その後は四人とのENDを前作のように書きたいと思っています。葵が母親だつたら鏡輔ですが……加奈が親だつたら……という小説も一応書いています。感想、評価待ち望んでいますのでお暇な方はよろしくお願ひします。

第十五話・お祭りのお約束ー（前書き）

さて、中途半端ですが物語自体はこれ以上進みません。あとは文化祭で何が起きたのか・・・それと、ぬくのEZRです。あとがきではお願いしたいことを書いています！

第十五話・お祭りのお約束！

十五、
その日、僕は保健室にいたのだった。

「やれやれ、文化祭なのに怪我するなんてお前らしいな

「・・・まあ、しょうがないんだよ・・・僕だって怪我したくて
したわけじゃないんだからさ・・・」

今日は文化祭当日・・・だが、僕は貧血のため、保健室に運ばれ
ていたのだった。

既に、文化祭は終了しており・・・僕がするべき」となぞにまさら
残っていない。そろそろ片付けも終了しているような時間帯のよう
で、早めにホームルームを終了させてしまつたクラスは既に解散を
告げられており、部活があるものは部活に行って帰宅部の人た
ちはその部活を全うするために安全に帰宅の途についていた。

「・・・まあ、来年もあるんだからそう落ち込むんじゃないぞ」
「・・・しょうがないか・・・じゃ、僕は先に帰るよ

「ああ、気をつけて帰れよ？」

保健室の扉を開けようとすると・・・勝手にドアが開いたのだ
った。いつからここに自動ドアが設置されたのだろうか？

「あら？ 鏡輔・・・気絶したって聞いたけど大丈夫だったの？」

「母さん？」

何のことではない、母さんが僕より先に扉を開けただけだったのだ。
うん、保健室に自動ドアがつく日はきっと遠いぞ。

「校庭でみんなが待つてるわよ？」

「うーん、わかつた。じゃ、先に帰つておくけど？いいの？」

「ええ、確かに鏡輔が心配だつたんだけど・・・輝さんにも用事が
あつたのよ。ちょっと輝さん、いいかしら・・・あら？」

「？」

僕も後ろを振り返るとそこに座つて書類を書いていた父さんの姿

はなく、代わりに熊のぬいぐるみが陣取っていたのだった。あるべき熊の耳はなく、代わりに龍の角が生えているところを見るとどうやら“ラルド君”的だ。だが、動く気配を見せていないと見ると完璧にぬいぐるみに戻つたらしに……大きさはいまだに僕並なのが……

「まったく、どうしたのかしら?」

「父さんに用事があるって何?」

「用事? ああ、今日は隣町で祭りがあるのよ。私も輝さんと一緒によくいったわあ……」

そういうて頬を染める母さんを見ていると何かを思いついたのか母さんは手を叩いた。

「……鏡輔、みんなと祭りに行つてきなさい!」

「え……どうしてまた?」

「氣絶してみんなと回れなかつたんでしょう? 校庭の隅にいたみんなはとても悲しそうな顔をしてたわ……あつて間もないつて思うけどあの子達と仲がいいでしょ?」

「そりやまあ……」

何故か知らないが……確かに仲がいい。

「……私の時のようにはならないでしょうけど……行つてきなさい。場所は教えてあげなくともわかると思つけどね……じゃ、私は輝さんを探さないといけないからね」

そういうて僕を追い越して保健室の扉を開けて去つていった。僕も扉を開けたのだが……既に廊下には母さんの姿が確認できなかつた。

「……僕の母さんと父さん、何者なんだろ?」

一筋縄では太刀打ちできない一人のことも気になつたのだが、祭りのことも気になつていたので僕は考えるのをやめてとりあえず四人の元へと向かうことにしたのだった。

校庭の隅、花壇の近くに四人はいたのだった。右からシルバ、ダ

ーク、カオス、ミスト・・・シルバとミストはにらみ合っているところを見るとこれはこれで違う祭りが見られるかもしない。

「ごめん、待たせたみたいで・・・・・」

「そんなことないですよ、先輩が倒れたのは私たちの所為なんですから！」

ミストが真っ先にそういったのだった。

「・・・・ええ、そうですね、私たちがやつたのは間違いあります
ん・・・すみませんでした」

「すまん、鏡輔・・・限度が超えてたな」

「文化祭は確かにお祭りですがに大暴れしそぎましたね」

「そりか？別に何もされてないような・・・・」

僕がそういうと四人は非常に重苦しい表情を見せる。

「・・・・どうやら変なところで薬が効いてしまったようですね？」

「そうだな、碧さんに感謝を一応しておかないと・・・・」

「まあ、碧のおかげといえばそうですけどね・・・・」

「・・・先輩のお母さんのお姉さんは危険な方です」

そういうて重度のけが人を見るように俺を見ている。な、何なん
だろうか？

「本当に覚えてないんですか？」

「大丈夫だつて、貧血で倒れたんだよね？貧血ぐらいで・・・シル
バ、その哀れむような目は何？・・・・貧血だよね、ダーク？え、
何で目をそらすの！？ちょ、ちょっと！カオス・・・その携帯で1
19を押してない？つて、ミスト！何で目の前で十字をきつてるの
！？え、僕つて・・・貧血で倒れたんじゃないの？」

困惑する僕に四人は上つ面だけで笑つたのだった。

「・・・・まあ、いいよ・・・ところでさ、これから隣町で祭りが
あるらしいんだから・・・みんなで行かない？母さんに行つてきて
いいつて言われたんだけど？」

そう尋ねると四人は考えるような仕草を見せたのだが・・・・・

「ええ、そうですね。文化祭は色々とあれでしたが・・・行きまし

「うー！」

「うむ、いい考えだな。隣町ならそこまで遅くならないだろうし……」

「楽しみですねえ……屋台などのようなものがあるのでしょうか？」

「花火ははづかあがるのでしょうか？え？花火はなしなんですか？」

「うして、僕らで隣町まで行くことになったのだった。

浴衣姿の四人の近くを歩くのはなんだか気が引けたのだが、誘つておいて一人だけ離れて歩くのも失礼だと思ったのでついて歩くことにした。

既にあたりは暗くなつており、ここに来る途中何度も道に迷つてしまつたものもあるだろうが……まあ、祭りは暗くなつてからが面白いのだ。

「……へえ、いろいろとあるんだねえ……」

誰に言つてもなく、そんなことをつぶやいたのだが……誰も乗つてくれなかつた。

「……シルバ？」

右を向いたが……いなかつた。

「……ダーク？」

左を向いたが……いなかつた。

「……カオス？」

後ろを振り返つたが……いなかつた。

「……ミスト？」

振り向く場所がなくなつたので空を見上げたのだが……やつぱりいなかつた。

「……まったく、みんな迷子かよ……はは、僕から離れちや駄目だつて言つたのになあ……」

決して、そう、決して僕が迷子になつたわけではない！

「・・・ありやりや、他のみんながいなくなつてゐし・・・鏡輔さんまでいなーなんて・・・・・」

シルバは辺りをきょろきょろと見渡しながら進んでいく。人ごみの中を歩いたことはほとんどないので自分が前に進んでいると思つてゐるのだが、人の波に押されており交代しているのだった。

「やれやれ、鏡輔はともかく・・・他のみんなまでいなくなるなんてな・・・・・」

ダークはりんご飴をかじりながら辺りをきょろきょろとしていたのだった。頭のいい彼女は自ら人ごみの中を突つ切ろうとせず、その場で待機していたのだった。

「・・・・鏡輔君がいませんねえ・・・シルバさんたちもいませんし・・・・・」

カオスは金魚を眺めながらそんなことを呟いていたのだった。金魚のほうに意識がいっており、9・1の割合で金魚が優勢だった。狙いは出田金だらうか？

「ま、まさか・・・この私が迷子！？迷わないよつて先輩のすそを掴んでいたはずなのに！」

ミストは絶対に迷子になることはないだらうと思つてていたので非常に混乱していたのだった。きょろきょろと辺りを見渡していくたびにその田の端に涙を浮かべ始めたのだった。

「さて、これから僕はどうするべきだらうか・・・・・？探すにしても誰を目印に探したいつたほうがいいのかなあ？」

僕は人ごみが一番少ないところから人ごみを眺めていた。その中に知り合いはいなかと探しているのだが・・・・・そうそう、うまく見つからぬようだつた。

「……携帯電池切れるし……そつだなあ、迷子の放送でもしてもらおうかな？」

そんなことを考えていたのだが……一向に自体は進展しそうにもないので自分からやつとの思いで抜け出してきた人ごみの中に再び入つていったのだった。

「……はあはあ……なんだか全然進んでない感じかせつぎより離れてるような……」

シルバは先ほどの場所から約五十メートルほどバツクしたような場所に立つていたのだった。現在進行形で彼女は後ろに向かっている。

「……鏡輔わあ～ん！（必死）」

「あ～そろそろ腹がたまつてきたなあ……飴も食つたし、イカ焼きも食つたし……」

ダークは先ほどの店から隣の店、隣の店と食べ物が売っている店の前で立ち止まっていたのだった。現在進行形で彼女は焼きそばを食べている。

「……鏡輔～（バトンタッチの意味をこめて）」

「あ、おじさん！亀さんも投下ですか？へえ、ぜにじがめなんですねえ……」

カオスは先ほどの店からまつたく動いておらず、金魚が泳いでいる隣に新設された小さなプールの中で泳いでいる亀を現在進行形で眺めているのだった。

「……鏡輔君（この亀、とぼけた顔が鏡輔にそっくりだなという感じ）」

「う～ん、う～ん、誰もいない……」

ミストは精神面がほとんどやられていふようすで……ふらふら

した足取りで青白い顔をしながらまるでゾンビのようだつた。現在進行形で徘徊している。

「・・・・先輩、先輩、先輩（まるで獲物を狙つかのよう）（元）」

僕は彼女たちを探して走り・・・いや、人ごみで走れないでの歩いて探していたのだつた。

「あ、ちょうどおなか減つたし・・・」のイカ焼きを食べるかな？」

迷子になつた・・・いや、迷子の彼女たちを探すまでは気を許すことが出来ない。

「う～ん、たれがおいしいなあ・・・」

決して、うつつを抜かしている場合ではないのだ！

「あ、流れ星だ・・・綺麗だな・・・」

今だつてどこかに四人のうちの誰かがいか探している・・・

心情的にはのどから手が出るような状態だらうか？

「・・・浴衣着てる女人の入つて綺麗だな・・・」

「・・・きょ～すけさん！うわっ・・・そつちじやないですよー！」

「あ、いけないいけない！なんだかシルバの声が聞こえたような気がしたんだけど・・・急いで探さなきや！」

そう、僕は彼女たちを探さないといけないのだ！

「鏡輔！こつちだぞ！あ、いま代金を払いますから・・・」

「・・・ダークもいないし・・・」

視界に入れば見つけることが出来るだらう！

「あ、鏡輔君？この亀・・・あ、持ち出し禁止ですか？すみません

「・・・カオスはどこだろ？」

断言してもいい！僕は彼女たちより先に彼女たちを見つけると・・・

「せ、先輩！うおっ！人波が・・・これほど激しいとは！」

「・・・ミストは泣いてるんじゃないかな？」

僕は彼女たちを探し続けるだろう。そう、何があつても・・・。
とえ、この人ごみが消えようとも・・・。

「あ～みんなを探さないと！でも腹減ったから、次は何を食べようかなあ？そういや、さつき金魚を売つてたなあ・・・。祭りつて徘徊するだけでも楽しいからなあ・・・」

優柔不斷な鏡輔はみんなとはちょっとだけ離れた場所でうるうろとしていたのだった。

第十五話・お祭りのお約束！（後書き）

さて、物語は前書きでも述べたとおりこれで終わりなのですが・・・中途半端な感じのが微妙ですね。まあ、きちんとENDは書きますが・・・。END編を書くにあたって、皆さんにお願いがあります。すばり、四人の中で思い入れのある人物は誰かということです。ちょっとあれですが、人気のあつた人物のみ、優遇して後日談を書こうかなと思っています。では、次回は文化祭で何が起つたのか・・・それを書きたいと思います。

第十六話・文化祭の真実！主人公の使い方

十六、

文化祭の当日、鏡輔はあたりを見渡していたのだった。

「うーん、すごいねえ・・・」

「ええ、そうですね」

「まあ、当然じゃないのか？」

同じクラスのシルバ、ダークと共に教室内にいる人たちを眺める。このクラスでは飲食物を扱う予定だったのだが・・・。校長先生の頼みにより、このクラスにはこの高校の反映の歴史がたくさん詰まることとなつたのである。一応、鏡輔たちはこのクラスの入場者数をカウントしているのだが、それ以外にはこれといって何も仕事がないのである。

「こういう仕事はきついね・・・」

「まだ、あと・・・三十分ほどありますよ」

「しかしそれ、いまだに長者の列を作っているというのが信じられないな・・・」

ダークの言葉にうなずきながら、鏡輔とシルバは廊下の端ほどまで並んでいる行列を眺める。廊下の端といいながらも、このクラスは校舎の端のほうにあるのだが・・・

三十分後、行列から解放された三人は他の一人と待ち合わせをしている場所まで歩いていったのだった。結構広い廊下内ですれ違う人たちの数が多く、時折肩などがぶつかつたりもする。そんな三人の元に彼らの担任が現れたのだった。

「お、もう終わつたのか？」

「ええ、終わりましたけど？」

「そうか、それなら悪いんだが・・・。そう嫌そうな顔をしないでくれ。すぐに終わるような仕事だからさ・・・。別に今でなくても構わ

ないんだが・・・地下倉庫の鍵が開いているから悪いが閉めておいてくれ。放課後までに閉めておいてくれ。鍵はこれだから・・・あ、そのまま職員室にもつていいってくれて構わないから・・・それじゃあな

そういうて先生は姿を消したのだった。後に残された三人はどうしたものかと顔を見比べたのだった。

「どうしようか？今から行つたほうがいいのかな？」

鏡輔のその提案に他の二人は唸つたのだが・・・

「そういえば、先ほど二人から連絡があつてですね、少々遅くなるかもしだれないって言つてましたよ？」

「あの一人も他のところの用事できつとおくれてているんじゃないのか？それなら今から地下倉庫にいって鍵を閉めておいたほうがいいだろうな。幸い、地下倉庫は体育館の下だし、待ち合わせ場所が体育館だからちょうどいいじゃないか

「そうだね」

こうして、三人は先に地下倉庫に向かうことになったのだが・・・

「ち、地下倉庫行きの扉が何者かに破壊されてる！？」

目の前に無残に引き裂かれている扉を前に鏡輔は固まつていた。何かくまのような生物が壊したのか、つめのあとが扉の脇のほうにも残つている。

「・・・これじゃ、中に入るのは危険のような気がしますね？」

「まあ、どう考へてもこの爪痕は・・・奴か？」

シルバは既に諦めモードでダークは探偵モードになつていた。鏡輔はダークの発言に冷や汗をかきながらも・・・

「奴つて・・・ラルド君？」

「ああ、そうだ。ここあたりで熊といえばラルド君と動物園にいる熊だけだろうよ？私としては一般生徒にこれ以上の被害をもたらしたくはないし、絶対にラルド君を退治したほうがいいと思つんだ

が？どうだ？」

鏡輔の頭の中でラルド君は咆哮していた。シルバは頷く。
「よくわかりませんが、そんな危険な化け物なら仕留めましょう！
鏡輔さん、大丈夫ですよ……なんてつたつて一人も龍がいるんです
すからね？」

「身の安全は私たちに任せてくれ……鏡輔がいきたくないのなら
別にいいんだが？」

「ダーク、そういうことは僕を担いで言つ台詞じやないよ」

既に鏡輔を担ぎ上げながらそんなことを一人は言つており、鏡輔
はため息をついていたのだった。

階段を下りていった先には二人の人影があつたのだった。

「あ、カオスとミスト……何してるの？」

「……先輩こそ何しているんですか？」

担ぎ上げられている鏡輔を呆れた様子で見ながらミストはそう尋
ねていたのだった。カオスのほうはあたりを警戒しているのか、表
情を険しくしているままだつた。

「……鏡輔君、私たちはちょっと先生たちに言われてこの地下倉
庫にやつてきたんですよ。椅子を出して欲しいことで……そ
うしたら、非常に危ない化け物がこの地下倉庫にいたんです。それ
で、どうにもその化け物が外に出ないように退治しようとしていた
んですけどね……一向に姿を現さないんですよ。気配は感じてま
す」

今なお、相手を見つけようとしているのだろうか？あたりを鋭い
まなざしでにらみつけているといつてい状態だった。担ぎ上げら
れている鏡輔も何かがいることがわかつっていた。

「うーん、隠れてるってわけでもなさなんだけど……」

地下倉庫はほとんど荷物が出払われており、コンクリで覆われた
そこは地下駐車場を連想させた。残されているものは布で覆われて
いる大鏡だけのようだった。

「意外と鏡の下にいたりして……」

一人で歩いていき、鏡輔はどう考へてもこの前目にしたラルド君よりも小さい大鏡にかかっている布を上にあげたのだった。

鏡輔とラルド君の目が合つた。

「ぎやあああああああああああ！」

鏡輔は目の前に本当に現れた化け物から一気に飛び退つた。相手も驚いたのか、鏡の中で“シェー”のポーズをとつていた。

「いましたね！」

「・・・つぶすか！」

「さよならですよ！」

「一刀の元に・・・」

しりもちをついている鏡輔の前に四人が出てきて鏡に向かって攻撃を始める。手加減というものがその攻撃に加えられないと感じる人は十人中零人だろうというぐらいの制裁を鏡の中にいるラルド君に浴びせられてはいるのだった。

そして、最後にしりもちをついている鏡輔を四人で担ぎ上げ・・・

「え、何これ？投げる気？主人公の僕を投げる気？」

「「「必殺！鏡輔粉碎弾！！」」」

そのまま放り投げたのだった。

鏡輔の記憶はそこで飛んでおり、生身の人間が鏡に突つ込んだらどうなるか・・・良識ある人たちならわかるだろう。

頭から突つ込んでいった鏡輔はもう、絵で表現するには生々しくてモザイクがかかっている状態になっていた。その後、カオスの知り合いを呼んできてさまざまな薬を鏡輔に大量投与したのだった。その副作用か知らないが、彼が泡を吹いていたというのを知っているのは処置をした人物と主犯格である四人だけである。主犯格の一人

であるシルバはあわてたように弁解している。

「ほら、ええと・・・鏡輔さんは主人公ですから最後に華を持たせてあげようとしたんです」

見事、その華を散らせてしまった（生きてはいるのだが）鏡輔。残念なことに彼が楽しみにしていた文化祭は彼が目を覚ます頃には既に終了していたのだった。

ちなみに、その文化祭から数年後、当時の記憶を失っていた鏡輔はその事実を知ると教えてくれた人物の前から約一週間ほど姿を消してしまったそうである。誰が彼にその事実を教えたのかは不明である。

第十六話・文化祭の真実！主人公の使い方（後書き）

いつていたとおり、これで終わりです。次回からはENDシリーズです。中には物語には一つの終わりで十分だ！と思う方もいるかもしないんですけど、兩月としてはせっかく登場させた人たちなのでそれに終わり方を用意したいと考えています。さて、以前もいつていたとおり後日談を書くとかいつていきましたが・・・今のところゼロです。よければ感想などにかけてくれるとうれしいと思います！

シルバEND・鏡輔とシルバ（前書き）

さて、今回からそれぞれのENDとなっています。読み終わったら感想を書いてくれるとうれしいです。

シルバEND・鏡輔とシルバ

シルバEND

シルバがようやく鏡輔と合流できたとき、お互い非常に体力を消耗していたのだった。あたりは既に帰宅を始めている人たちが多いのか、人の流れは止まることなく、出入り口となっているところへと向かっている。この辺りではとても有名なお祭りらしく、警察までが出てきている。

「・・・・は、何とか鏡輔さんに会うことが出来ました」

古びたブランコに座つてシルバはそんなことを呟いていた。

「いやあ、正直このままばらばらに帰ることになるのかと思つたけどよかつたよ」

その隣のブランコに座つている鏡輔は何度か足を踏まれたのか足をさすつていたのだった。

「鏡輔さん、怪我しているんですか？」

「怪我・・・どうかな？何度も踏まれたけどどうしたことないよ？だから怪我とは・・・おわっ！」

いきなり足を掴まれバランスを崩した鏡輔は危うく後頭部から地面に着陸するところだった。このままいついたら足の怪我よりも大変な事態になっていたかもしれない。

「・・・・あざになつてます。ほら、すねのちょうどした辺り・・・」

「そう？それより僕・・・かなり危険な状況なんだけど？すね？すねより人間は頭のほうが丈夫だと思うんだ・・・」

何とかしてもとの状態に戻ろうと努力している鏡輔だが・・・・動かないでくださいね？動くとその足へし折りますよ？」

「マジ？」

そのせりつと書いてのけたシルバに恐怖しながら鏡輔はうなずいたのだった。

「え、これで大丈夫ですよ」

鏡輔の足に包帯を巻き終えたシルバは鏡輔のほうを見た。鏡輔はシルバをまじまじと眺めている。

「どうかしましたか？」

「あ、いや・・・ありがとう」

「いえ、当然のことでしたまでですよ。仮に、私がこんな状況になつたら鏡輔さんは当然こうしてくれるでしょう？」

「・・・・・」

黙りこむ鏡輔に不性感を表すシルバ。

「あの、してくれないんですか？」

「あ、いやねえ・・・なんでもないよ。勿論、シルバが怪我をしたときは僕が包帯を巻いてあげる」

ちなみに、鏡輔が黙っていた理由は

「え、シルバって青筋できるの？ 体、僕より頑丈そつだから大丈夫だと思うけどなあ」ということを頭の中で考えていたからである。実際、彼が考えていく以上にシルバは体が頑丈である。

「・・・怪しいです」

「いや、怪しくないヨ」

顔が笑っている鏡輔とジト目でそれを見ているシルバ。彼らの姿は光に照らされてムードはよかつたのだが、いかんせん、状況的には一股をかけていたことをばれて彼女に追及されているような状況であった。

「あ、それよりさあ・・・他のみんなを探さないと・・・
その状況を打破すべく、鏡輔は立ち上がり歩き始める。
「待つてください！」

せつかく包帯をしてあげたほうの足をりんごを握りつぶすような感じでシルバは掴んだのだった。

「ぐつはあ！」

鏡輔はそのまま前のめりに倒れそうになる。だが、シルバに支え

られて何とか難を逃れたのだった。

「・・・せつかく二人ですから少しだけ、一緒にお祭りをまわりませんか？」

「・・・僕としては既に人ごみを回りまくったんだけどね・・・」

「何か言いましたか？」

「いえ、何も・・・」

綿菓子を食べているシルバの隣を歩きながら鏡輔は夜空を見上げたのだった。

「・・・どう? おいしい?」

「ええ、おいしいですよ」

シルバは財布を落としたそうだったの（中身は五百円あるかないか）お祭り代はすべて鏡輔が出しえなくてはいけなかつた。片つ端から食べているのでそろそろ鏡輔のお財布は役立たずになるかもしれない。

「・・・いや、既になつてるよ・・・」

「鏡輔さん、一緒におまいりしていきましょう?」

シルバは鏡輔の手を引いておまいりをしたのだった。しかし、そこでシルバの肩に手が置かれたのだった。振り返るとそこにはちらちらした男性と女性が立つていたのだった。

「あ、君たち・・・カップル? それならここでおまいりするのはやめたほうがいいよ? ここをあ、カップルがお参りすると一年以内に分かれるんだって」

その二人はそういう残して去つていったのだった。

「・・・親切に言つてくれたのはいいんだけど・・・大体僕たちカップルじゃないんだけどなあ・・・」

鏡輔がそういうと、遠くのほうから声がしてきた。どうやら他の三人がやってきたようだ。

「・・・そうですね、私たちはカップルじゃありませんでした。」

シルバはそういって鏡輔の手を掴んだ。

「・・・それなら、これから・・・これから私の彼氏になってくれませんか？」

そういうと鏡輔の元を離れて三人のほうへと走つていってしまつたのだった。鏡輔はその場に立つたままほうけており、シルバの告白を聞いていた近くの男性が彼に言った。

「しつかりしろ、人生つてものはもつと厳しいぞ」

帰り道、三人が騒いでいる後ろのほうでシルバと鏡輔は黙つて歩いていた。鏡輔は意を決したように言葉をひねり出した。

「シルバ、さつきのことだけど・・・

「何でしょう？」

「僕のほうからもお願いしたいんだ

「・・・よかつた・・・

「え？」

「いえ、何でもありません・・・これからも、お願いしますね？」

「・・・うん

先を歩いていく三人においていかれないように鏡輔とシルバは手を取り合つて走つて向かったのだった。

～END～

ダークEND・鏡輔とダーク

ダークEND

「やつといったよ……」

田に涙を溜めながら焼きそばを口に運んでいたダークを見つけると地を這うように鏡輔はダークの元へと向かったのだった。

「ふう、何してるので？」

「……鏡輔にはこれが何をしているのかわからないのか？それは眼科に行つたほうがいいぞ？おえつぶ、いい眼科を紹介しようか？」
「い、いや……遠慮しておくよ。それよりダークのほうが病院に行つたほうがいいんじゃないの？」

たまにおえつといいながらダークは何とか焼きそばを食べ終えたのだった。

「……食べ物に殺されると思ったのはこれで四回目ぐらいだな」「以前にそんなに殺されそうになつたんだ……」

「魚の骨が刺さつたり、スイカの種を飲み込んで胃の中で成長した……」

「嘘ー？」

「……夢を見た。寝苦しいといつたらこの上はないだろ？ な。実は私の家にその映像があるんだが……一緒に見るか？」

「いや、いいよ……」

ちょっと変わったところのあるダークを見ながら鏡輔はようやく他の人物たちを忘れていたのを思い出したのだった。

「そうだった！ ダーク、他のみんなは？」

「は？ てっきり鏡輔側にいると思ったんだが……やはり、迷子になつたのは鏡輔だったのか？」

「いや、それを言つならダークが迷子になつたんじゃないの？ 僕はもう高校生なんだよ！？」

「落ち着け、ここは冷静に考えよつ……」

憤る鏡輔にあくまで冷静なダーク。

「・・・・今考えた可能性なんだが・・・」

「何?」

「我々一人だけが迷子になつたのではないか?」「どういづ」と?」

「つまり、鏡輔と私は知らず知らずのうちにみんなから離れていつしまつたということだ。だから、他の三人はいまだに我々一人を探しているのではないのだろうか? 私一人だけが迷子になるのは忍びない、どちらかが損をするのならお互い損したほうがいいだろう?」

「・・・・・ そつかなあ?」

「とりあえず、他のみんなを探そう。三人が固まって動いていたら我々一人が迷子だったということになるからな」

ダークは鏡輔の手を掴んで歩き出す。

「・・・・・ さあ、いくぞ」

「ダーク、そつちは出口じゃないのかい?」

「・・・・・ お、本当だ・・・失敬、私としたことが冷静さを失つていいようだ。鏡輔、私の手を離すんじゃないぞ? 無論、離しても構わないがその場合は鏡輔一人だけが迷子になつたということにしよう」メガネをくいとあげてダークは再び歩き出したのだった。

「・・・・・ なんだかなあ・・・・・」

その後をダークの手を握つている鏡輔が続いたのだった。

「・・・・・ まつたく見つからないな?」

「そうだね、三人ともいないねえ」

「何周まわつたか覚えてるか?」

「・・・・・ 五周以上?」

「携帯を鏡輔から借りたのはいいのだが、途中落としてしまつたらなあ・・・・・さて、どうしたものだらう、他に考えられる可能性は・・・・・」

メガネがきらりと光つてそのまま何事か考えるような仕草を見せる。まさにその姿は探偵ものの犯人を追い詰めるシーンそのものだつた。

「…………一つ目、はぐれでいる我々と探していると思われるあちらの三人のスピードがまったく一緒」

「でも、途中で反対方向にも進んでみたよ?」

「それは、あれだ……あちらも同じ時間に反対方向からこいつに向かってきたんだ」

どうだといわんばかりのダークなのが、それはそれでおかしい氣もする。

「…………他の可能性は?」

「他の可能性? そうだな……高校生なのに迷子になってしまった我々二人に幻滅して先に帰ってしまった……」

「それはそれで悲しいね」

「まあ、実際に迷子になつたのは鏡輔だけだ。現に私はあそこで鏡輔がやつてくるのを待つっていたのだからな」

胸をそらしてえげつているダークにため息をついて鏡輔は先を促す。

「三つ目は?」

「三つ目か? 三つ目は何か事件に巻き込まれた……そうだな、他の世界に転送されてしまつたというのはどうだろ? つか? 今頃、魔王を倒しているかも知れんぞ?」

彼女たちは龍なのでどつちかと「うと魔王がわなのではないか?」という疑問を鏡輔は覚えたのだが黙つておいた。ここでそれを言つてもこの龍は取り合つてくれないに違ひないだろ?。

「……大体、その仮説はあとどのくらいあるの?」

「あ~次で最後だが……」

「四つ目は何?」

「それは……」

急に黙りこくつてしまつたダークを不振そうに見る鏡輔だが、

遠くのほうから「」かで聞いたことのあるよつた声が聞こえてきたのだった。

「鏡輔さん！ダークさん！」

「あ、シルバだ……」

「む、本当だな……他の一人の顔もあるといふことはやはり私たちだけが迷子になっていたということなのか？」

「あ～やつぱり我々一人だけが迷子だったのですか……」

鏡輔は後ろからそんなことを話している四人を見ている。鏡輔はこの歳にもなつて迷子になつてしまつたのに不覚を感じ、ダークよりも沈んでいたのだった。

「あの、鏡輔さんと何かあつたんですか？」

「……いや、何もありませんでしたよ？」

「そうなの？それにしては鏡輔君かなり元気ないと思つんだけど？」「そうですねえ、元から暗いところはありましたけど……先輩、かなり落ち込んでいるようです」

それぞれがそんな勝手なことを言つてゐるのだが……近くで離されてゐるのに鏡輔の耳には届いていなかつた。いや、一応届いていたのだが右から入つて左に抜けていつてゐるのだった。

「……あ、そういえば……少々、心当たりがあります。先に行つてくれませんか？謝つてきますので……」

「待つておきますよ？」

「いや、他にも用事がありますから……ちょっと、落し物をしていたことを忘れていました」

そういつて四人から離れていくとダークは鏡輔の元までやつてきたのだった。

「鏡輔、すまなかつたな」

「……あ、ダーク……どうしたの？」

「どうしたも、何も……鏡輔は私がお前の携帯を落としてしまつたことを怒つてゐるのだろう？」

「・・・携帯？」

その言葉を聞いて鏡輔も携帯のことを思い出したのだった。

「ダーク！僕、携帯を探してくるよ！先に帰つて！」

そういうお祭り会場に走り出す鏡輔の後姿をダークも追いかけながら呟くのだった。

「何を言つているのだ、私がなくしてしまったのだから私が行くのが筋だ！」

「にやにおう！それならどつちが先に見つけるか勝負しようじゃないか！」

「ふ、望むところだ」

意氣込んだ一人は共にお祭り会場に乗り込んで左右分かれて携帯を探し始めたのだった。

「・・・といつても、僕が持つていたわけじゃないからこいつのほうが不利なのではないだろうか？」

言い出したほうの鏡輔は既に弱腰だった。どこから探していくのかわからずにつらつらとしている・・・と、彼の目に・・・

「あつた！」

自分の携帯が写つたのだった。

「・・・よつしゃ、これで勝ちだ・・・」

携帯しか目にはいつていない鏡輔はそれを拾おうとして・・・

「あ・・・」

誰かの手の上に手を重ねてしまつたのだった。

「すみません！」

急いで手を離したのだが・・・携帯はそのまま上に上がついく。その携帯を追つて鏡輔の視線も上に上がつていき・・・

「ふふふ、鏡輔、私の勝ちだな？」

「ダーク！？」

勝利の微笑をたたえているダークの姿があった。

「勝てない勝負には載らないほうがいいぞ？まあ、この場合は鏡輔

が先に提案をしてきたのだがな・・・

「く、くそう！」

悔しんでいる鏡輔の手に携帯が載せられる。

「・・・携帯、落としてすまなかつたな」

「いいよ、戻ってきたんだし・・・それより、元気ないようだけどどうかしたの？」

「・・・いや、私が元気がないのは鏡輔が元気がなかつたからなんだがな・・・」

「どういうこと？」

不思議がる鏡輔にダークは答えた。

「いや、誰だつて大切な人が元気がなかつたりしたら自分だつて元気がなくなるものじやないのか？他人が違うとしても、私はそうなつてしまふんだ」

そういうつてダークは歩き出す。

「・・・ごめん、僕のせい？」

「そうだな、鏡輔の所為だ・・・一つ、約束して欲しい・・・」

ダークはそういうつて鏡輔の手を掴んだ。

「・・・幸せそうな顔をしてくれないか？私は鏡輔の幸せそうな顔を見るとうれしいんだ。悲しい、苦しいときには私に相談して欲しい・・・相談に乗れないようなことがあつても、私は絶対に鏡輔を幸せにしてみせる・・・迷惑か？」

「・・・いや、うれしいよ・・・」

鏡輔もその手を握り返す。

「・・・そうか、それなら・・・大丈夫だな。さあ、帰るといこうか？」

「そつちじやないよ。思つたより早く見つかつたからまた、二人だけでお祭りをめぐろう？」

「・・・そうだな・・・」

鏡輔とダークは手を取り合つてお祭りの喧騒の中に再び向かったのだった。

「・・・そういうえば、四つ目の可能性ってなんだったの？」

「あ～あれはだな・・・」

黙りこんだダークだったが、意を決したように口を開いて告げたの

だった。

「・・・他の三人がわざと私のために席をはずしてくれた・・とい
う血口中心的な考え方・・・」

END

カオスEND・鏡輔とカオス

カオス エンド

鏡輔の目の前には金魚を何回も何回もキャッチアンドリリースをしているカオスの姿が映っていたのだった。

「・・・・何してるの？」

「捕まえた魚は逃がしてあげるのがマナーです。つまり、キャッチアンドリリース！」

いや、正確に言うなら金魚を捕まえることが出来ないだけかもしれない。既に、彼女が持っている金魚を捕獲するべく作られたものは金魚の脱走によつて使いものにならない状況になつていて。

「・・・おじさん、今度は亀をつってみます！」

「お、じゃあよろしく頼むよ？」

どうやって釣るのか興味があつた鏡輔は黙つてカオスの隣に座つた。カオスはおじさんから渡されたものを見て・・・

「それ、ザリガニを釣るときに使うものじゃないか！」

「え、なんですか？」

割り箸に糸をたらして先のほうにはするめの切れ端がくつついている。亀のほうはどう見てもそれより小さいのでどうやって食べるのだろうか？

「おじさん、これ！間違つているつて！」

「え、あ～本当だ。そつちはザリガニ用だつた・・・」

おじさんは頭をかいて店の裏で何かをやつて・・・数十秒後、戻つてきた。その手に握られていたのは先ほどの釣竿に亀のえさだつた。

「・・・・これ、本当につれるのかな？」

「大丈夫 私に任せくださいよ」

嬉々としてそんなことを言うカオスだったのだが、不安が心を六十パーセントほど満たしたあたりで自分たちがどのような状況に陥

つているのか思い出す。

「そうだった！カオス、他のみんなは？」

「他のみんなですか？ああ、それはですねえ・・・まず、鏡輔君が一番手でいなくなつて次にシルバさんが何者かに誘導されているのか知りませんが見事に人ごみに飲まれました。三番手にミストちゃんの頭が人ごみに飲まれて手しか見えてませんでしたねえ・・・あ、ダークさんはおなかをさすつて近くの屋台に走つていきましたよ？私は順々にお店を回つていてこの金魚のおじさんと話していたんですね。さすが、金魚のおじさんだけあつてご先祖は金魚だそうですよ」

「いや、それは嘘だろ？・・・と思つた鏡輔だが・・・」「いや、事実そうだったとしたらそれは同属を販売してないか？」と考えていたのだった。

「仲間を売るなんて隅に置けませんよね」

「いや、仲間を売る人なら隅どこか牢屋に置いといたほうがいいと思うけどね・・・それより、他のみんなを探そうよ？」

先ほどよりも人ごみが減つてきている今が絶好の機会だろ？。そう思つた鏡輔はカオスに提案したのだが・・・

「いえ、ちょっと待つてくださいますか？いや、舞つててください！」

「どこだ？」

「そこで好きに舞つててください！」

「待つてつて・・・」

「いえ、舞つててくださいね？」

有無を言わさずひょっとこのお面を渡してカオスは自分の作業に没頭し始めた。どうやっても亀を手に入れたいようで・・・鏡輔はしおうがなく渡されたひょっとこのお面をつけて待つていたのだった。

数分後、金魚のおじさんがくじ引きで使われるベルを鳴らす。

「やりおつた！この娘・・・この詐欺師から正攻法で亀をとりあげ

たでえ！」

「あらまあ、おじさんって実は鶯だつたんですね？なるほど、鳥なら確かに取つてきた魚を売るといつことも出来ますね」

どこかずれた会話をしている一人を見ながら鏡輔は首をかしげていたのだった。

「・・・・おかしいのは彼女なのか、僕なのか・・・・どっちだる？」

「どうです？私は狙つた獲物は叩き潰すスナイパーなんですよ？」

「何叩き潰すつて？・・・・バズーカーでも使つてるの？」

「ほら、この手に掴んでいる亀の『鏡輔君』可愛いでしょう？」「そういつて小亀を見せる。

「・・・・『鏡輔君』って何？」

「え、何つて・・・名前ですよ？鏡輔君にも鏡輔つて名前があるでしょ？？それと同じです」

愛おしそうに亀を掴む力オスを見て首を再びかしげる鏡輔。

「・・・・どこが僕に似てるんだろ？」

「ほら、顔なんかがそっくり・・・・」

「・・・・」

亀とがんつけあいをしながら

「どこがにてるんだ？」と考える鏡輔。

「ところで、鏡輔君は私に用事があつたんでしょう？」

「用事も何も・・・・迷子だよ、迷子！僕たち迷子だよ！」

「迷子・・・・舞妓？いえ、舞子ですか？だれです、それ？」

日本語が通じていいのかかなり心配になつてきた鏡輔はその場で数分にわたつて今の状況を事細かに力オスに話し続けた。時折、あくびをしているところを見ると力オスはこの状況を緊急事態とは思っていない。まあ、お祭りで迷子は花見に団子と同じくらいよくあることなのでそこまで緊急事態でもないが・・・・

「とりあえず、みんなを探そう！」

「そうですねえ、それなら手を繋ぎましょ~」

「……なんで？」

「何でも何も……それで先ほどみんなは迷子になつたんですよ？失敗をしたらそれを工夫せねば人間とは先に進めません。ああ、龍は別に構わないんですけどね」

そういうつて鏡輔の手を掴んで二二二二二笑うカオスに鏡輔は一つため息を吐いて歩き始めたのだった。

探し続けること、數十分……

「いないね？」

「いませんねえ~歯わん、ビカビカで金魚をつかまえてくるのでしょうか？」

「そうじやないと思つたび……」

「ああ、手づかみですね？」

「いや、そうじやなくて……」

「どうしてですか？シルバさんとか特にやつそつですよ？それで、ミストちゃんがさばいてダークさんが料理……完璧なトライアングルじやないですか？」

「……」

もはや、これ以上何かを話してもカオスには勝てそうになかったのでとうとう鏡輔は口をつぐんだ。ちなみに、他の三人を探しているうちと前のときも似たようなやり取りがあった。

てつてつてつて……

「鏡輔君、携帯が鳴つてますよ？」

「成金ですか？歩が敵陣に突つ込んで成金ですか？携帯つて駒は知りません」

「……いえ、そうじやありません」

鏡輔のポケットに手を突つ込んで携帯を取り出して鏡輔に渡す。

「ああ、携帯・・・」

「何をぼけてるんでしょう?」

「誰のせいだらう?と鏡輔は思いながらも携帯の相手に話しかける。
「もしもし・・・あ、シルバ?どこに・・・家!?てつきり家に帰
つたって思つてたつて!?そんな!-こつちはずつとコントを・・・
いや、ずっと探してたのに!他のみんなも家にいるつて?あ~わか
つた、それじゃ、これから帰つてくる。うん、うん・・じや、ばい
ばい・・・」

携帯をきつてカオスのほうを見る。

「・・・家に帰らうか?」

「何でですか?」

「シルバたち、家に帰つてるんだって・・・」

「そりなんですか・・・でも、もつちよつとだけ、手を繋いでお祭
りを楽しみませんか?」

「でも・・・」

「お願いします。いえ、私はどのような手を使つても鏡輔君と一緒に
にお祭りを楽しみます」

普段とはどこか雰囲気の違つカオスに戸惑いながらも鏡輔はうな
ずいたのだった。

「あ~楽しかつたですねえ!」

「そうだね、既に深夜だよ・・・・・」

「こー、どこでしようか?」

「さあ、それはちょっとわからなないなあ・・・・・」

お祭りが終わつた後、彼らはそのままコンビニに行つて菓子などを
を買い込むと近くの公園でそれらを食べたのだった。家に帰らうと
して歩き始めたのはいいのだが、カオスに頼つて歩いていた鏡輔は
カオスが道を適当に歩いていたことを知らなかつたために自分たち
がどこにいるのかわからなくなつたのだった・・・・

「・・・・たまには一人で・・・こんなことをするのもいいですよ

ねえ？

「そうだね、僕としては迷子にはこいつらりだよ・・・とあります、一人じゃなくてカオスがいてくれてラッキーだったよ・・・」

「そうですか？それはよかったですよ」

皮肉がまったく通じていない様子のカオスの手を再びため息をついてしつかりと掴んで歩き出す。

「歩いていれば家に着くよね？」

「ええ、家は逃げませんからね」

「確かに・・・そりだらうけどね・・・」

とりあえず警察はどこだらうか？そんなことを考えながら鏡輔はカオスと共に歩き出したのだった。

（END）

ミスト ハンド

「・・・・・はあ・・・・・はあ・・・・・」

人ごみの中を緊迫した様子の鏡輔が駆け抜ける。

「あいたつ！」

「すみませんっ！」

「ちょっと、踏まないで！」

「誤解です！」

そんなことを口にしながら彼は何かから逃げていた。

「・・・・・なぜだ？ 誰が俺を追いかけているんだ？」

鏡輔は迷子になつたほかの人たちを探していたのだが、どうにも、途中から誰かにつけられているようだつた。知り合いだらうかと思つたのだが、知り合いはゾンビのような声を出さないはずだ。

「・・・・・ここまでくれば大丈夫か？」

途中から消え去つた気配のことを考えながらも息を整える。

「・・・・ラルド君・・・じゃないし、ばあちゃん家の池からまた生物兵器でも生まれたのかな？」

その肩を思いつきりつかまる。

「うわっ！」

鏡輔はその手を払いのけると相手の喉元に拳を叩きつけようとして・・・・・

「ミスト！？」

「せ、先輩でしたか・・・・とりあえず、これでほつとしました」

半なき状態のミストがその場になへなへと座つたのだった。

「・・・・なるほど、迷子になつてて不安になつてたのか・・・・」

「・・・・別に不安になつていたとは言つてません！ 大体、先輩たちが私から離れるのが悪いんですよ！」

「一人で近くの階段に座つて鏡輔が買つてきた（ちなみにミストもついてきた）チョ「バナナを一緒にかじる。

「・・・ふう、本当に死ぬかと思いましたよ！普通は喉元に拳をたたき出しません」

「まあまあ、こつちもそれなりに怖い思いしてたし・・・さ、これ食べたら他の人たちを探しにいこうか？ミストみたいに寂しがつてるかもしれないからね・・・」

「べ、別に寂しがつていたわけじゃないんです！先輩が不良に絡まれていなかか心配だつたんですよ！」

「はいはい、わかつたわかつた。ほら、行こう？」

ミストの手を引いて鏡輔は歩き出す。

「・・・わかりましたよ」

不承不承といった様子だが、ミストも階段を下りたのだった。

「ううん、みんないないね・・・」

「ええ、そうですね・・・意外と人が多いですからもしかしたらまた離れ離れになるかもしませんね？」

言つていて不安になつたのかぶるぶる震えだすミスト。

「いや、きちんと手を繋いでいるんだし、迷子にならないと思つんだけど？」

「いえ、わかりませんよ？簡単に考えていいるとすぐに迷子になつてしまします。戦場ではマイナス方向に考えるべきですよ？」

ミストはそういうて鏡輔に引っ付く。

「・・・戦場？ここは祭り場だよね？」と誰かに鏡輔は問いかけたのだった。

鏡輔ともはや離れている距離がゼロになつてあり、ミストはいまだに不安のかほほ、鏡輔に抱きついているような状況だった。

「ミスト、引っ付きすぎ」

「いえ、これでもまだ足りないくらいですよ？」

「足りない？これ以上どうするよ？」

「そうですねえ・・・」

暫し、考え込んだミストを引きずるよりして鏡輔は答えを待つ。
「・・・私を抱っこ、もしくはおんぶするのはどうですか？そうすれば迷子になる確率は減るでしょうね」

「いや、どうだろう・・・おんぶしていったミストがほり、ええと・・・泣いて重たくなるおじいさんになるかも知れないよ？僕、まだ妖怪をおんぶしたいとは思わないんだけど・・・」

「じゃ、抱っこですか？」

「抱っこも却下！」

顔を真っ赤にして叫ぶ鏡輔を見ながら

「何で、先輩は怒ってるんだろ？」とミストは考えたのだった。

「父さん！？」

「あれ？お前はまだいたのか？」

鏡輔は祭りに仲良くやってきていた輝、葵、加奈、碧にたまたまあつたのだった。そして、恐ろしい事実を耳にする。

「・・・あ、そういうえばカオスたちは既に家に帰ってきてたぞ？」

「いや、いやなんだって！」

「来る途中あつたんだ。そろそろ家に帰り着いてる頃じゃないか？」
「家に着いたら連絡するって・・・鏡輔の携帯に連絡がかかってくる頃じゃないかしら？」

葵がそういつたと同時に鏡輔の携帯がなりだしたのだった。
「じゃ、俺たちは祭りを楽しんでくるからな・・・早めに帰るんだぞ？」

そういつて輝たちは帰つていったのだった。そして、心配そうに見てくるミストを見たのだった。

「先輩、私たちも帰りましょう？」

「何言ってんの！文化祭もろくに僕は楽しめなかつたから・・・みんなと楽しめなかつたから・・・ミスト、悪いけど付き合つてもらうよ！」

ミストを掴んでそのまま鏡輔は走り出す。いきなり走り出した鏡

輔の隣に並ぶようにしてミストも走り出す。

「え、ど、どこに？・・・いくんですか？」

「・・・楽しいか知らないけど、僕が一番、好きな場所！そこなら
とつあえず落ち着けるからね」

鏡輔はそういうて先ほどよりもスピードを上げたのだった。

満月が見える丘・・・といつても、もはや山の付近なのが、人は
めったに寄り付かないような場所だった。

「・・・ここからなら月も綺麗に見れるよ？まあ、今日は満月じゃ
ないからあんまり迫力ないけどね」

そういうて芝生の生えている場所に座る。

「・・・綺麗ですね？」

ミストはその場に立つたまま、そう呟く。

「・・・・うん、そうだよ・・・」ここにくるのはものすじく久し
ぶり・・・一年以上来てないからね」

そういうて鏡輔は再び立ち上がる。

「・・・抱っこ、してあげるよ」

「え？でも・・・もう迷子にならないと思いますけど？」

「・・・まあ、そうだろうけど・・・あ～もうっ！」

鏡輔はミストを抱え上げ、お姫様抱っこを強行したのだった。

「・・・・これで、僕が見えてる景色が見えるんじゃない？」

「ふふ、大人になった・・・つて奴ですか？」

「僕は大人じゃないけどね・・・さ、帰ろうか？」

「・・・そうですね、また、この場所に来ますよね？勿論、私と一
人だけで・・・」

その問い合わせに鏡輔は呟いた。

「・・・うん」

END

さて、今回で龍と書いて「ドラゴン」と読む！は終了となつてしまいました。知つてゐる人は知つてゐると思いますが、鏡輔の父親の輝は以前の主人公でした。以前も似たような感じでそれぞれと終わりました。どうだつたでしょ？ちなみに、当初の予定では葵、加奈、碧のそれぞれの子供を主人公として三部作書くつもりだつたのですが、それはどうかと思つて葵だけの子供の物語とさせていただきました。この小説を投稿したときに第一話とシルバエンドが同じだつたりしますが、それは読者の皆さんにこの小説の第一話を思い出して欲しかつたからでもあります。皆さんのに残れば幸いです。では、これからはどうするかわかりませんが、また何か思いついたらかきますのでそのときもよろしくお願ひします。これまで呼んでくれてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5235c/>

龍と書いてドラゴンと読む！

2010年10月8日14時24分発行